330.1
L498gJa

UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 070605792

レーデラー原著
有澤廣巳
大森義太郎 共譯

理論經濟學

東京
明善社

Theoretical Economics

昭和廿二年五月十九日 本郷有斐閣にて購入

この日丁度図書館屋上にて約一月前より行ひ居たりし討論の日にて、
我から經済学を論じ偶々こと效用学説に及ぶや、藤縄より
この学説を、理解するにレーデラーに若くはなきことを聞き、
終りて帰路書肆に立寄りたる所この書の架上にあるを
發見し直ちに購入せり。

田中啓二郎
たなかけいじらう

田中藏書

理論經濟學

330.1 L498gJa
Oriental
12 Aug. 52 Kuno

序

これは Prof. Emil Lederer: Grundzuege der Oekonomischen Theorie, 1922 Tuebingen を譯出したものである。

われわれがこの仕事を試みるに至つたのは、ある意味において偶然的な動機からである。大正十二年の春、教授が東京帝國大學の聘を受けて日本にこられるとすぐ、われわれ兩人はその助手を命ぜられた。そして、教授の歸國されるまで二年の間ずつと、いろいろな點で教を受けることが多かつた。そんなところから教授のこの主著の譯出を思ひたつたやうなわけである。が、單にそれだけではない。内容からいつてもこの書は譯して紹介するだけの價値を充分にもつものだと考へる。

一體、現在の理論經濟學において限界效用學說と勞働價値學說との對立が——いろいろな理由からして——存してゐることは、誰しも認めるところであらう。そこで、入門的の本では兩學說をともかくも一應よく傳へることが必要である。

その仕事をばレーデラー教授はこの書のうちで極めて巧みに果されてゐる。恐らく最も大きな特色の一つであらう。殊に限界效用學説の説明は、そのものとして、實に立派なものである。そして、この原理による分配論を説いて詳しいことは、この方面のあまりよく知られてゐない——限界效用學説を呼ぶ聲の大きいにもかゝはらず——日本の理論經濟學界にとつて、かなりの寄與をなすものではなからうか。教授は、一方、最初の經濟理論上の諸概念を明かにする際には、勞働價値學説の立場を用ゐて、殊に欲望充足經濟と交易經濟とを對照せしめることによつて、極めて明快な説明を與へてゐる。それも從來の教科書などにその比を見ないことである。かうした、いくつかの點から、われわれはこの書を推さうと思ふ。

譯文についていふと、第一章と第四章とは大森、第二章と第三章とは有澤が擔當した。そして、できるだけ讀み易いといふことを主にしたことをつけ加へておきたい。

最後に、この飜譯はずつと早くに上梓すべき筈であつたのを、われわれの單なる怠け癖から、徒らに遷延してしまつた。ために、明善社主中園氏に非常な御迷惑を

かけたにもかゝはらず、常に好意を寄せられて、われわれの勝手な我儘を許してくださつたことは、心から感謝に耐へない。敢てこゝに記す次第である。

一九二六年三月

譯者

原著者序

この『理論經濟學』は新しい體系たることを欲するものではない。われわれの科學においては、誰しもが、根本から新しく建設しようと試みたやうな氣がしてゐる　なぜなら、いまなほ、一般に承認された基礎がないから。われわれの科學の認識論的の根柢も、なほまた、それから出發すべき定理も、いづれも爭はれてゐる。そのことは經濟理論に對する不信をば、たゞに素人においてばかりでなく、われわれの領域の玄人の代表者においてすらも喚び起した。殊に、ドイツにあつては、單に歷史的な並びに經濟政策的な方向への轉向が起つた。しかし、われわれのところでも——そのことは英國、アメリカ、イタリー、フランスや、また、オーストリーにおいても決して忘れられはしなかつた——次のことが益明かに認識されてくる、すなはち、理論的の概念器具を完成することと、素材をば、抽象及び構成といふ手段によつて思惟的に克服することとは、錯綜した事象の說明に對する前提であり、それと共に、單なる瞬間效果以上を獲ようと欲する、各の合理的な經濟政策に對する前提である。かゝる認識からして、殊に近年において、理論に對する高められた興味が

展けてきたが、こゝにある試みもそれに應じようと思ふのである。

われわれの科學の領域からの、大抵の敎科書的の敍述は理論上の諸問題を幾分か繼子扱ひにしてゐる。まづ第一に、學說史的の性質の諸の論議があるが、そのうちで、余は「社會經濟學大綱」第一卷中の、その「方法史並びに學說史の諸時期」におけるシュムペーターの基礎的な寄稿論文と、シュパンの簡潔な敍述（クウェッレ・ウント・マイヤー、科學と敎育叢書中の）だけを擧げる。殊に、シュムペーターの寄稿論文は、また、相當に多くの世人に、われわれの理論上の學說と該科學の總發展との結合をば示した、そして、始めて——マルクスの學說批判的の勞作以來——該科學の總構造をば、その堅牢さと鞏固さとについて、檢した。が、シュムペーターにおいては、科學的の思索と、經濟理論の諸問題に通曉してゐることとを既に前提とする。こゝではいはゞこれに對する先段階として、そして、更には單なる學說史的の敍述以上に出て、われわれの科學の理論的の問題に對する興味をば、諸の根本問題の取扱ひと解決とがわれわれの科學において——いくたびか、實のない爭論のもとに埋められ、非本質的な對立を誇張することによつて歪められたが——既に事實上出來

てゐる限りにおいて、諸の根本問題を立入つて論議をすることによつて、喚び起すつもりなのである。シュムペーターが、いまいつた「大綱」への寄稿論文において並びに彼の「經濟的理論の本質と主内容」においてわれわれの科學內における最も激しい反對者でもが、彼等自身の知つてゐるよりもお互に遙かに近く立つてゐることが屢あり、それだからして、根本原理を深く把捉し、それを總ての歸結において展開すれば、學說の總內容の大部分をば、讀者を錯綜した議論そのものゝうちに引き込まずに、調和できることを指摘したのは、正當である。勿論、この考へは仕舞ひまで貫くことはできなかつた、なぜなら、多くの問題においては――例へば利子問題――統一の端緒も未だ嘗つて存しないから。さういふわけだから、こゝでも、根本見解の諸の歸結をば、それと共に仕上げのできた理論的體系たることを要求せずに、展開することを試みねばならなかつた。が、かゝる體系の根柢をこゝでは呈するつもりなのである、そして、それが既に仕上げのできたものに結びつけられてゐることが多ければ多いほど、われわれの理論內の思想上の仕事の收穫について、勿論本質的のものを悉くこゝで取り上げることはできなかつたにせよ、本質的

のものは一つとして犧牲にしなかつたといふ保證が與へられてゐるわけである。

そこで、余の希望するところは、この小著を以つて國民經濟的研究の初學者並びに興味をもつた素人に經濟理論の思想界への一瞥と、それの問題提起と能力に關する一つの見解とを與へるばかりでなく、既に出來たものを主として示さうと欲するところの、その論究において、恐らく理論家も亦、われわれの科學の諸根本問題に對する、更に進んでの研究が行くであらう方向をば彼に見せしめる示唆を其處に見出すことである。――今日最も多く論議されてゐる經濟的理論の諸問題を、こゝで課せられた課題の性質上、全然論議できなかつたことは、余の、また、大いに意識してゐるところであるが。

種々なる援助と支持とに對して、余はエー・ウェアートハイマー博士並びにヨット・マルシャック博士に負うてゐるが、それらの方々に對してはこゝでも心から感謝する次第である。

ハイデルベルグ　　一九二二年四月

エミール・レーデラー

第二版譯者序

本書が出版書肆に品切となつて以來かれこれ廿年の歲月が流れた。その間、再版發行の話も出たが、その時には原著書の改訂版が既に發行されてゐたから、本書の再版もそれに據るべきであらうといふことになり、その改譯を待つこととなつた。然るにその後、譯者の身邊遽に多忙となり、加ふるに我國の社會狀勢の急激な反動化は、本書の如き經濟學教科書の出版をすら漸次に困難ならしめるに至つたが、就中、ナチスの政權獲得のため原著者がベルリン大學教授の地位を逐はれアメリカ合衆國に亡命するに至つて、その困難は決定的となつた。爾來、本書の紙型は書肆の物置の片隅に放置されたまゝ顧みられなかつたが、激しい戰火の中にあつて不思議にも燒け殘つてゐたのである。その紙型を手にして私は今は亡き恩師たる原著者と畏友たりし共譯者とに再會した思ひであつた。私は即座に、本書の再版刊行を決意した。なぜなれば、今次大戰の終結を見ずして、原著者レーデラー教授はアメリカ合衆國において客死し、共譯者大森義太郎君は人民戰線派事件の審理中に空しく死去し、辛うじて生き殘つたも

のはたゞ自分一人となつたからである。もはや本譯書は自分としては如何なる變更をも加ふべきものではないのである。

本書が經濟學教科書として有する獨特の價値は本書の內容自體が示してゐるところであつて、別段の廣告を要しない。原著改訂版の飜譯權は自分の友人が原著者より貰ひ受け、その譯稿を自分が稿閱したが、現在ではその友人も佛印に抑留されてゐると聞くだけで、その歸還の日は全く豫定されえない。しかし原著初版と改訂版との間には本質的な差異はないのであるから、今日、亡師と亡友の追憶のため、舊版をそのまゝ自分が刊行するとしても諒承してもらへると信ずるのである。

一九四六年三月

有澤廣巳

目次

第一章　經濟理論の概念並びに對象

第一章　經濟理論の概念並びに對象……一
一　經濟理論の現狀……一
二　それの最も普遍的な關係における經濟理論……四
（a）經濟史並びに經濟政策に對する經濟理論の關係……四
（b）經濟理論と社會理論……六
三　經濟理論に對する方法論的緒言……一四
（a）理論の一時的妥當性か、或は恒久的妥當性か？……一四
（b）現實と科學……一五
四　經濟的行爲……二〇
（a）經濟人……二〇
（b）經濟形態の概念（「經濟組織」）……二三
（c）經濟と技術、經濟と法律……二六
五　持續的な欲望滿足に對する關係による經濟的行爲のより詳細な

る規定……三一
六　經濟の諸根本形態……三七
(a)　欲望充足經濟……三八
(b)　交易經濟……四一
α　單純なる交易經濟……四一
β　發達せる交易經濟……四三

第二章　經濟の基本的事實……四五

一　欲望と需要……四五
(a)　欲望の順位……四六
(b)　欲望充足の法則……四七
(c)　現在の欲望と將來の欲望……四九
(d)　經濟と欲望……五〇
(e)　需要と供給……五四
二　財と商品……五六
(a)　財の概念……五六

（b）自由財と經濟財……五七
（c）享樂財と中間生產物……五九
（d）商品の概念……六二
（e）商品生產と發達せる交易經濟……六五
（f）發達せる交易經濟の勞働聯關……六九
三　分業的交易經濟の前提としての貨幣……七三
四　生產手段と資本……七九
（a）欲望充足經濟における生產手段……八〇
（b）發達せる交易經濟における生產手段の資本への變容……八一
（c）貨幣形態における資本……九一
五　收益と利潤……九三
（a）欲望充足經濟における生產の效果（收益）……九四
（b）發達せる交易經濟における生產の效果（利得）……九四
六　使用價値、交換價値、價値及び價格……九八
七　對應する諸概念の照合……一〇一

第三章　勞働價値學說……一〇五
一　交易經濟における交換過程の意味……一〇五
(a) 需要と供給の法則……一〇八
(b) 單なる使用價値は說明理由にならない……一一一
二　勞働價値學說の根本思想……一一二
(a) 勞働價値學說の一般的意味……一一五
(b) 單純なる交易經濟における勞働價値學說の妥當性……一一四
三　發達せる交易經濟における勞働價値學說……一二一
四　第一の困難、利子問題……一二三
(a) 機械採用のための諸條件……一二五
(b) 機械の採用に伴ふ價値剩餘……一二五
(c) 發達せる交易經濟における機械採用に伴ふ錯綜……一二八
(d) 餘剩生產物は永久に餘剩價値であるか？……一三四
(e) 利子の難點は依然として存續する……一三八
五　第二の困難、地代……一四〇

(a) 問題の定立……一四〇
(b) 差額地代としてのリカアドーによる地代の說明(土地の性質の差別)……一四三
(c) 位置の地代……一四八
(d) 土地收穫遞減の法則とその地代に對する意味……一五〇
(e) リカアドーの地代學說より生じる二三の結論……一五四
六 第三の困難、勞働力の價格……一五六
(a) 發達せる交易經濟における「勞働」の性質……一五六
(b) 資本家的交易經濟における「勞働」の價格(古典學說)……一六四
(c) この方面より觀たる經濟的及び社會的全景……一七一
(d) 勞働賃銀論の經濟的試み(マルクス)――同時に利子の說明……一七五
(e) 企業家の社會的職能……一八〇
七 第四の困難、利潤率の平準……一八三
(a) 餘剩價値量と利潤との矛盾……一八四
(b) 利潤率の平準……一八五
(c) ボェーム・バーウェルクの批評の排擊……一九三
八 勞働價値學說の限界……一九四
(a) 生產價格と「社會的欲望」……一九五

(b) 獨占價格……一九七

第四章　使用價値(限界效用)學說……二〇九

一　主觀的(限界效用)學說の根本思想……二〇九

(a) 使用價値への回歸……二〇九

(b) 欲望飽和と限界效用。孤立した經濟者の價値評價……二一四

(c) 主觀的の評價は數量化しえない……二二〇

二　單純なる交易經濟における限界效用原則……二二五

(a) 孤立したる交換……二二六

(b) 買手の一方的競爭……二二七

(c) 賣手の一方的競爭……二二八

(d) 發展したる市場圖象……二二九

(e) 供給及び需要のより詳細なる決定。市場當事者とその價値評價の分析……二三五

三　價値の數量化の問題……二四三

四　主觀的價値學說における勞働の地位……二四五

(a) 單純なる交易經濟における財としての勞働……二五〇

(b) 主觀的價値學說における勞働價値思想の變容……二五一
五 限界效用學說における代置原則……二五八
六 限界效用學說における費用概念……二六二
七 歸屬計算問題……二六四
八 利子問題……二七二
(a) 問題提起……二七四
(b) 生產力思想の排擊……二七五
(c) 利子——發達せる交易經濟における矛盾の徵候……二七八
(d) 利子と生產要素の價格構成……二八四
(e) 發達せる交易經濟の總聯關における利子問題……二九二
(1) 「優先」としての利子……二九四
(2) 資本からの持續的所得としての利子……三〇三
1 增大しゆく人口……三〇八
2 停止せる人口……三一四
九 限界效用學說による生產と分配……三二八
一〇 限界效用學說と獨占價格……三三五

第一章　經濟理論の概念並びに對象

一　經濟理論の現狀

國民經濟においては、今日にあつても依然として總てのことが未決のまゝである。國民經濟的理論の目的の問題すらも、そして、理論の內部においてはその對象の問題すらも。このことはわれわれの科學の、未完成な、或は少くとも危殆に瀕した狀態を語るものである。この危殆に瀕した狀態と同時に、われわれの科學の結果に對して、最も廣い方面の人々が旺な興味をばもつてゐる。それは決して偶然ではない　なぜならば、より廣い方面の人々の眼を惹くのは常に、若い、なほ疑はしい科學、すなはち、新しい問題の起つて來る科學であるから。しかし、理論經濟學が、今日、興味の中心にあるといふのは、なほまた、實際の、日々の經濟からして、幾多の

問題が起つて來て、そして、それらの問題のなかにあつて誰でもが、轉變する事情になんの備へもなく曝されないためには、いかに處すべきかを知りたいと思ふからでもある。けれども、この激しい興味は、必ずしも常に科學を利益するものではない。科學は、大抵、狹い專問研究の孤立した平靜の裡にあつてこそむしろよく榮へる。しかしながら、それだけ、科學の確かな結果だと云ひうるものを總括し、それによつて、更に進んでの研究に課せられる課題の輪廓を畫いて見ようといふ欲望が切實なのである。

諸の根本問題に關する、われわれの科學の最も重要な結果をば、一つのどうにかかうにか纏つた全體として示すためには、われわれは、同じ土地を通り、そして、理論經濟學に置かれた同一の認識目的に到るのだとはいへ、その構造において普通の路とはやゝ異つてゐる路を行かねばならないであらう。といふのは、人を興奮させるやうな爭論の總てを裁定するといふことはこの敍述の課題ではありえない。それとは反對に、科學上の爭論は常に、混亂を來す數多の議論をば悉くは讀者の前に展げることなく、諸の觀念の闡明を助けるに適する限りにおいてのみ、これをば

取り入れるといふやうに、思想をはこんで行かねばならない。もとより——既に豫め強く云つて置き度いが、——この敍述はどこでも通說の單なる摘要を與へるのではない、著者が經濟的過程の全圖を頭に置いてゐることは、具眼の士にとつて氣がつかずにしまふといふことはなからう。しかしながら、その全圖の輪廓は、たゞ理論的の根本前提の歸結をはつきりさせるのに必要な限りにおいてのみそれを畫く。そのほかは理論的硏究のこれまでの成果が、一貫し、支持しうるものである限り、それに據つて議論を進めようと試みる。なぜならば、實際、われわれの科學においては、窮極的に確立せられてゐるものはなに一つないのである。理論と實際との、いな、歷史と理論との關係すらも未決のまゝである。メンガーの方法論の透徹した聰明も、マクス・ウェーバーの基礎的な論文も、リッケルトが經濟學に與へた認識論的の根據もわれわれの科學の歷史的と理論的と、經濟政策的と理論的との方向の間の對立を全く無くすことはできなかつた。また理論の內部においても諸の方法が未決のまゝである、ひとり方法ばかりでなく、具體的の命題すらも。

勞賃の、なほまた地代、資本利子の決定に對しても、經濟學のうちにおいて定說といふやうなものを見出すことはできないであらう。そして、理論的思惟の出發點においてすら、しかも實に經濟學の根本問題はいかにこれを提起すべきかについてのみならず、それを、一體これまでのやうな仕方で提起すべきか否かについても一致をみない。(新しい經濟學において價値問題を全く棄てゝ、價格の問題を以つてそれに置き換へようとする傾向が存してゐるのである。) かゝる事情に面しては、たゞ、われわれの科學の貯へから、一つの、一貫した全圖の埒內において可能なるだけを得來たるといふことのみが試みえられる。このことは、もとより、當然、以前非常に多く說かれた多くの問題を多少背後に押し遣つてしまふに到らしめるでもあらう。

二　その最も普遍的な關係における經濟理論

(a)　經濟史並びに經濟政策に對する經濟理論の關係

以下の論究の問題とするところは理論經濟學である。だから、經濟政策的の問題は論議しない。とはいへ、理論によつて始めて、實際上の諸の處置の效果、經濟政策的の諸の行爲の效程が知りえられる限り、各の理論と經濟上の實地との間にはある聯關が存してゐる。理論なき經濟政策は盲目である、なぜなら、それは、一つの全聯關の認識からして行動せず、從つて孤立した處置たるに止まらねばならないから。それは、せいぜい今日明日の效果を追ふことはできようが、遠作用をも共に考慮のうちに入れることができないであらう、しかも、その遠作用は求める結果を破壞することが屢ある。もし、われわれが、經濟政策上合目的に行動しようと思へば、相次いで至る諸の經濟的狀態を相互に結合せしめて、かくてその遠作用にも留意することによつてのみ、これを爲しうる。しかし、それはたゞ經濟の秩序整然たる全圖を眼前に泛べるときにのみ可能である。かゝる全圖をわれわれはたゞ基礎概念並びにそれぞれの內的結合に手賴ることにより、かくて理論によつてのみ獲られる。

同じことは歷史についてあてはまる。——もつとも經濟史はこの書の課題では

ない。しかし、いかなる經濟史的叙述も理論的概念を使用することなくしては不可能である。いかにして事實を統整することなくしてそれを記載し得よう、そして、いかにして、統整を始めて可能にしてくれるところの觀點を備へることなくして、事實を統整することができようか。いかに多くの經濟史的勞作が、それが、用に堪える體系づけの、確乎たる根柢に基かなかつたがために、無駄になされたことであらう、そしてもしも、經濟的事實を、統整しそしてその經過を理解しうるやうにすべき經濟理論的概念を缺くならば、經濟史をば單なる國家史、行政史と解する危險がいかに近く存することであらう。けれども、經濟史並びに經濟政策に對するこの關係は一つの主として一方的な關係であつて、嚴格にいへば、理論はこの二つの學科にたゞ與へるのみで、それから受けるところは僅かしかない。たゞある意味においては、經濟史に對しては多少趣を異にしてゐる。それについては直ぐ後に述べよう。

(b) 經濟理論と社會理論

經濟史並びに經濟政策との關係よりも理論にとつて、遙かに重要なのは社會科學との聯關である。なぜなら、經濟理論は明かに社會科學に屬する。どういふ具合にそれは社會科學の枠のうちに組み込まれるか？經濟理論は社會學の附屬物であらうか、それともまた、反對に經濟行爲の機構の學として社會に關する解釋とは獨立のものであらうか？この問題は最も議論のあるところであるから諸の經濟理論の示す容相も亦種々異つてゐる。余は、余の取る立場をまだこゝでより立入つて基礎づけることなしに次のことを强調したい。すなはち、余の見るところを以つてすれば、經濟理論は、經濟行爲の、一の「自然的」の、すべての經濟的形態の彼岸に存する力學として考へることはできないで、常にたゞある歷史的に限られたその經濟的、經濟的の性質に從つて定められるべき時代のうちにおける經濟行爲の運動法則を明かにしうるのみである。しかし、この立場は既に云つたやうに、一般には把られない。二三の見解を擧げれば、

(1)この問題をば全然取扱はず、從つてこの問題を肯定もしなければ、否定もしない經濟理論家が非常に多い。彼等にとつては人類の共同生活の、變轉するところ

の形態としての社會は興味がないのである。もし、われわれがリカアドー、或はもつと後の人を擧げるならば、ボェーム・バーウェルクの理論を觀るならば、それはわれわれに社會的機構の圖象を示してゐるが、その社會的機構においては、社會的行爲も亦歷史的發展に從ひうるものであるといふことは故らに度外視されてゐる。ボェーム・バーウェルクにとつては、總ての基礎概念があらゆる經濟段階並びに經濟形態において同じやうに存するのみならず、なほまた、いかに甚だしく事實が變化しようとも全聯關は變らずにある。從つて、一つの經濟の理論は總ての時代、總ての社會形態に對して妥當とする。

さて社會の問題を見る著者において、更に種々なる見解がある。例へば、

(2)ジムメルの社會學は、本質において、社會生成の諸の形式の理說であり、いはゞ社會的結晶學である。彼は上位、併位、下位の諸の形式を分析して、可能なる社會的關係の一の圖式を劃いたが、その圖式は豐かな實例材料を引いてゐるにも拘らず、圖式たるの性質を喪つてゐない。既により多く、一のやゝ大なる時代の實質的內容を事としてゐる、「貨幣の哲學」においてもこのジムメルの社會學の特徴は强く

感じられる。從つて、かゝる見解のうちにあつては、個々の社會科學は廣い獨立を支持しうる。個々の社會科學はたゞ漫然と全組織の中に置かれてゐるに過ぎない。そして、この基礎においては、「自然的な」、「永久的の」理論は不可能のやうに見えるけれども、しかもそれが、社會に關するジムメルの見解から經濟理論に對して出てくる唯一の結論である。

(3)總ての、有機的並びに浪漫的社會觀の代表者にあつてはこれと全く趣を異にする。彼等は社會を以つて――それが一般的の意味における社會であれ、または具體的な民族であれ――個々人の總和ではなくて、個々の人間の行爲においても、はたらきを續け、そしてこれを決定するところの、一の全體だとするからして、社會的聯關、或は「民族精神」が經濟においても亦支配する、そしてその經濟は、從つて、獨り國民的、歷史的に異つた樣相を呈するのみならず、なほまた、たゞ全體としてのみ、經濟がその內に在るところの全體性の表現としてのみ、解されうる。この立場からみれば、抽象的方法はなんら齎すところのないものだときめられ、經濟理論はたゞ、一の全體の社會的意識と行爲とを併せ包括する普遍觀察の埒內においてのみ

可能なわけである。この見方の內部に非常に異つた種々の見解が存する。その一極端をなすものはシェッフレの有機的社會說であつて、それは單に社會をば人間の有機體に比するばかりでなく、社會のうちに有機體の摸寫を求める、そしてそれは社會の歷史と制度とはわれわれの身體の諸の器官と同視することができ、從つて解剖學と、われわれの身體の諸の器官の理說が社會科學に對して路を示しうるのだといふ具合にである。この、見解は明かなことだが、歷史的發展のうちにおける變化を當然否定する。それから、更に「全體觀」への試圖が存する、それらの試圖は、各の經濟的に限られた時代のばかりでなく、各の國民の經濟形態をば、一の一回的な、繰返すことのない、たゞその個別性においてのみ把捉されうる、たゞその精神からのみ意義を明かにされうるところの單一科學的分析に抗するところの全體、だとする。かゝる見解からすれば、勿論、古典派の經濟學說は何物をも與へざるものである、かゝる見解はあの、われわれの科學の最大の所產に眼を留めない。（オットマール・シュパンはこの傾向を距ること餘り遠くない、彼は古典派の學說をむしろ認めてはゐるが。）

(4)われわれは唯物史觀を引離して論じなければならない。唯物史觀は哲學的唯物論となんら共通するところがない。それがこゝでわれわれに關係ある限りにおいては、唯物史觀は歷史的發展の一つの理論を與へるものである。それは、辯證法的發展を通じて行なはれる、生產力の展開を動力だと見る。唯物史觀によれば、生產力は社會階級と對應する。「手押製粉機は封建主義であり、蒸氣製粉機は資本主義である」。一の生產力、例へば、蒸氣の、資本といふ經濟的形態における展開は、たゞそれに對應する階級、ブールヂョア階級が同時に作り出されることによつてのみ可能である。それの權力の增大と發展とは更に資本の生產力を强め、そしてそれは、それ自らを超へて、遂には社會的組織の埓を破り、それによつて新なる社會的組織が準備されるまでに至る。生產力と社會的形態との間には一の相互作用が與へられてゐる。その相互作用が、大なる世界史的過程における個々の歷史的形象の本質を理解せしめる。これに對して、この世界過程は全體として、みれば、一の辯證法的過程である。そこで歷史のこの辯證法的進行の內部において、個々の時代を明かに互に區別することができるのである。その個々の時代は生產力の

發展段階によつても、なほまた、社會的の支配階級によつても同じく特質づけることができる。しかしながら、各の時代の內部においては、經濟的生活は、一時代の、他時代への辯證法的變轉といふ提言をもつては見つけ出すことのできない合則性に從つて行はれる。なぜならば、この提言は歷史哲學的觀察に對してのみ妥當するものであるから。一時代の經濟的機構の法則はそれを以つてはまだ見出されてゐない。それは經濟理論によつて始めて明かにされるべきである。そこで、この、經濟理論には一つの變化する對象が呈せられるわけである。一時代の經濟的の量の運動法則は――そして各時代が特殊な運動法則をもつてゐる――社會理論によつてはなほまだ呈供されてゐない。經濟理論の諸の概念は、なるほど、經濟理論がその經濟的內容を明かにすべきところの社會上の構造によつて共に規定される。かくて經濟的概念には社會的概念が對應する。しかしながら、そのことを擧げたのみでは、繼續するところの、繰返して自らを造り出すところのものとしての歷史的時代の內部における經濟的過程がいかにして可能なるかの課題はまだ解けない。この設問の意味は後に述べるところからして恐らくもつと明かに

なるであらう。（註一）

（註一）こゝでは單に示唆したにすぎない、唯物史觀に關するこの見解はまだ一般にはこの學說の核心として把られない。けれども、それは、余の見るところを以つてすれば、マルクスの著作の結果として出てくる。もし、この二重の觀察法を假定しないならば、經濟的＝社會的の出來事における各の因果的經過を既に辯證法的に形成されたものとして措定する必要が生じる。

(5) 最後に、メンガーなどのやうな見方は遙かに大なる自律をば理論經濟學に許すが、その見方は個々の諸の社會科學を總括して社會に關する一の總科學にする、それは諸の社會科學の各が社會的存在の一、つの、「側面」を明かにし、そして全部が總括されると、社會の「軀幹」をその種々な樣相において示すといふやうな具合にである。明かにわれわれはこゝで、單一科學の自律に對する欲求からして構成された一の圖象、に拘はる。この見解が社會的存在のいかなる解釋にも到達しないことは、丁度、反對に、シェッフレの有機的見解が經濟または法律のなんらの科學にも到達しないと同じである。

三　經濟理論に對する方法論的緒言

(a)　理論の一時的妥當性か、或は恒久的妥當性か？

科學と社會との間の聯關の問題をこゝで既に完全に明かにすることはできないが、次のことは注意したい、すなはち、理論的經濟學の、こゝで展開せしめられる根本思想においては、はつきり別にことはらない場合は、發達せる交易經濟の、しかもわれわれの資本家的經濟の形態における諸の事實が分析の對象をなすのである。なんとなれば、經濟的の諸根本概念の實り豊かな展開と、並びにそれらの諸根本概念を經濟的行爲の一つの圖式に結びつけることとは、共に、余の見るところを以つてすれば、恒久的の妥當性を以つては不可能であつて、各の經濟上の主要時代または主要形態に對して別々に行はれねばならない。この立場の基礎づけは方法論的說明においてゞなくして諸の概念の展開それみづからのうちにおいて與へらるべきである。

しかしながら、より以上の方法論的の緒言はこれを回避するといふわけにには行かないであらう。もしも「經濟的行爲」をわれわれの研究の對象とし、その合則性を求めるならば、もしも「諸の經濟的事實と關係との總體」を分析するのならば、われわれは全體としての、加工されない經驗素材としての實在は科學的に把握することができないといふことを意識しておかねばならない。同樣に實在の一部分としての「經濟行爲」を純粹に抽離し、單に記述することはできない。いかなる科學と雖も現實の記述を以つて盡きるものでないと同樣に、經濟學も亦記述と同義ではない。それればかりではない、われわれは實在一般をその存在においてそれ自體あるがまゝに把捉することはできない。たゞ、われわれの直觀の形式を實在にもつてゆくことによつて、實在が時間、空間の範疇においてわれわれの意識の中へ入ることによつて、實在はわれわれの手に屆くやうになる。いづれの科學も實在にそれの固有の統整概念をもつてゆき、それによつて、實在を認識客體に改容せねば

ならない　なぜなら、實在は單なる錯綜した經驗客體としては更に進んで加工することが全然できないから。　この「統整概念」なくしては各の統覺はどこまでも單なる體驗たるに止まる、　すなはち、意識を通つてゆく、內包的な、一回的な內容であり、他のいづれの意識內容とも比較することができず、科學的思索の恐らく出發點ではあらうが、成分ではない。　純化されない經驗は、無數の科學的並びに先科學的の概念から形成された合成體を表すところの「經驗客體」を與へうるにすぎない。事實のこの堆積は科學的理說に對する礎石としてすら直ぐには用に堪えない。このことは今日既に一般に認められてゐる。　しかし、人は「現象に還らねばならない、　現象こそみづからに理說である」といふゴェーテの云ひ方においてかうした見解は、社會科學に對しても其處此處にまた現はれてくる。　そして、もしそれが「實在」の素朴な、先科學的の觀察が理說に導きうるものであるといふことを表現するのならば、排斥すべきものである。(註一)同樣に、國民的本質に、その特性に、その特質に沈潛することが、その經濟の認識に對し、または財の生產及び分配を、その形態からいつて支配するところの格率の認識に對して前提をなすものであるといふこと

も排斥しなければならない。いかに經濟的行爲の内容は異つてゐようとも、いかに總ての經濟的内容が同一の概念器具を以つて明かにされるものではないといふことが正しからうとも、——理論に對して種々の時代が存するのは、たゞそれが、その經濟的外容において互に區別される限り、かくて、例へば、それが、生産者の範圍と消費者の範圍とが一致するところの慾望充足經濟を表すか、それとも自由交易、自由競爭の經濟を表すかどうかといふ限りにおいてのみである。それが本質的なのであつて、國民性も社會の文化内容も、いづれも本質的でない。

（註一）ゴェーテも亦その間顎骨を現象の素朴なる觀察からではなく、科學的思想の現象への回歸によつて獲た。その際重きを置くべきは、回歸したのは科學的の思想であつて、素朴な、非科學的な單に觀察するのみの眼ではなかつたといふことである。なぜならば、眼はなんらの原理も展開することができない、といふのは眼にはたゞ可視性のみが顯れて思想的の聯關は顯れないから、眼はその思想的聯關を明かにするのを助けるのみである。

われわれの科學の對象をなすものは經濟的行爲であるが、その際、われわれは經濟的行爲の特性並びに諸の内的聯關を單なる記述によつては明かにしえないといふことを意識しておかねばならない。自然科學が自然過程の單なる寫眞では

ないと同じやうに、經濟學は、諸の經濟的形態の「自然に忠實な」記述ではありえない。なんとなれば、單なる經驗は未だいかなる認識にも導かない。殊に、それは諸の事實は或はこれを確立しうるでもあらうが、諸の事實の聯關については何事をも告げえない。

ところで、われわれの課題は、一時代の經濟的行爲を、意味に充ちた、それ自身に完了した全體として理解するにある。このことは次の疑問に導く、いかにして經濟は、一のそれ自身に完了した全體として可能であるか？いかにして經濟を全體として考へ、そして、それによつて、理解することができるか？言ひ換へれば、余はいかなる概念において經濟を全體として矛盾なく考へうるか？かくして、これらの概念は「現實の摸寫」ではなくして、方便、道具であり、それで以つてわれわれは、經濟的行爲の全體をば克服することができる、そしてそれは、それがもはや事實の錯綜した堆積をではなく、それ自身に聯關ある理解されうる一の全體を、たゞこの仕方でのみ一回限り存在しうるのではなく、永く存在しうる、從つて同じ仕方で反覆する一の全體を、表すやうな具合にである。從つて、經濟的の存在と生成とは、それが

根本觀念に把捉されるとき、われわれの科學の認識客體をなす。

これを以つて、われわれは認識客體と經驗客體とを區別する、そして、前者を以て現實の全き豐溢ではあるが、しかし既にわれわれを導いて、事實を分類しそれを一つの宇宙に形成せしめるところの經濟的の根本概念の視點のもとに見られたものを指す。かういふやうにして、各の概念は既に現實を形成することであり、從つて單に經驗ではない、しかし、それだからといつて決して贋造することではない、なぜなら、人間はかゝる統整する概念によるのほかは、全然見ることができず、また合理的に行動することもできないのであるから。普通の人も亦それを用ゐるのであるが、たゞそれに氣づかないだけである、そして、それだから屢非論理的に、また反目的々に行動する。けれど、彼と雖も實在に身を沒し、そして、「そのうちに横つてゐる」なんらかの法則といつたやうなものを追ふやうなことはしない、といふのは、實在のうちにはなんらの法則も支配してゐないから。そこには、たゞ、併び存すること、相次いで存することがあるのみである。經濟的事實を、統一的のものとして見、われわれの目的によつて意味に充ちた統一として形造りうるのは、ひ

とりわれわれである。

だが、たゞ第一の根本概念に、すなはち「經濟人」（註一）に導き到りさへすればいゝこの緒言についてはもう充分である。

（註一）この論究においては、容易に見うるやうに、たゞ、無批判的な經驗主義のみを排撃したのであつて、これに反し、實證主義――經驗主義とは異つた、ともかく非哲學的ではない態度――に對し賛成とも反對ともまだ何も云つたわけではない。

四 經濟的行爲

(a) 經濟人

總ての經濟的行爲の把持者は人間である。けれども、彼は、經濟する（これがいかなる意味であるかは、われわれは直きに見るであらう）ことによつて、一の目的樹立、すなはち、なるべく豊かな、そして骨の折れない欲望滿足を追ふのであるが、その目的樹立は他の目的樹立と衝突するかも知れない。人間はひとり經濟のうちに生

homo economicus

活するばかりでなく、また國家のうちに、民族のうちに、家族のうちに、社會圏のうちに生活するものである。たゞその欲望滿足に對する配慮のみにより、たゞ富の獲得に對する配慮のみによつて導かれるものではなく、他の諸の動機によつても支配される。しかしながら、われわれは、經濟的以外の動機から出てくる總ての行爲をこゝでは考慮しない。われわれは人間が單に經濟的の興味のみをもちかくして、一個の「經濟人」であると假定する。かういふやうに人間を考へると、われわれは意識して現實から離れることになるが、しかし、自然科學者が一定の要素の作用をより明かにするために實驗においてそれを孤立せしめる以上にではない。われわれは基礎概念においてかゝる現實においては行ひえない孤立を遂行する。かくして、われわれは人間を、宛かもたゞ經濟的興味のみをもつかのやうに考へる。われわれは「經濟人」の概念を、更に次のやうに解釋しやうと欲する、すなはち、人間はある利益を獲得できる場合に常に行動し、彼は彼の行爲においてあらゆる利益を求め、そして彼は常により小なる利益よりもより大なる利益の方を求めるといふやうに。更にわれわれは次のやうに假定する、すなはち、人間は理智的にいつ

て彼の利益を求めることができる、すなはち、彼はその事情を精密に認識し、かくてあらゆる情況に見渡しをつけ、通曉し、そして、彼は彼の經濟的行爲における總ての結果を意識してゐる――並びに彼の相手方も彼と全く同樣に考へられる。われわれがこの假定をなすならば、人間の經濟的行爲は完全に一義的に進行し、いかなる異つた可能性も存せず、われわれはその關聯において必然的であり、そして、これと異つては全く考へることのできない行爲の、一の經過に對する。

もとよりこの圖象は現實と一致しない。が、われわれの前提からの誤つた推論を避けるには、そのことを知るだけで充分である。更にわれわれは、この「經濟人」が一の空虛な僞制ではなくして、現實のうちに近似的にわれわれに與へられてゐることを確立しうる。交易經濟においては各人はその利益を求めるやうに傾いてゐるのみならず、また餘儀なくされる、なぜなら、これが彼の存在の條件であるから。たとひ現實において純粹に實現はしないけれど、落下の法則も決して僞制ではない、といふのは、それにも拘らず、それは近似的に現實にも適合し、そしてわれわれは自然過程の現實的の經過を、その假定のもとに理解することができるから。

しかし、同じことが「經濟人」について云はれる。「經濟人」を發見するためには、勿論、選擧集會や家庭の圏内にや、劍術道場に行つてはならないんで、經濟生活が高調に達してゐるところに、だから、取引所、カルテル事務所、工場會計掛において探さねばならない。經濟生活の決定的な中心においては何處でも、人間は「經濟人」であり、祖國も家族も道德も知らないし、また、同じ格率に從ふ人間の間で經濟的に支へて行かうとすれば知りえないといふことを見るであらう。

全く單純な、誰れもの知つてゐる經濟生活の事實が、そのことをわれわれに示してくれる。各の麵麭屋は、或は近所で人がパンに支拂へないために餓死するかどうか？などゝいふことには拘まはないで金を勘定臺に置くお客にパンを賣らないであらうか？また各の百姓はその牛乳を(それがそこで加工されて贅澤食物になるカフェーや菓子屋に賣らないであらうか、よしや彼の朝の新聞が肺結核の小兒の率が年々增加することを告げるにしても。パンと百姓はこれと違つた行爲をするだらうか、また爲しえようか？彼等は貧しい人々がその生産物をもつと甚しく必要とする場合にも、その商品を支拂ふ力のある美食家に賣拂はねばならぬ、

パン屋や百姓は、彼等が生産の繼續と彼等自らの生存のための資金を獲るときにのみ、彼等の生産を續けることができるのだから。もし、彼等が彼等の商品を遣つてしまへば、彼等はその經濟的存在を喪つてしまはなければならない。

人間の利己的な態度はたゞ經濟的總聯關の機構によつて命ぜられるのみであつて、人間は「天性においては」、「經濟人」ではないと假定した場合にすら、人間を「經濟人」といふ型に入れてみることはいづれの場合にも誤りではない。この型は他の諸の根本動機からの構成よりも現實的である。これらの他の動機、道德的宗教的などの動機も發達せる交易經濟においてなるほど高い度ではたらきはするけれど、しかも經濟生活はそれらによつて鑄造されるのではなく、これらの非經濟的の動機はたゞ周緣においてのみ、恐らく生産行程の終了の後に始めて――悲しいかな稀に、といへる――妥當するに至るのである。(註一)

(註一) 近頃、理論的な側からも亦(シュムペーター)「經濟人」の概念は問題とされた。けれども、これはたゞ(シュムペーターのしたやうに)理論經濟學を人間から全く引き離して量關係の聯關として、從つて純粹に量的に構成するときにのみなしうる。余はかゝる觀方を可能だと思はな

い。それはたゞ、無意識的にせよ、意識的にせよ「經濟人」を補足的に現はれしめてのみ遂行される。（このことはシュムペーターにあつても、その「經濟發展の理論」において、勿論一つの特異な仕方でではあるが、起つた。）いづれにしても、この見方は國民經濟的聯關の序說的な敍述に對して適當でない。

(b) 經濟形態の概念（經濟組織）

經濟人の概念は、經濟的行爲がその中で一義的の行爲として爲されるところの枠を形造る。經濟的行爲の內容は一面には人間の欲望に、他面には生產の方法に依つてきまる。經濟的行爲の諸の形態は更にその中において生產が行はれ、消費が行はれるところの社會上の組織に依つてきまる。これらの經濟的行爲の形態は極めて多樣である。それは、生產者の範圍が消費者のそれと一致するか、または生產と消費との根本的な分離が存するかに依存する。これは大抵の場合、欲望のための生產が存するか、または市場のための生產が存するかの問題と一致する。更に、自由競爭が市場において支配してゐるか、または生產者や消費者が、或はそれの若干の階級が組織を作つてゐるか、人格の完全な自由が存するか、それともまた

民衆をば支配的階級または生産手段へ束縛することが行はれてゐるか、といふことが本質的である。これらの事實はたゞ一部分しか法律形式のうちに沈澱しない、從つて法律形式は決して經濟形態または「經濟組織」を認識せしめるものではない。なんとなれば、經濟にとつて本質的なことは經濟はひとり規定や命令或は人間の協定によつて存續するのみでなく、それはまた一の內經濟的循環によつて絕えず維持され、再生産されるといふことである。そして、その內經濟的循環の分析を成し遂げ、その合則性を呈示することが凡ゆる時代の經濟理論の課題である。それであるから、「經濟人」はたゞ、一般的に經濟理論を可能ならしめるために基礎を造るにすぎない。經濟理論そのものは「經濟人」の假定を以つてはまだ與へられてゐない。言を換へていへば、經濟理論を「經濟人の自然史」として展開することはできない。

(c) 經濟と技術、經濟と法律

經濟と技術。技術的者と經濟的者とを混同してはならない。經濟的行爲は各

ある技術をばもつてゐることはもつてゐるが、しかし、技術、それの特性、財が作り出されるところの方法は經濟の形態について何事も語らない。同樣に、常に物理的の餘剩收穫であるところの技術上の收穫はより大なる、または、より小なる經濟上の合目性に關してなんら語るところがない。一の生産の技術上の外容は、それの經濟上の性質は變ることなしに、根本的に變りうる。鐵工業における、古い精錬法からシーメンス＝マルティン爐に至るまでの生産技術の發達は、資本家的企業のうちにおいて、かくて同一の經濟形態の中において行はれた。また反對に、經濟的外容は、技術上の行程にはなんの變化も起ることなくして完全に變りうる。例へば、織機で働いてゐる家內織工が前拂をされ、そして、一つの資本家的企業(前拂工業)の成分となる場合のやうに。最も明瞭に經濟と技術との範疇の相異を究めたのは、ゴットル(註二)である。それによれば、經濟は欲望滿足における行爲の秩序であり、技術はこの行爲の遂行における秩序である。經濟は上位の範疇である。といふのは、技術は常にただ一定の經濟の枠のうちにおいのみ存してゐるから。經濟は常に技術に問題を課する、同樣に解決の方法も經濟によつて決定される。(技

術的」の理性は經濟上の目的を遂げるべき路を指示する限りにおいてのみ、人間にとつて重要である。從つて、技術によつて提議された路が目的にかなつてゐるかどうかを判斷しうるためには、各の技術上の計算を經濟上の單位に換算しなければならない。それは經濟の標準において表はしてみて、その遣り方が有利であるときにのみ、目的にかなつた路である。抽象的の、技術的の合目性は經濟的行爲の目標としては馬鹿げてゐる。經濟は、また、いかにしてその行程におけるわれわれの費用を互に比較しうるかに對して標準を與へる。例へば、技術家にとつてはより、少い力の消費を以て同一の目標が達せらるる凡ゆる方法はそれだけで有利である。しかし、經濟家はこの――技術的に或はキログラムにおいてでも表はされた――力の消費がより大なる、これまで用ゐられた力の消費よりも高價ではないかどうかを檢しなければならない、そして、それぞれ、その結果によつて或は技術家に同意することもあれば、またその提議を却けることもあらう。

（註一）社會經濟學大綱第二卷におけるゴットルの寄稿論文、技術と經濟を參照。

「經濟と法律」とは領域を同じくする　それらは社會的存在の中に動いてゐ

る。しかしながら、その見方は根本的に異つてをり、從つて、その用ゐる概念も亦さうである。經濟理論は、經濟的行爲が加工され、そして理解されうるための概念を必要とする。法學的概念は事實素材をば制御し、形式化するために構成される。この形式化は、一定の事象に指圖が結びつけられるやうな具合に行はれる。だから、理論經濟學の概念は分析的であり、法學のそれは目的論的である。法學的概念の構造はいかなる結果を獲ようと欲するかに全く依存してゐるから、從つて、その構成は立法者の意志に依存してゐる。もしも、われわれが法律そのものから、または他の根源から立法者の意志を明かにすることができないならば、用語法も、なんらかの道德的格率も、經濟上の合目性の觀點も、いづれも、一の法的に關係ある概念の內容を構成するためにわれわれを助けることができない。立法者の意志に關係しないところの立法者の言葉は皆餘計のものであり、從つて有害である。國民經濟の理論的概念は法學的概念と同じく目的から構成されるべきものだが、たゞ、この場合には、目的は人間の態度の規制でなくて、經濟的行爲の分析である。見方の相違はどの概念にも表はれる、例へば、支拂とは法律家にとつては、それによつ

て一つの債務が辨濟される、債務者の債權者に對する義務が除かれるところの行爲である。經濟學者にとつては、支拂は、それが經濟的の量の間の等價を表す限りにおいて興味がある。例へば、所有といふことは、法律家にとつては、中心的の法律制度として本質的であり、所有の概念はいかなる目的を立法者が達しようと欲するか、かくて、例へば彼が社會を個人主義的なものとして建てようと欲するか、それともむしろ共産主義的のものとして建てようと欲するかに全く依存する。理論經濟學者にとつては、所有は生産手段または消費財に對する處分力と同義であり、所有は、それがいかに商品の分配行程、生産行程に影響するかに關して、ある役目を演ずる。だが、これらの總ての相違は經濟理論そのものの說明の後に遙かに明かになるであらう。

經濟學も、法學も、なほまた技術もいづれも皆一の全體性を探究する、しかし、個々の學科の興味を惹くのはそれぞれに異つた聯關である。マクス・ウェーバーが、諸の單一科學の諸の研究領域の根柢をなすのは「物の事實的の聯關」ではなくして「問題の思惟的聯關」であるといふときに、それを云ひ表はすやうに。從つて、科學は

どれも一の全體性を與へる、そして、この全體性は――メンガーなんぞの考へたやうに――合計されて社會に關する「總科學」となるものではない。諸の單一科學は互に影響し合ふことはできるが、それは決して集つてなんらの全體も與へるものではない――それは、その合計について、宇宙としての世界の意義を語るものではない。この問題は哲學に殘されてゐる。

五　持續的な欲望滿足に對する關係による經濟的行爲のより詳細なる決定

經濟とは何か？　これよりも簡單なものはないやうに見える。ある人が、經濟的だと云はれる場合には、われわれは、彼がその手にしてゐる財の貯へを以つて合目的にやつてゆくことを心得てゐるといふことを意味する。われわれは更に、例へばある加熱方法が經濟的であることについて語り、そして、この方法においてはある他の方法よりも高い程度において燃料が合目的に使用し盡され、從つて、その燃

料から作り出される熱量がより大であるといふことを意味する。更に仔細に檢するならば次のことが見出される、すなはち、人間生活の總ての方面において經濟性を云爲することができることと、ある物財の貯へを以つてする家計においてのみならず、もし人間の行爲が合目的に企てられたときには、それの總てにおいて、同じやうな行爲、すなはち、求める目的に到達するためには使用せねばならないこと少い手段をばなるべく僅かな支出でなるべく大なる效果が獲られるやうな具合に合目的に處置することの存することが見出される(經濟的原則)

かくて、手段の經濟は人間活動の總ての領域において一つの大きな役目を演ずるものであつて、遊戯や競戯における、一見無用な、無批判的な觀察者には「無目的の」やうに見える行爲も亦手段の一定の經濟に支配されてゐる、そして、それが實にその行爲にその刻印と固有の魅力とを與へるのである。この、總ての理性によつて指揮される人間行爲の同種性は必ずしも常に鋭く意識に現れない、なぜなら、人間を指揮する諸の目的は、直ちに認識しえられるものでなく、そして、よし認識しえられる場合にも、それは誰にでも承認されるものではない。そこで多くの行爲

は非合理的のやうに見える、元來はさうではないのだけれど。(註一)

(註一) 例へば、ある人がその經濟をやつてゆく際に「放縱にやる」傾向をもつてゐるとすると、彼にとつては、天性「經濟的」な人間には全く馬鹿げて見える行爲が合目的である。兩者は互に理解しえない、なぜなら、各違つた格率に從つてゐるから。

同樣に明瞭なのは、目的が相反してゐる場合に、どの行爲が合理的であるかを確立するには、どの目的がより高いかをそのときどきにまづ決しなければならない。しかし、そのときにも、決定ができたのちには總ての合理的な行爲は、最少の犧牲の支出を以つて最大の效果といふ公式に從つて矛盾なく理解されよう。

さて總ての行爲を指して經濟的と云ひ、從つて、理性的な人間の所爲の全內容を藝術家の活動に至るまで、また輕い遊戯に至るまで、經濟と呼ぶのは不適當であらう。もしも「經濟的原則」に從つて行はれる總ての行動を指して經濟的と云はうとすればさうせざるえないでもあらう。この意味においては正に總ての理性的な行爲が經濟的である。そしてしかも、われわれの腦髓の構造の上から、またわれわれの意識の秩序の上から必然的に經濟的である。なんとなれば、われわれは、經濟

れわれは、これから、だかない。きでく全はとこるす動行、へ考にうやる破を則原的

とこるすと準標の爲行的濟經を實事な的式形純、この、りあで式形な的在內の識意の

るなはなんら意味をなさない。從つて、われわれはその目的の內容的決定によつて

それを特質づけねばならない。われわれは、(持續的の)欲望滿足を目的とする、物質

的財の(しかも物財並びに直接の給付の)有償的調達を對象とする總ての人間の行

爲を指して經濟的行爲と云はうと思ふ。その際支出と效果との關係がなるべく

うまく行つてゐるといふことは旣に前提されてゐる、なぜなら合目的な行爲と

いふ場合にそのことを自明のことゝして假定するのであるから。この定義にお

いて「物質的財の有償的調達」といふのは第一に交易を通じての財の調達を意味す

る、しかし該定義は欲望滿足が交易を經ることを要しないで、生產者が或は生產

者の經濟がたゞ自己の欲望のために働き、從つていづれの生產も豫めある欲望を

考慮して行はれるところの經濟にも適用しうる。「欲望滿足」といふのは物財であ

れ、勤勞給付であれ、物質的財の所持に結びつくところの總ての欲望の滿足を意味

する。經濟は欲望に關する裁判官ではない、それは、欲望を、それが計算に入れる

所與事實として受取る。

該定義からして次のことが出てくる、すなはち、この枠においては經濟的行爲は、その動作のより詳細な内容によつてではなく、たゞ、それの欲望滿足に對する「關係」によつてのみ特質づけることができる。だから、ある行爲がわれわれの意味において「經濟」に屬するか否かは、それの内容から推すことはできない。例へば、化學工業のある企業における生産行程は疑もなく經濟に屬する、なぜならその生産に働く總ての人の行爲は、欲望滿足のために物質財を作り出さうといふ目的をもつてゐるのであるから。そして、部分行爲はいづれも最少の力の支出を以つて最大の效果が獲られるやうに遂行されるであらう。しかしながら化學工場におけるこの作業そのものはまだ經濟行爲ではない。例へば、同じ過程が科學的の實驗室で行はれたと假定する、さうすれば、その技術的過程の直接の目的は科學的興味の滿足ではあるが、しかし欲望の滿足ではない。かくして、經濟的行爲はそれの内容の、記述によつて特質づけることはできないので、たゞ、人間の欲望に對する關係によつてのみ特質づけることができるのである。經濟的行爲は金や銀のやう

に、總括すれば一義的であるところの諸の徵表の集積によつて自然科學的に特質づけることはできない、なぜなら、人間の行爲は、それぞれ目的關係に從つて、われわれの意味において「經濟的」であることもあれば、さうでないこともあるから。なほまた、いかなる行爲も經濟的者の範疇から除外できない、そして、歷非行爲、不作爲をすら、いな、破壞をすらも、われわれの定義からいつて「經濟的行爲」だとしなければならない。例へば、あるカルテルにおいて、ある使用人の機能が、餘り多く生産されすぎはしないかを管理するにあるならば、この生産を妨ける管理は經濟的行爲である。同樣に殘餘をよりよく賣りうるために、過剩な收穫の一部分を破棄すること——かくて和蘭人(註一)が香料輸入品の一部を燒却したことなども——該定義の意味においては「經濟的行爲」である。いまや次のことが明瞭になる、すなはち、ある行爲に經濟的といふ刻印を押すのは決してその行爲の內容ではなくて、たゞ欲望滿足に對する關係だけである。(註二)

(註一) 和蘭東印度會社は、經濟理論の存する以前に永くこれを實行してゐた。もしも、多くの船が歐羅巴にもつてきた積荷の全部を市場に投出したならば、賣却は損失を以つてせずには不可

能であつたでもあらう。事實は巨利を博したのだが。

（註二）余は、他の定義は總て廣きに失するか、または狹きに失するものだと思ふ。例へば、「誰かに對して財産の使用、獲得または維持に役立つ總ての動作の總體概念」を經濟と呼ぶ」フリードリッヒ・ユリウス・ノイマンの定義（國民經濟學の基礎、テュービンゲン一八八九）も狹きに過ぎる。國民の大多數が「財產」を手にしてをらず、そして明かに、經濟的動作において、第一に「財產」に想ひ及ぶことがないといふ事實に對して、やゝ奇妙に見える定義である。近代の經濟においては、所得といふ範疇が、これに劣らず重要な範疇であるから、定義はより廣くして、欲望滿足に基かしめねばならない。

六　經濟の諸根本形態

經濟行爲の目的――欲望滿足――はいろいろな形態において追求されてきた。歷史上の研究はやうやく約百年以來始めて熱心に、過去の人類はいかに經濟したかといふ問題に向つた。しかしながら、われわれの目的にとつては、全ての經濟史の爭論を解決することを必要としない、經濟の若干の根本形態がその主要性質においてわれわれに明かになれば足りる、それによつて理論的觀察の基礎的な

觀點を展開せしめるために。その際、全く原始的な種類の經濟、すなはち自然民の個人的の食料搜索については說明しないことにする。(註一)そして、一般的にたゞ歐羅巴の文化領域内における若干の最も本質的な形態だけを問題としたい。時代別はこゝでは經濟上の觀點に從つてする。

(註一) これに對しては、カール・ビュッヒャー「國民經濟の成立」を參照。

(a) 欲望充足經濟

これは、それにあつては生產者の範圍が本質において消費者のそれと一致するといふことによつて特質づけられてゐる。それは、例へば、自己の土地で家族にとつて最も必要な食料を作り、同樣に、織物用の植物なども作り、それを靜かな冬の日の間に紡ぎ、且、織り、そして最後に原始的な工具を以つて自己の道具をこしらへ、或は少くともそれを維持してゆくところの、自足的な農夫經濟の場合である。偶然的な交換はこゝにおいても考へられるかもしれない。しかし、本質的なのは消費の大部分のものが自らの勞働において作り出されるといふことである。この性質は中世の大なる莊園經濟において一層明かに現はれる。この莊園は一の分業

的の組織體であつて、そして、そこでは經濟指揮者(主長)の計畫に從つて勞働が分配され、主家族の諸の欲望に應じて指揮されるものだと考へねばならない。かゝる莊園においてはわれわれはやゝ進んだ分業を認める、農業上の雇人、園丁、馬丁などや紡績所や機織臺における下婢、手職人、錠前師、指物師、桶工、武器鍛冶など。これらの者は皆主長の指圖に從つて、豫め知られてゐる欲望、そしてその順位は主長によつて確立される欲望、のために勞働に從事する。これらの欲望の滿足といふことに照して總ての勞働が組織されてゐる。こゝでは、また、どの手工業にもその後繼ぎのあるやうに配慮されてゐる、從つて將來の諸の欲望も既に豫め慮かられてゐる。

さて、われわれの目的に對しては、實際に總てが合理的に嚴密な計畫通りに行はれるかどうかは本質的ではない、なほまた、欲望の一部は交換によつて滿足されはしないかといふことも、本質的ではない、本質的なのはたゞこゝでは一の非常に發達した分業的の生產が中心の地點から見渡され、指揮されて直接に欲望の充足に向けられるといふ事だけである。こゝでは生產者と消費者と、――はたゞ生

産者の概念を相當に廣く解しさへすれば——一致する。主家族並びに總てのそのために勞働してゐる者が自らの欲望、といふのは、主家族並びに總ての勞働してゐる者の欲望のために活動してゐる唯一の生産者である。かくして、生産と消費の、一の封鎖的な繰返して更新する環が成立する、そしてその環は常に元に戻つて來、外からの助をなんら必要とせず、常に更新しうる、もしも、働くに充分なだけ人間が存し人間が餘りに急激に増加しないで、彼等の手にしてゐる土地によつて生活できるならば。この勞働組織——その收穫物は直接に生産場から消費者に移り、そして、一定の消費行爲に對して既に豫め定められてゐる——の内部において、種々な組形が可能である、例へば固有の農業者階級の組成も可能である、もしもこの農業者階級が全團體のうちに止つてをり、まづ自らのために生産し、それから領主に對して一定の給付を呈供し、そして、その領主はまだ領主でその設備(聯馬や、農具のやうな工業製品など)を以て彼等に手を藉すならば。こゝにあつてもなほ、生産と消費の統一が存し、こゝにあつてもなほ、一定の欲望のための勞働がこゝにあつてもなほ欲望充足經濟を特質づけるところの交易の缺除が存してゐる。

(b) 交易經濟

a 單純なる交易經濟

莊園經濟のうちにおいて個々の生産者が獨立して、固有の經濟的存在を保つと假定すれば、最も簡單に交易經濟の圖象を畫くことができる。さうすれば、分業が一層進んできて、自分では使ひ盡しえない生産物を作り出すところの、簡單な生産手段を具へた生産者が非常に多數に存するわけである。彼等は、その必要とする財を獲、且翌年の生産を繼續しうるためには、その生産物を互に交換しなければならない。かゝる單純なる交易經濟においては、いづれの生産行爲も各一つの交換行爲を必要とするが、その形態(物々的に行はれるか、それとも貨幣によつて行はれるか)については余はこゝではまだ何事も述べない。この單純なる交易經濟においても亦、さし當つて、一定の人の一定の欲望に對する生産が行はれうる、從つてまづ大體において註文に基いて生産され、そして交換は、交換者についても、また交換財についても豫め確定してゐる。勿論、これからして、不定の交換行爲に對する生産に到るのは僅かもう一歩である。假りに、例へば、個々の生産者はもはや互に

恒常的に結合してをらず、財製作の――たゞ慣習的のものにすぎないにせよ――組織がもはや存せず、この嘗ては統一的に組織されてゐた人間群の全經濟が分裂して個々別々の經濟になると假定しよう。さうすると、ある生產者に對しては(例へば農產物の剩餘について見た場合の農夫、工業的生產內における陶工、桶匠など)購求者との結合も緊密でなくなるであらう。すなはち、相互に代替しうる、生產物、衣服、靴、裝身具などのやうに個人的の欲望に適合してゐなくてもよい生產物を製作する者は總て、その生產物の生產に際してそれの購求者の全體を眼中に置くであらう、そして、この購求者の全體は既に一つの市場であり、その市場に對して彼等は生產するわけである。しかし、問題になるのは常に一の封鎖的な交易圈であり、交換行爲の內容をなすものは、常になほ生產者の手から出て直接に消費者を求める生產物である。

b 發達せる交易經濟

發達せる交易經濟が、それ以前の段階と異るのは次のことによつてである。すなはち、それにおいて全部の生產が生產者にとつて效用あるやうにされうるのは

たゞ彼が生産物を交換といふ迂路によつて、他の生産物に變へるときのみだ、といふことによつてである。しかし、かく變へることは發達せる交易經濟においては常に間接に起る、すなはち、生産者がまづ一般に承認された交換財(貨幣)を手に入れ、そしてそれからこれをば、彼の必要とする生産物と交換するのに費すといふやうな具合にである。かくて、發達せる交易經濟は常に貨幣、貨幣經濟である、そして、生産物相互の直接の交換關係がうち立てられないで、たゞそれの「價格」すなはち貨幣に對する生産物の交換關係が直接に現はれる。この交換關係のうちにいまや總ての生産物、また生産手段も、從つて生産物を製作するための工具や並びに勞働給付も入り込む。さらに進んで、この經濟形態に本質的なのは、經濟する者の努力が、上に擧げた理由からして直接に欲望財の獲得にではなくて、交換財、すなはち貨幣の獲得に向けられるといふことである。なんとなれば、貨幣が總ての財への通路を開くのである。なるべく大なる貨幣上の收益を獲ることが發達せる交易經濟の目標となる。すなはち、發達せる交易經濟においては、生産者が生産するのに必要とする生産物(原料、機械、勞働力)は總て貨幣において表現され、かくて彼が製作

する生産物は總て、賣却された後には、貨幣形態を取るからして、こゝでは、生產に投じられた貨幣額(費用)と生產から獲られた貨幣額で以つて、從つて「收益」を表すところの、この兩方の額の差で以つてその生產の合目性を明瞭に讀み取ることができる。いまのところは、發達せる交易經濟における、經濟のこの一般的形態を示しうるに止まる。いま用ゐた諸の概念が理論に對していかなる意義をもつか、これに到達するのがこれから後の部分の敍述の使命である。

第二章　經濟の基本的諸事實

一　欲望と需要

凡そ經濟の目標は、欲望を滿足することである。それゆゑに、欲望はまた經濟行爲の方向を決する。もとより、人間の欲望は不變のものではない、それで、これが變化するときには、經濟行爲の內容もまた變つてくる。欲望は移り易いものであるから、變化させて利益が上るなら、ひとは、これを變化せしめようと目論んで、行動する。發達せる交易經濟では、人間の欲望が變化することは、多くの生產者にとつて利益であるから、彼等はこの欲望を變化させようと努力する。欲望は――この理由からしても――發達せる交易經濟では急激なる變化を免れないのであるが、しかるに封鎖的欲望充足經濟では、その性質は遙により恒常的である。

(a)　欲望の順位

われわれは欲望をある順位に從つて區別する。しかし、この順位は全く主觀的である。われわれが、ひとりの人の、若しくは、一社會層の、欲望の順位を識るならば、また、その經濟行爲が先づもつて何に向ふだらうかがわかる。一般には次の如き欲望の順位、すなはち、飮食、被服、住居を「自然的のもの」と假定する。だがこれは、いやしくも單なる生理的生存が確保せられてゐるときには、必しも當らない。多くの人々は、いな、全社會層のものが擧つて、飮食の欲望を完全に滿足するよりも、むしろ住居、もしくば、被服の欲望をより豐かに滿足することを擇ぶ。欲望の構造はそれで常に傳統的な且つ社會的な諸要素を示してゐるのである。それゆゑに、ひとのやゝもすれば區分しがちな、かの生存欲望と文化欲望との限界もまた、確定せるものではなく、ある欲望がいづれの範疇に屬するかは、時代の事情、一般の見解及び生產力の發達などによつて、いたく左右せられる。例へばエンゲルスの物語るところによると、イギリスに送りこまれたアイルランドの田舍のプロレタリアたち

は、一週間の三日といふものは馬鈴薯で口腹を半分ばかりみたし、さうして日曜日には底ぬけに酔拂ふに足るだけの賃銀で、滿足してゐたとのことである。

今日われわれが生存欲望に算へてゐる大概の欲望は、過去の時代には、なほ文化欲望、いな奢侈欲望でさへあつた。だから常にわれわれは時代の事情を、そして就中また、人間から期待し得る勞働仕事量を、考察のうちにとり入れなければならない。自明的な、標準的な仕事量が大きければ大きいほど、生活程度はまたそれだけ高くなければならないだらう。それだけ多く、文化欲望が生存欲望となる。また同じ時代のうちにあつても、風潮は一定してゐるものではない。例へば女子勤人は同じ給料をとつてゐる男子勤人よりも、その給料のより大なる部分を被服のために、より小なる部分を食物のために支出するものとすれば、社會の風潮が消費形態そのものの決定に重大なる影響を與ふることは、這般の事情のうちに表はれてゐるのである。

(b) 欲望充足の法則

人間に欲望が感じられるのは、個々の意識活動、欲望衝動においてゞある。この個々の欲望衝動がまた滿足の對象をなすものである。そのことは食欲において最も明白に現はれる。なんぴとも食欲を、よしいかに長くとも、一日以上に亘つて滿足することはできるものでない。いかにひどく空腹であらうとも、彼はたゞ一定量の食物を攝取しうるにとゞまるであらう。彼の欲望は食物攝取につれて忽ち微弱となり、遂には零となる。かくて數時間を經て、それから欲望は再び擡頭し來り、新しい滿足を求めるであらう。ウィーザーのいはゆる欲望充足の法則もまた、食欲において最も明に現はれる。それは次の點に存する、すなはち、最初の最も切實なる欲望衝動が滿足せられた後には、次に續くものは、それよりも切實さを減じて現はれ、第三の欲望衝動は更に低い強度の切實さを示めすにとゞまり、以下これに準じるといふのである。それゆゑに、最も切實なる欲望滿足が依存するところの財貨は、さほどまで切實ならざる欲望の滿足に當てられてゐる他の財貨よりも、遙に重大であると意識せられるであらう。この欲望充足の法則はまた被服欲、住居欲及びその他の總てのものにも妥當する。すなはちそれは、欲望滿足の

手段が、耐久性のある財貨、それゆゑ消費行動によつて直には消盡されないで、比較的長い間使用に耐へうる財貨である場合にも妥當する。こゝでも、その財貨の一單位(例へば一室、一着の洋服)は住居欲、もしくば、被服欲をその最も原始的な形態において滿足し、それ以上のものは次に續くさほど切實でない欲望衝動に對しその滿足を得せしめるであらう。以下もこれに準じる。

(c) 現在の欲望と將來の欲望

それで、合理的にことを處する人は、まづ第一に最も切實なる欲望——もしくば欲望衝動——を充すであらう、そして、それを充した後に始めて、それほどには切實でないものに向ふであらう。この際、彼が「經濟人」であれば、彼はまた將來になつてはじめて發生する欲望衝動をも、共に顧慮するであらう。彼は、今日のみならず明日の存することをも考慮して「經濟する」であらう。その見るところが、單に眼につくだけの欲望にとゞまるのは、(實際に自然民族のもとにおいて見いだされるがやうに)その行ふ經濟が原始的であることの表徵である。けれども、總ての經濟形

態において——欲望充足經濟においても、交易經濟においても——いやしくも欲望充足の配慮が、合理的な行爲の對象とされるときには、將來に始めて發生する欲望衝動もまた、經濟行爲において共に顧慮せられるのである。このことは、或は、將來において發生する欲望を充すことのできる財貨の豫備を集蒐しておくといふことによつて行はれ(將來の住居欲を保證する耐久的な家屋を建築すること、數多の衣類を調達すること、持ちのよい食料品、燃料品などを調達すること)、もしくば、將來において發生する欲望を滿足するのに適するやうな財貨を、いつでも手に入れうる手段としての(上述の意味における)貨幣の貯へをしておくといふことによつて行はれる。かういふふうに、「經濟計畫」は、だから將來にまで及ぶものである。そしてこの經濟の奥行きこそ、一般にわれわれが、欲望充足を目的とする合理的行爲の意味における經濟活動について、云爲しうるか否かの別れる、最も重大なる徴候の一つなのである。

(d) 經濟と欲望

この第一の基本事實と經濟との關係をみるにあたつて、既にわれわれは欲望充足經濟と交易經濟とを區別しなければならない。だが、われわれはこゝでも、また以下においても、いつでも上述の意味における發達せる交易經濟について論じようと思ふ。欲望充足經濟においては、財貨の生產と欲望との間には、直接の聯關がある。すなはち、特定人の特定の欲望のために生產せられる。從つて、欲望が直接に人間の行爲を規制するのである。

もとより、發達せる交易經濟においても、生產はまた、それが人間の欲望を滿足するときにはじめて、生產者にとつて意義を有つのである。すなはち、たゞかういふときにのみ、彼は自己の生產物を交換し、かくして、彼が勞働することの唯一の目的とせる財貨に達することを、望みうるのである。このことが事實さうなるのは、彼がなんびとかの欲望と出合はすときにおいてゞあらう。ところで、發達せる交易經濟にあつては、生產は特定人の特定の欲望のために行はれるのではないから、從がつて、生產は次のやうに仕組まれなくてはならない、すなはち、生產は市場でなんらかの生產者の欲望に迎合するやうに。そのことが事實さうあるだらうかど

LIBRARY
UNIVERSITY OF ILLINOIS

うかは、前もつて言ひえない。たゞその財貨が市場で通常どれだけ需められるかが解つてゐるときにのみ、そのことを推測できるだけである。それも、誰がそれを需めるかは問題でない。市場で特定の財貨を需めつゝある人々の總體が需要である。それは個々の人々の市場に現はれる總ての欲望衝動の總計である。これらの欲望衝動は、こゝには、その把持者が財貨を手に入れるために犧牲を拂はうと心構へをしてゐるかぎり、考察のうちに入つてくる。

欲望充足經濟においては、生產の範圍は、生產の行はれる目的である欲望に、依存してゐる。このことはまた、交易經濟においても、ある程度まで事實である。けれども、生產者には、彼の生產物に向つて來る欲望が、いかに大きいだらうかが、分らないことが屢ゝである。なぜならば、そのことはつねに、互に連續せる諸期間における需要及び需要の形成の如何に、依存するであらうから。需要が衰へるなら、彼の生產物がもはや欲望の滿足に役だつのに適しないことがわかる。もしくば需要が同樣のまゝであるのに、生產者の數が增加したといふのかもしれない。このときには、個々の生產者の生產は減退した需要に出合はすことゝなるであらう。

(e) 需要と供給

これをもつて、われわれは既に第二の根本事實に觸れた。それは第一のそれと直接に關聯してゐる。欲望充足經濟においては、生産はその內容といひ、範圍といひ、滿足せられるべき欲望によつて、與へられてゐる。生産は欲望と同樣に、具體的であり、精密である。それは一定の消費活動を目標としてゐるがゆゑに、盲目に陷ることは決してありえない。よしんば、生産が欲望に適應する以上に多からうとも(例へば莊園經濟をとつてみても)、そのときには欲望滿足が一層豐かになる結果を生むにすぎないであらう、そしてその生産は、次の生産期において短縮せられ、餘力は他の生産にむけられるであらう。例へば、葡萄の收穫が豫想したほどには豐かでなかつたゆゑに、樽の生産が多すぎたとする。この場合には、爾後剩餘の貯へが使用しつくされるまで、樽の生産は手控へられるであらう。經濟の總聯關にとつては、なんらの困難も存してゐない。しかるに、發達せる交易經濟にあつては、その趣は異なる。すなはちこゝでは、生産は、需要といふものに變形せられた欲望

を目あてにする。

欲望がさうであるが如く、生産もまた、他の、しかも抽象的な意味を帶びるであらう。それをわれわれは供給と名づける。なぜならば、生産せられるものはすべて、そのものと引換に交換手段を獲ようとして、市場にと現はれるから。總ての生産せられたものは賣りに出される、それで從つて總ての他の生産せられたものと等質のものである。それは融合して無形の供給となり、そして、さうしたものとして無形の需要に對す。需要供給の上り下りに、生産の根本關係はその反影を示めすのである。

しかしながら、需要の概念を更に詳に限定せんには、なほ一言を必要とする。ひとは諸の欲望をもつ、そして、それを滿さんがために財貨を獲ようとするのであるが、こゝに用ひられ來つた語義における需要を作り出さんがためには、それだけでは十分でない。かゝる需要は恒に、存してゐる、しかし、生産者には、特定人の欲望を滿足するといふことは全く問題でない。でなくて彼は欲望を相迎へることによつて、彼自身の欲望を滿たすことをえんがために、交換財を獲ようと欲する。

彼は彼の生産物を必要とする人々を求めるのではあるが、だが、彼の求めるのは、その生産物を獲るのに對して交換財を引き渡すことのできるやうな人々ばかりである。だから、いくらかの交換財を有つてゐるやうな人々のみが、生産者の興味を惹くのである。そこで、われわれが一つの世界を想定し、そこでは、交換財はある生産物を交附する以外には、これを手に入れる途が全くないとするなら、ある生産物、例へば石鹼の需要を構成するものは、既に豫め自己の生産物を交附していくらかの交換財と引き換へて、いまや交換財の所有者として、石鹼を需めて市場に現れることのできる生産者たちにかぎられてゐる。それゆゑ、かゝる社會においては、市場における需要といふ需要は、既に生産物の經濟的交換が豫め行はれてゐたこと、及び、今度は反對に、生産物の、こゝでは石鹼の、經濟的交換がその生産者の掌中に、交換財――それは需要を表はすことをえ、また大概の場合、これを表はしてゐるだらう――を引き渡すといふことを、われわれに示してゐるのである。かくして、供給と需要とは交々ゆきかふ。いな、その兩者は、同一の市場事實の、すなはち、交換手段の受授の方法による生産物交換の、二方面である。從つて、需要は、生産物對交

換手段の交換の成功せる後、現はれる市場における運動であつて、しかも、今度は財貨の取得に志し、財貨に對して交換手段を引き渡すことを辭せざる運動にほかならない。同樣に、供給もまた、單に生產物を引き渡さんとするのではなく、交換財と引換へに、引き渡さんとする心構へである。生產物の贈與は、經濟的行爲の埒外の、かくて市場外のことに屬する。

二 財と商品

(a) 財の概念

財とは、われわれは全く一般的には、欲望を滿足するための手段だと解する。しかもわれわれは先づ最初には、欲望を滿足するための物的手段を、財貨と名づける。經濟はすべて(暫く勤勞を措くならば)このやうな、欲望の滿足のための物的手段を調達することを中心として動いてゐる。更に何が財であるかは、固有の諸性質を記述するとか擧示するとかによつて、決定せられるものではなく、專ら、それが欲望を滿足するか否かの、一事に係る。それは或は欲望を滿足するに適するかもし

れない。しかし、ひとりの人にも出會はさないかもしれない（例へば砂漠におけるが如く）――そのときには、それは財ではない。反對に、それは總ての人々から、無用の、役にたゝないものとして、拋げ棄てられるかもしれない、だが、ひとりの人の欲望を滿すなら、――そのときには、それはこのひとにとつては慥に財である。外界の有形物が財となるかならぬかは、それゆゑ、全く事情の如何によるのである。

(b) 自由財と經濟財

經濟においては、二種類の財貨を區別しなければならぬ。

(1) 人間の欲望に比すると、際限のないほど矢鱈に多く存在してゐるやうなもの、例へば、森の苺、泉の邊の水。これらの財貨は甚だしく豐富に存してゐて、すべての人がそれで彼等の欲望を醫すことができ、しかもそれでもなほ、夥しい數の財單位が用ひられずにそのまゝになつてゐるほどだ、としよう。このやうに、たとへどんなに强欲な欲望の望みをかなへようとも、それ以上に豐富に存してゐるやうな財貨を、われわれは自由財と名づける。

(2)それに對するものは、經濟財である。總ての欲望衝動が、それの滿足に役だつところの財貨をもつてしても、悉くは充されることができないとき、われわれはその財を經濟的と名づける。ところで、このことは大多數の財貨について事實である。例へば、獨逸の國民經濟においては――このことは戰爭前にも別に違つてゐなかつたが――パンにしろ、砂糖にしろ、布にしろ、住宅等にしろ、要求せられるほどに多くあるのではない。だから、總ての人々についてみれば、どんな欲望だつて腹一つぱいに滿されるだらうとは思はれないし、もしくはまた假にも――現存物の分配が變つたとしても――腹一つぱいに滿されえようとは思はれないのである。それで、實際的に言ふならば、すべての財貨は經濟財である。それは、欲求に比しても、また需要(上述の意味における)に比しても、稀少である。それゆゑ、これらの經濟財から出來るだけ多くの效果を汲みとらんがためには、それらを愼重に取扱はなくてはならない。すなはち、ひとはそれを「經濟」しなくてはならない(三四頁參照)。これに反して、自由財は經濟の對象物ではない。自由財は、經濟發展の進むにつれて、著しく減少するの傾向を示してゐる。往時、收穫が佳良な時には、穀物は殆ど自

由財であつた。收穫が過多であるとか、佳良であるときには、一人だつて飢ゑるほどのことはなかつた。發達せる交易經濟にあつては、過多な供給すらも、この結果を致さない。なぜかといふに、經濟領域の擴大してゆくことは、財貨をして、ますます大なる需要のある市場領域へと、流出せしめるからである。かくして、われわれは自由財を無視してよい。それは、なほ存在してゐるにはゐるが、いかなる場合にも經濟の對象をなさない。

(c) 享樂財と中間生産物

經濟財は、更に分れて、二部類となる。すなはち、人間の欲望に直接役だちうるが如きものがある。それらは、消費に引き入れられると、直接に人間の欲望を滿すことができる。あらゆる食物、被服、住居、あらゆる奢侈品、約言すれば、人間の欲望を滿足するため「完成」生産物として、生産せられてゐるものはすべて、これに屬する。それと區別せられるべきものは、終極生産物に對して前段階を表はし、生産行程にかけることによつて、はじめて完成生産物と、すなはち、享樂財となるところのすべて

の財貨である。かくて、例へば、工具、機械は、悉く直接の享樂財ではなく、まづ、產出行程に組み込まれて、享樂財の製出に役だつのである。すべての原料もまた同樣である。これらの、たゞ間接に、享樂財の生產にしか役だたない財貨をすべて、われわれは中、間、生、產、物、(ボェーム・バーウェルク)もしくば、遠位の財、(フォン・ヴィーザー)と名づける。

生產力の發達とともに、分業の進步とともに、原料が完成生產物と、もしくば、終極生產物となるまでに、通過する中間段階はますますその數多さを加へる。原料が同一人の手で、極めて僅な且つ原始的な工夫手段をもつて、享樂財に形づくられることは、原始的な財貨生產の特徵である。發達せる交易經濟は、原料と終極生產物との間に、大きな一連の操作を挿入する。それは、ボェーム・バーウェルクの言ふ如く、原料と完成生產物との間に、長い、時間のかゝる生產迂廻を挿入する。それで、大數について觀察すれば、中間生產物は、非常な勢でますます膨脹しつゝある。手工業の單純な工具と、工場工業の强力な機械裝置との對照は、一目瞭然である。實際この生產迂廻の方法によれば、昔の原始的な方法に據る製作に比し、幾倍もの終極

生産物をつくり出すことが、できるのである。

生産手段のうちには、一つの、それ自ら生産せられた生産手段ではなくて、人間に賦與せられたるもの、すなはち、土地がある。が、こゝにはたゞこの生産手段が、後に明になるやうに、經濟上重要なる二つの特性をもつことを、注意しておくにとゞめたい。 土地は、農業生産の把持者として、また、人間行爲一般の土臺として、與へられた經濟領域の埒内においては増加すべくもないが、なほまた、破壊すべくもない。それゆゑ、土地は永續する生産手段である。 それは、いはゞ洪水による潰滅の如き稀有の災害を別としては、破壊さるべくもない。 これに反して、他の生産手段、例へば機械類は、いやしくも常態では、生産の中に入り込み、そこで消耗せられ、そして、その「壽命」の經過の後には、經濟的にはもはや存在しなくなるのである。

土地について言はれたことは、實際、たゞ或る限界においてしか妥當しない。 なぜなら、自然から授かつたまゝの「土地」から、一般に先づ生産手段を作りあげるには、原野の開墾、排水、耨耕などのやうに、人間勞働を必要とするからである。 また、人間勞働は、かういふふうに存在する土地を、改良することができ、勞働を缺くときは、そ

れを再び荒廢せしめる、それで、經濟的意味において「壞滅」せしめることができる。けれども、實體としての土地は、依然として常に存在すること、そして、この實體が、破壞せられるべくもなければ、增加せられるべくもない、一定の生產可能性を、人間に供するものであるといふことは、いづれにしても正しい。

(d) 商品の概念

これまで、われわれは、人間の欲望を滿足する物を、悉く財貨と名づけ、經濟活動の內容を、かゝる財貨の生產において看てきた。有用な物はいづれもみな財である、そして、總ての生產は、かゝる有用な物を作り出すことを心掛けてゐる。その有用な物の財たるの性質は、一に具體的な諸性質に結びついてゐる。例へば、織物の財たるの性質は、それが柔軟で、熱の不良導體であることに、食物のそれは、それが榮養價をもち、よく身體によつて吸收せられることに、石炭のそれはそれが燃燒するとき一定量のカロリーを發散することなどに、結びついてゐる。それゆゑ、人間にとつて、財貨を重大なものとならしめるもの、すなはち、財貨が欲望を滿足することが

できるといふことの前提をなすものは、常に有用性である。

いつたい如何に經濟せられようとも、つねに經濟行爲の目標となり、またいかなる場合にも、それによつて贏ちえられた成果をなすものは、有用性のある財貨を作り出すといふことであらう。けれども、この有用性は、歷史の發展のうちに、その意味を變ずる。それは必しも、いつもいつもながら、經濟行爲の直接の目標であるのではない。欲望、充足、經濟においては、經濟行爲の直接の目標は、有用性、それゆゑ、全く特定の性質である。この經濟においては、特定の性質をもつた財貨が、經濟計畫に基いて、作り出される。例へば、莊園においては、騎士と從者とのためには、幾揃ひかの具足が製作せられ、騎士の間もしくば寢室のためには、一定の敷物が織られ、それぞれの目的に應じて、精粗さまざまな織物が拵へられる。同樣に、莊園の農業もまた欲望に應じた形態をとる。

單純なる交易經濟においてさへ、この、生產と使用との直接の關係は、なほ依然として存する。それは今日に及んでもなほ行はれてゐる。仕事が注文で行はれるところでは、至るところ、さうである。それゆゑ、手工業が顧客生產である間は、生產

活動といふ生産活動は、一定の有用性を目指して、營まれてゐるのである。

しかしながら、既にこゝで、注文でなくて、市場のために、需要のために、仕事をする産業にとつては、總じて嚮導觀點は、幾分か遷りはじめる。そこでは、嘗て生産と消費との有機的結合によつて與へられてゐた經濟の統一は、破られてしまふ。生産は、もはや具體人の具體的の欲望の滿足を目指して、起されるのではなく、それは、上述の意味における「需要」を目指して起されるのである。いふまでもなく、この需要が喚起せられ、交換の目的が達せられるのは、生産物が人間の欲望とうまく出會はすときに、限られる。けれども、そのことは、生産者にとつては、もはや本質的のことではない。それは、彼の念頭から薄らいでしまふ。いまや彼にとつて、より重要なことは、一に彼が自分の生産物を交換しうること、それが販路を見いだすことである。彼は全力を傾けて、彼の生産物が交換せられうるやうに、それが交換力をもつやうに、と努める。その生産物の交換せられることが、容易なれば容易なるほど、交換でうけとる對價が大きければ大きいほど、それだけ、その生産は生産者にとり合目的であつたのである。そしてそのことは、より上等な、もしくば、より高貴な有用

物を作り出すといふこととは、全く合致するの要を見ないのである。財貨であつて、その唯一の使命が、自らを交換することにあるとき、われわれは、これを商品と名づける。商品にとつては、財貨における有用性の如く、交換能力が本質的のものである。有用性は、なにか具體的のものであつて、記述されることのできるものである。交換能力、もしくば、販路力は抽象的である。かくして、こゝにも、交易經濟においては具體的な彩のある要素が、抽象的な要素によつて、とつて替はられる。

發達せる交易經濟において、生産せられる生産物はすべて、經濟的には、それが交換せられる限りにおいてのみ、考察に入る。そして、その經濟上の重要さは專ら、それが他の生産物の幾何と(交換手段の媒介を通じて)交換せられうるかによつて、定められる。

(e) 商品生産と發達せる交易經濟

生産物が、今や發達せる交易經濟においては、一にその交換性に據つて評價せられるといふ事實は、分業の一つの結果であるが、しかし、分業だけの結果ではない。

なんとなれば、分業はまた欲望充足經濟においても起りうるからである。この經濟においてもまた、個々のひとびとの活動は專門化せられる。だが、彼等の生產物は、まづ第一に專一に有用性として、觀察されなくなるのではない。交換といふ現象は、各の個人が、他人と結合することなく、また、一つの包括的な經濟計畫に編入せられることなく、市場と需要とのために生產するときに、はじめて前景に立ち現はれ、且つまた、そのことによつてはじめて、個々の生產者にとり決定的な重要さを帶びるに至るのである。各のものが悉く市場と需要とのために生產するのだから、彼は他人のために働くときにのみ、纔に自分のために働くことができるのである。だが、彼が果して他人のために働いたかどうか、彼の生產物が誰かの欲望をみたすかどうかは、彼の生產物が交換せられうるときに、そしてまたその限りにおいて、はじめて確定せられる。そこで、發達せる交易經濟における經濟行爲は、判然と互に區分せられる二つの部分に分たれる、すなはち、生產といふ技術的過程と、販賣といふ交換機構へ入りこむこととに。これに反して、欲望充足經濟にあつては、この二つの局面は、織り込まれて一體をなしてゐる。といふのは、生產は直に特定の欲

求を充し、またこの欲求は欲求で、それを目あてに生產の方向が決定せられるからこそ、滿足されることができるのだと、かういふ事情にあるからである。この「自然的」紐帶は、發達せる交易經濟では斷ち切られてしまつた。それで生產物、いまや商品は二重の容相をもつ。すなはち、それは、生產者に對しては、交換力の把持者であり、購求者に對しては、效用の把持者である。

さて財貨が、商品として、すなはち交換のために生產せられるといふことは、人間自身が特有の方法で、一つの經濟關係に結合されてゐるときにしか、可能でない。商品は、單に財貨の如く、人間と物との結合を示すのみでなく、――人間相互の結合を示してゐる。人間相互の結合は、その性質、極めて多樣のものでありえようが、われわれは家族經濟、奴隷經濟、共產主義經濟を、考へるだけでよい。發達せる交易經濟の經濟的聯關は次の如くである。（註一）

（註一） この點においては、余は本質上、アモンが交易經濟に對して展開させた諸特徴に贊するものである。（「理論的國民經濟學の對象と諸根本概念」ライプチヒ、一九一一年） アモンが揭げた第四の條件、すなはち「一般的、社會的價値尺度と交換手段との承認」は、余はこれを本質的とは考へない。それは、つまり、一から三までにあげられた諸條件の歸結にほかならない。分業的生產

といへば、直ぐ後に（第三節貨幣の條下に）說明せられる如く、旣に一般的に承認せられた社會的價値尺度と交換手段との存在を意味してゐるのである。

(1) 個人的生產としての、生產の可能性が與へられてゐなければならない。このことは、個人個人が「外界の」物體、從つて、生產手段と生產物との自由處分權を有するときにのみ、事實となりうる。それゆゑ人格の自由と私有財產とがなければならない。

(2) この處分權の自由移轉が認められ、その結果として交換は現實に處分權の變更を招來することゝならなければならない。

(3) いかなる割合で交換せられるかに關する規定は、完全に交換者たちの自由に放任されてゐなければならない。從つて、生產物相互の交換比例を、客觀的に强制する權力をもつて規定することは、許されない。（「交易の自由」）

發達せる交易經濟を可能ならしめんがために、最初の二條件が滿されてゐなければならないといふことは、それ以上の基礎づけを要しない。これに反して、第三の條件を導き出すには、なほ一言附言すべきであらう。生產物相互の交換比例が

交易で確定せられないで、いはゞ官憲當局から指令せられるならば、市場に齎らされる生産物の數量と、需要せられる數量とが一致することは、極めて稀であるだらう。かゝる不一致は、自由交易の場合にも、存在しうるものであり、また日常存在するところである。けれども、それは恒に、交換比例の變化によつて、再び調節せられる。これに反して交換比例が與へられてゐるなら、それがその關係者によつて變更されえないなら、生産に關する他の總ての規定もまた、例へば、生産せられる財貨の數量に關することから、遂には、なんぴとがそれを生産するかについての規定までも、その交換比例を規定する當局から旨く定められなければならない。なぜかといふに、生産は、なほ後に說かれるが如く、一つの相關聯せる行程であつて、そのすべての部分に共に影響を與へることなくしては、どの一箇所にも影響を及ぼすわけにはゆかないからである。發達せる交易經濟の第四の條件については、なほ後に(八二頁)說くであらう。

(f) 發達せる交易經濟の勞働聯關

かくて、發達せる交易經濟の經濟的聯關においては、商品及び財貨としての物と、諸行爲すなはち人間の諸の仕事とは、いはゞ二つの平面に存する。まづ第一に、人間の行爲は社會的行程内に存してゐる。各の行爲は、生産の分業的行程における一つの要素である。各の人の行爲は、もはや全く彼の獨自の行爲ではなくて、その行爲が分業的社會の埒内に組み込まれてゐるかぎり存してゐるのである。そして、その行爲がこのやうに組み込まれることのできるのは、錯綜した分業的聯關において、それが補完的要素であるときに限られる。例へば、發達せる交易經濟において「仕立師である」といふことは、他のひとびとの行爲、例へば、靴工や指物師等の行爲をも同樣に本質的なりとするところの一つの聯關に、組み込まれてゐることである。他の總ての諸の行爲がまた同樣にそこに見いだされることによつてのみ、仕立師としての存在が可能である。かくて、各の行爲には他の諸の行爲が對應してゐなくてはならない。さうして、重要なのは、その行爲の具體的内容ではなくて、それが他のものとともに結合して、一つの一般的な勞働聯關をつくりあげてゐるといふことである。だから、ある行爲が使用價値物を作り出すといふことが本質

的なのではなく、その行爲が、他の使用價値物と對應しつゝ、互に交換しつゝそれをつくり出すといふことが本質的なのである。つまり、行爲の具體的內容ではなくて、この行爲が他の諸の行爲と結びつけられてゐるといふことが、本質的なのである。しかしながら、これと並んで、各の行爲の本來の性質は、なほ依然として重大である。なぜかといふに、各の行爲が他の諸の行爲の勞働聯關のなかに組み込まれうるのは、實は、各の行爲が使用價値物を生産するからこそ、從つて、それが具體的な、特殊な有用性を拵へる仕立師の勞働、指物師の勞働などであり、またどこまでもさうであるからこそ、可能なのである。それゆゑ、人對物の關係は消滅しはしない、だが、それは後退する。さうして、それは、單に行爲が分業的聯關のなかに組み込まれることができ、生産が社會的階梯をなして行はれることができるといふことの前提たるにとゞまるのである。

かくて、人間勞働は、人間の交易經濟においては、その生産物、すなはち、商品と同様に抽象的に定義される。財貨生産から商品生産へ遷りゆくことは、人と物との間の、具體的な彩のある關係が、人對人の、抽象的な、無色の關係に變形せられることを

意味する。この人對人の關係は交換において實現せられる。從つてまた、商品は一切の交換しうべきものである。商品が交換しうべきものにほかならぬ限り、その重大さは、それが何と交換せられるかの、一事につきる。その重大さは、生産者にとつては、それが交換せられていかなる對價を享けることができるかによつて、測られる。

余が、商品を定義して、交換しうべきものといふならば、この關係をあべこべにして、一切の交換しうべきものは商品であると言ふには、そこから僅に一歩である。余は、市場で交換せられる一切のものを、商品と考へて差しつかへない。すべての「取引物」は、從つて商品である。「財貨」の語は、通例われわれはこれを、みづから有用性を帶び、從つて、欲望を滿足する有形物の意義に用ひる。「商品」といふときには、遙に廣義にこれを解し、われわれは、互に交換せられる一切のものを、この概念のなかに含ませることができる。それでかうなると、仕事も、人間勞働も、それらが取引の客體であるかぎり、また商品概念のなかに入る。同樣に、全然生産せられなかつたもの、例へば、土地の如きものでも、すべてまた取引物であり、從つてまた商品である。

そこで、商品の狹義の概念を發展させて、任意に再生產しうべき、代替性のある取引物ばかりを商品と呼ばうとする要求が生じた。すなはち、この語義における商品とは、所與の條件の下では、限定せられた、單に與へられたまゝの量でしか存在しないといふやうな取引物を指すのではなく、生產行程を實行するたびに、いつでも再生產しうべきものであつて、更にはその種類內にあつては――例へば穀物の如く――互に代替しうべく、一單位は他の同單位のものと同樣に通用するといふ、特徵をもつやうな取引物ばかりを指すのである。

三　分業的交易經濟の前提としての貨幣

既に、余はこれまでの討究において、間接交換について述べ、そして、發達せる交易經濟を說くにあたつては、いつも生產物の交換はあたかも貨幣といふ迂路を通じて行はれるかの如くに說いてきた。さうしてこのことは實際のところ、さうである。われわれが發達せる交易經濟を考へるときには、そこで行はれる生產物の一

切の交換は、一般的に承認せられた交換手段を通じて、すなはち貨幣を通じて、行はれるものと考へなければならない。（貨幣は、暫くその交換職能を措くも、なほ一般的支拂手段である。が、これは發達せる交易經濟の觀念には未だ必要でない。われわれは貨幣を一般的交換手段と見做すだけで十分である）。かく考へてのみ、分業的交易經濟は可能である。それでこゝには、どうして貨幣が成立することゝなつたかは、われわれの深く問はんとするところでない。恐らくは貨幣は、交換行爲のたびごとに需められた商品のなかで、最も交換能力の多かつたものから發達したのだ。なぜかといふに、それを所持することは、どんな任意の他の財貨をも手に入れうるの道を拓くものであつたから　といふカール・メンガーの提言には、賛すべきところが最も多いであらう。けれどもこゝにわれわれの興味を繋ぐところは、繰りかへし注意しておきたいが、貨幣の成立のことではなくて、貨幣とは何であるか、さうして、それが一體、永續的な經濟的範疇として、どういふ具合に必要であるかの問題である。

ある分業的交易經濟が可能であり、それが存在しうるのは、一にこの經濟においい

て總ての生產物が自由に互に交換されることができるときに、例へば、なんの困難もなく、どんな任意の他の商品のある量にも替へられることができるときに、かぎられてゐるのである。だが、これは、直に明になるやうに、間接交換と貨幣とをその前提としてゐる。間接交換といふのは、生產せられた商品、例へば紡絲を、まづもつて、その生產者の必要としない商品、例へば鐵と交換する、そしてこゝに鐵がその生產者によつて受けとられるのは、實に、彼がこれをもつて、彼の本來必要とするところの商品、例へば穀物と交換することができると、考へてゐるがゆゑである、かういふのが間接交換の意味である。だから、いかなる間接交換にあつても、商品と商品とは間接の方法で交換せられる。さうして、生產せられた商品と最後に欲求せられた商品との交換比例――こゝでは紡絲對穀物――は、これらの商品と、媒介の務めをする商品との交換によつて、明瞭ならしめることをうる。商品といふ商品はみな、それに對應する媒介的商品の量をもつて言ひ表はされることをうる。それで生產者の興味を惹く問題は、結局、間接交換のもとにあつては、一に彼がその生產物に對して幾何の媒介的商品を受けとるかといふことにすぎないであらう。

けれども一切の生産物と一切の生産手段とを一つの量に還元することが、徹底的に保障せられてゐるのでなければ、分業的交易經濟は可能でない。いふまでもなく、もしこの、量への、すなはち總ての生産物に同樣なる表現への、還元が行はれないとなると、生産物對生産物の交換が起らなければならないだらう。例へば、紡絲は肉類と、穀物と、住居と、機械と交換せられなければならないだらう。然るに、これらの生産物の所有者たちは紡絲を必要としない。それを市場で求めない。紡絲を市場で求めるものは、たゞ織匠だけである。ところで、織匠は交換のためには織物をしか提供できない。だから、この結果として、絲對織物の交換が行はれ　それから進んでこの織物と、紡絲生産者の必要とする一切の生産物との交換が行はれなければならないことゝなるだらう。こゝにおいて、われわれはやはりまた間接交換の行はれるのをみるのである。だから、間接交換はいかなる分業的交易經濟にあつても、すぐさま出現しなくてはならないものなのである。よしんば、われわれが假に、かの紡績者が紡絲をもつて自分の必要とする一切の生産物、例へば、パン、肉類、住宅、工具等と直接に交換できるものと、想定すべきものとしても、やはりさうしたこ

とが可能なのは、ほかでもない、彼の相手方の大部分のものが、そのときには、その紡絲を、みづからこれを消費せんがためではなく、これをもつて他の商品と交換せんがために、市場で手に入れるからこそ、それゆゑに、彼等の欲望滿足の道程として間接交換を擇ぶからこそ、然るのであらう、從つて、交換者の一人にとつては、交換はほとんどつねに間接交換であるだらう。さうして、このことは既に分業より生じるところである。なぜかといふに、紡絲を必要とするものは、全くのところ織匠か撚絲者しかない。ところで、これらの人々は返禮としては織物か撚絲かを處分するほかない。從つて、間接交換が行はれなくては、交易經濟における分業的生產者の欲望の滿足は全然不可能であり、從がつて、間接交換がなければ、交易經濟における分業的生產もまた不可能である。　間接交換は、商品と商品とが交換せられる直接交換の紛雜を省くものである、だから、單に、より高い合目性を表はすにすぎないとは、屢〻說明せられるところであるが、恐らくはさうではなからう。　交換を容易にするがためではなく、分業的生產一般をまづ可能ならしめるがために、そのために間接交換が必要なのである。　いやしくも間接交換が存してゐるならば、これを

ば分業的生産の不可缺的前提たらしめると同一の理由からして、またわれわれは、一般的に承認せられた交換財の意義においての、貨幣にも、達するのである。もとより一つの交易圏内において若干の商品が、一般に欲求せられ且つ承認せられた交換財たるの性質を帶びることは、できないわけではない。けれども、これがために、貨幣の基礎的性質はなんらの根本的變化をも蒙りはしない。このやうな一般的な交換手段が存してゐるならば、すなはち、總ての生産物が同一の交換財に對して賣り渡され、さうして、これをもつて再び他の總ての生産物を買ひとることが可能であれば、既にもう商品生産にとつて極めて簡單な方式が見出されてゐるのである。といふのは、商品生産の中には、再び商品のみが入り込むのであるから(なんとなれば、機械も、原料も、勞働力も、商品であるから)、これらの商品は、商品生産においては交換要素として、しかもかくの如きものとしては、單にそれらの商品を市場で獲得するために拂はれた交換財の一定量として現はれる。そこでわれわれは生産行程の終結にあたつて、少くともこの最後の生産期間の開始前と同じだけの處分しうべき交換財が手にあれば、再び生産を更に開始することができる。なん

となれば、かかるときには、交換比例さへ從前通りであれば、これをもつて一切の生産構成要素を、再び市場で獲得しうるからである。もしくば、なほ別言すれば、一般的交換手段は、生産を計算しうべきものに造りあげる。そして、——この思想の、窮極の最も重要なる環は、交易經濟の分業的生産は、一に、計算しうべきものとしての、み可能である、といふことである。——それゆゑに貨幣は、市場の側のみならず、また生産の方面からも觀察せられ、その一般的交換手段といふ職能において、發達せる分業的交易經濟における一つの、必然的なる、さし措いては考へられない、經濟的範疇である。この交易經濟は、(一般的に承認せられた交換財として理解せられる)貨幣なくしては、一刻の存在もゆるされない。それは、貨幣がもはや一般的に承認せられた交換財として與へられてゐないなら、多くの經濟的微分子となつて、ちりぢりに飛散したでもあらう。

四　生産手段と資本

(a)　欲望充足經濟における生產手段

欲望充足經濟においては、われわれは、すぐさま消費に引き渡される生產物(消費財)と、引きつゞき行程のなかにまづ入つてゆかなければならない生產物(生產手段)とを峻別する。これらの生、產、手、段は、一部は物的のものであり、一部は人的のもの(勞働給付)である。もつとも、ある一定の見地からみれば、生產手段と消費財との限界はなくなつてしまふ。なぜかといへば、勞働者の手に渡される消費財は、同時に彼の勞働力を維持し、且つ翌日のためにこれを準備するのに、役だつのである。しかるに、勞働力は欲望充足經濟においても亦、極めて重要な生產手段であるかぎり、もはや生產と消費との區別はたゞなくなるからである。だがしかし、われわれはこの分ち方を固執しようと思ふ。なぜかといふに、(1)、新しい生產の出發點とはならない消費が實際甚だ多いからであり、——總ての不生產者の消費はこれに屬する。(2)、消費が勞働を再生產するやうになされるかどうかの問題は、未決のまゝであるからである。いづれにしても、消費者としての生產者は、彼が新に機械を調達

するときと同様の意味で、再生産しつゝあるとは、解しがたい。

かくて、生産手段は欲望充足經濟における生産の前提である。該經濟は全體として、單に消費財ばかりでなく、新な生産手段もまた絶へず繰りかへし生産されるやうに、編制されてゐなければならない。經濟計畫は生産財の再生産を包含してゐなければならない、そしてこのことはまた、單純な事情においては極めて容易であつた。建築物を維持したり、經營の擴張にあたつてはまた經營所をも増築したり、設備品に修理を加へるなどのためには、十分に勞働力が準備されてなければならぬことは、自明のことである。かくて、工具は絶えず維持せられ、補充せられ、生産手段の土臺はかくして保存せられ、もしくば擴大せちれる。従つて、生産について配慮するといふことは、常存的な持續的な生産のために配慮することゝ同意義である。

(b)　發達せる交易經濟における生産手段の資本への變容

發達せる交易經濟においても、同様に生産は生産手段をもつて行はれてゐるの

を見る。けれども、こゝでは特殊の形式においてである。その形式を、われわれは強調しなくてはならぬ。發達せる交易經濟の特徴といふべきことは、この經濟にあつては生産手段の處分力が單に、一群の人々(多數であれ、少數であれ、いづれにしても、全部ではない)にのみ屬してゐて、しかも、われわれの前提によれば、それが個人的處分權であるといふことである。だから、生産手段には單に個人的な所有者があるばかりであり(その際、われわれは、また比較的小さな團體、諸會社をも「個人」と定義してよい)、勞働するものがみながみな、かゝる生産手段の所有者であるのではない。その結果としてまた、勞働するにしても、なんらの生産手段の處分權をも有たないで、從つて他人の生産手段で自己の勞働を實現するほかに、勞働のしやうのないものが――多かれ少かれ――多數ある。それゆゑ、われわれの眼前には、單に生産手段を所有してゐるにすぎないものと、單に勞働ばかりしてゐるものとがあるわけである。さうして、これが、殘りの一つの、すなはち、われわれが、發達せる交易經濟の圖象をえんがために、なほ上述した(六九頁)諸前提に今や追加しようとする、第四の前提である。

その際われわれは、財産の自由の存するところでは、人々の間に生産手段の所有の不平等に分配せられてゐるのが「本來」必然であるか、または人々が生産手段から全然切り離されてゐて、せいぜい動産の所有しか自分のものだと言へないのが、必然であるか、この問題は全くこれを考察の外におかう。更にこの狀態がいかにして形成せられたか、政治的支配を經濟的支配に鑄造するの方法によつてか、それゆゑ、權力の方法によつてか、それとも、人間は不平等のもので、一方には勤儉力行の士があるのに、他方には放逸懶惰の徒があるとの理由からして「純經濟的」の發展を辿つて形成せられたか、これもわれわれは考察の外におかう。すべてこれらの問題はこゝでは研究しないことゝし、たゞ、われわれの研究の對象である發達せる交易經濟においては、生産は、自己のものではなく、他人に屬する生産手段で人々が勞働給付をすることによつて、行はれるものであるといふことを確言するにとゞめる。

かういつた、發達せる交易經濟の主要點が力說せられるなら、これと同時に、われわれは、かの、生産手段の所有が未だ上述のやうには分配されてゐない、單純なる交

易經濟については考へない、といふことが言はれてゐるのである。例へば、中世の都市においては、同業組合經濟においては、もとより都市の生活區域内の悉くのひとが、生產手段を所有してゐるのではない（そこにもまた、小僧小婢、日傭稼人、下職、家庭で飼殺しになる僕婢がある） けれども、生產行程の中心においては、仕事場においては、徒弟や職人は單に一つの入門段階であつて、いづれは、それぞれ獨立の手工業者となり、または、なりうると、かういふことがその本質的のことである。 これに反して、發達せる交易經濟では、その後の方の段階においては、勞働力と生產手段との分離が判然と認められる。 それゆゑ、この發達せる交易經濟において、財貨生產が行はれうるのは、 勞働力の把持者が生產手段の所有者のもとで勞働するときにのみ、しかも、なんらの政治的拘束に縛られることなく、——いはゞ、中世において、或はまた農奴解放のときまで、農奴が大土地所有者の附屬物をなしてゐた如くに——生產手段の所有者の政治的附屬物としてゞはなく、われわれの先の前提通りに、自由人として勞働するときにのみ、限られるのである。 かくてわれわれの意味における發達せる交易經濟にとつて本質的なことは無產者といへども自己と

その勞働力とは、これを自由に處分しうるといふことである。すなはち、さういつたときにはじめて、人々の間には、一つの全般的な、赤裸々な市場聯關が作りあげられてゐて、そして、勞働力は、生産手段や生産物そのものと全く同樣に、あらゆる經濟行爲の目標點であり、また出發點であるところの交換機構の中に、組み込まれてゐるのである。（註一）

（註一）例へば、勞働要素として奴隸を使つてゐる分業的交易經濟は、從つて、こゝでは攻究されない。該經濟においては、こゝに用ひられた諸概念もまたそのまゝでは應用せられえないだらう。

それで、發達せる分業的交易經濟内にあつては、生産手段は特殊の性質を帶びてくる。それはその本質において、かつて欲望が需要に、財貨が商品に、變容したと同樣の變容をする。といふわけは、欲望充足經濟では、生産はいつでも特定の欲望を目指して行はれる。それで、生産手段もまたそこでは、欲望を滿足するためにつくられる。それが利用せられるのは、その援助を仰げば、より多くの有用物が作り出されるからである。生産手段は人間の手の幇助者である。これに反して、發達せる交易經濟にあつては、生産の目標はできるだけ合目的な商品生産である。生産

手段は、單にそれが商品生産の諸目的に役だちうるかぎりにおいて、使用せられるにすぎないだらう。このことは、なほ後に明瞭になるが如く、生産手段をもつてすればより多くの生産物を作り出すことができるときにも、未だ保證されてはゐないのであつて、その際、生産者等がいかなる使用價値物を生産したか、そして彼等の商品をもつてなんびとの欲望を滿足したかは、さほど彼等の興味を惹かないであらう。なぜかといふに、彼等は實に市場のために生産してゐる、需要のために生産してゐる。そうして、商品を販賣せんがために、需要が必要となつてくる限りにおいてのみ、僅に人間の欲望が彼等の興味を惹くにすぎないからである。

この、市場の交換機構の中に組み込まれてゐる生産手段を、今やわれわれは資本と名づけよう。この場合、資本にとつて本質的なことは、生産手段の處分力が個々の人々の手に収められてゐることである。從て生産手段といふ生産手段が悉く資本であるのではない。資本とは、何よりも先に、上に指示しておいた一定の社會關係に立つ生産手段である。この關係において、資本は、商品生産をより有利に形づくるのに、役だつのである。この點から、また(商品の場合におけると同様に)一つ

の顛倒に達する。すなはち、商品の生産行程をより有利にならしめることのできる一切のものは、それがあたかも生産手段であるかのやうに、だからあたかも「資本」であるかのやうに、見做される。例へば、特許もしくば、ある有利な位置などはこれである。それで結局最も一般的には、商品の産出行程において用ひられるあらゆる商品は資本であるといつてよい。このやうに、この概念は抽象的のものである、そしてまた、それが、單に經濟の一定の社會的形態においてのみ使用せられうる概念であるといふことは、說くまでもない。

われわれがこゝに一定の「社會的」關係と關聯してゐるといふことは、極めて速に闡明しうるところである。生産手段は上に說明した社會的諸條件がとり去られるときには、資本ではなくなるといふことを　マルクスは極めて如實に立證した。マルクスは言ふ　英國の經濟學者ウェークフィールドの考へでは、植民地における一切の「資本財」も「資本家的」生産を起すに足りないのである。それで、ウェークフィールドの物語るところを聽くに、ピールとかいふ人は、五萬磅だけの生活資料と生産手段とを携へて、英國からニュー・オランダへ渡つた、なほその他に、成年男

女及び兒童とり交ぜて三千の勞働階級の人々をも連れていつた。ところが「目的地に到着すると、ピール氏は、自分の寢床をとつてもらひ、或は、河から水を汲んできてもらふための、一人の下男さへゐない狀態におかれた」のである。これに就いて、マルクスは評釋していふ「不幸なるピール氏は、萬事に氣がついてゐたが、たゞ英國の生產關係をスヴァン・リヴァーへ輸出することを手拔かつたのだ！」と。實際、無主の生產手段が十分に存在してゐたので、以前には無產であつた勞働力も、もはや資本所有者の自由にならなかつたといふことが、判つたのであつた。そればかりではない、この例からなほ明になるのは、すなはち、生產手段の支配權は、それが不平等に分配せられてゐるかぎり、且また、なんらの生產手段をも有たない人々が存するかぎり、同時に人格の支配である。なぜかといふに、これらの人々は、生きんがためには、生產手段の所有者のもとで「勞働をさせて貰は」なければならないからである。こゝにおいて、われわれは、人格の支配が、實は法律と交易といふ抽象的形態で行はれてゐるのをみる。歷史的には、發達せる交易經濟以前に、既にかゝる人格の支配が行はれてゐたにはゐたが、しかし、それは、政治的權力が社會層全體を從つ

て該社會層の悉くの、、、ひと、、を、支配階級の下に屈服せしめ隷屬せしめてゐるのであるから、公然たる直接の支配である。資本家的經濟においても、同樣に屈服がある。人々を生産手段またはその所有者に隷屬せしめることは、極めて嚴重に行はれてゐる。しかしながら、この隷屬は人格としての個々の人を捉へてゐるのではない。各個人は自由である。いかなる政治的法則も彼を拘束しない、たゞ單に交易といふ權力が彼に行爲の法則を强要するまでである。けれども、これらの交易の諸法則は(それは個々の人々を人格上自由に放任する、それで彼は原則としては、したいと思ふことはなんでも、やつてやれないではなからうが)、通常全體としては民法や刑法と同樣に、嚴重に作用する。それらの法則は、なにゆゑに――いやしくも生産手段の不平等な分配が一度び定められまた人間は「經濟人」として行動するものと假定せられるなら――かういふふうな經濟が可能であるか、またなにゆゑに、この經濟が、その内に生存してゐる諸の力によつて、絶えず新に再生産せられるかを、われわれに說明するものである。有效に行はれてゐる、諸の經濟法則が充分に說明されれば、このことは自ら判明するに相異ない。

從つて資本は、商品と同様に内容的に定義されることができない。資本といふ實體概念は存しない。その本質的なことは、むしろ、資本は上述の諸條件の下における商品生産行程においてその使用をみる、といふことである。機械そのものは資本ではない。例へば、家庭にあるミシンは、厨用爐と全く同様に、單なる工具である。けれども、商品の生産行程においては、それは「資本」となる。いなそれ以上に、ある場合には、例へば家具の如く、消費財でありうる生産物でも、それが商品の生産行程の中に置かれてゐるときには(例へば工場の應接間にあつては)、資本となるのである。これに據つてみても、何が資本であるかは、事物の性質によつて定められるものではなく、一にその事物の立つ聯關によつて、決定せられるべきである。たゞときに、省略した話法では、處分權の及ぶ範圍の對象物をも、また資本と名づけることがある。けれども、それは不正確な用語である。(註一) われわれは、商品に實體概念のないのと同じやうに、資本にも實體概念がないといふことを、主張しようと思ふ。もちろん、實質的な直接的な實體なくしては、資本は不可能である。けれど

も、資本がこの實體と同一物であるのではない。なほ、非物質的關係、例へば權利、特許等が、いかなる範圍まで資本たりうるかは、以下において明になるだらう。

（註一）多くの理論家は、實際、いかなる工具も悉く資本であるとの見解を懷いてゐる。從つて工具を用ひて行はれる生產は、それがなほ未だいかに原始的であらうとも、また、いかなる社會的條件の下で行はれようとも、悉くこれを資本家的と呼ぶ。例へば、ボェーム・バーウェルク。玆には論爭の餘白がないので、こゝに執られた見解の實りゆたかさは、說明それ自身について立證されなければならない。

(c) 貨幣形態における資本

上述の意味における資本の共働といふことによつて特徵づけられてゐる生產方法、從つて、高度の發展をとげた機械的裝置を用ふるところにも必しも存してゐないで、かへつて社會的諸條件と關聯してゐるところの生產方法を、われわれは資本家的といふ。この資本家的生產形態は——なにゆゑかは前に七三頁以下において解說した——貨幣形態で行はれる。

それゆゑに、全資本家的生産行程は、有形物及び勞働力の運動であるばかりでなく、同時に貨幣運動である。そうしてまた、この行程は、その本質上からいつても、その物的内容の記述におけるよりも、貨幣運動において遙にはつきりと理解せられる。なぜなら、發達せる交易經濟において生じる一切の行程の意味は、實に交換の一事につきるからである。

さて、交換は、貨幣を通じて行はれ、從つて殘りなく量に、しかも、貨幣量に置き換へられるから、そしてまた「資本財」も交換を通じて生産の中に入り込むのであるから、これら資本財は貨幣額として現はれる。生産手段を處分するその所有者にとつては、それは貨幣額の等價物である。しかしながら、彼にとつては、他の總ての生産要素、例へば、勞働力もまた、貨幣額である。この生産要素もまた、生産手段の所有者はたゞ貨幣と交換してこれを手に入れうるにすぎない。然るに、一つの貨幣額は同額の他の貨幣額に等しい。――かくして、總ての生産要素を買ふのに用ひられる、生産行程で活動しつゝある一切の貨幣は、資本と稱せられるであらう。

さて、「貨幣」が資本の意味に用ひられうるのは、實に貨幣が市場における一切の商

品の代表者であるがゆゑに、從つて、商品生産行程における諸の要素となる商品を買ひ入れうるがゆゑにほかならない。それゆゑに、貨幣は、人々が生産手段を支配しうるのに、しかも彼等は排他的にこれを支配しうるのに、他の人々は全く生産手段から切り離され、これが支配力をも有たなければ、また將來これを獲得しえようとの見込みもないと、かういふ社會事實の、量化せられた最も一般的な表現である。貨幣は單に、資本の最も一般的な、最も抽象的な表現にすぎない。けれども、貨幣それ自身が資本であるのではない。貨幣、例へば、貴金屬は莊園では決して「資本」ではなく、單に、すぐれた交換手段、もしくば、財寶である。われわれが貨幣と資本とを同一視するのは、實に發達せる交易經濟を考へるときにかぎられ、またこれを考へるからこそ、然るのである、蓋し、この經濟において、貨幣は「資本家的商品生產」を創設しうるからである。

五　收益と利得

(a) 欲望充足經濟における生產の效果(收益)

欲望充足經濟をその全經過において觀察すれば、われわれは、この經濟の結果は收益――こゝに收益とは有用物の種類と數量とをいふ――によつて判斷せられるのをみいだすのである。例へば、莊園經濟のうちにおいては、經濟活動は、生產物で言ひ表はされた結果が大きければ大きいほど、それだけ成功したわけである。例へば、收穫が過剩であれば、總ての人々に宛てがはれる給養はより良く、より豊かにせられるだらう。收益が大きいほど、祝福もそれだけ大きいわけである。土地のはたらきが增せば增すごとに、勞働の給付が增せば增すごとに、給養計畫を一層豊かに立案することがゆるされる。そして、生產力の發展とともに、この欲望充足經濟の狀態全體が引きあげられるのである。產出が增加するとともに、たゞに給養ばかりでなく、また仕事能力が增加し、これはまた再び產出を增大ならしめることができる。これが「自然的」狀態である。

(b) 發達せる交易經濟における生產の效果(利得)

これに反して、今やわれわれが資本家的經濟として識つてゐる發達せる交易經濟においては、生産物についてより大なる收益を擧げようとも、未だもつて、生産の結果が順調であるとは謂はれない。われわれの知つてゐるやうに、生産の結果が順調であるか否かの問題に對しては、生産に注ぎ込んだ貨幣額と、生産から流出してくる貨幣額とを比較するときはじめて解答を與へうるのである。生産者が買入れのために行つた、從つて、買手として行つた、交換行爲の結果と、彼が賣手として行ふ交換行爲の結果とが、比較せられなければならない。然るときはじめて、われわれは、生産が「有利に廻つた」か否かを云爲しうるのである。幾何の生産物が作り出されたか、從つて、生産行程は技術上成功したか否かの問題は、通常、それがための前提ではあるが、未だ十分ではない。生産の終了するまでに、生産が採算上結局マイナスに終るやうな變化が、市場に起るかもしれない。然るときには、われわれはこれを缺損と謂ひ、反對のときには利得と謂ふ。それゆゑ、欲望充足經濟における收益に對應するものは、資本家的交易經濟においては、剩餘、すなはち、利得である。

生産そのものは生産者にとつては、たゞ、彼のつくり出す總ての生産物に對して、

その生産に貨幣で投じたところよりも、より以上のものを受けとるときにのみ、意義をもつにすぎないだらう。なぜならば、もし彼の手に同一の量の貨幣しか戻つて來ないならば、正に彼は生産を遂行するの誘因を全くもたないこととなるからである。それゆゑ、彼が生産をするのは、剩餘――貨幣で表はされた――をあげてである。彼はいかにしてこれをなしうるか、この結果が實現されるがためには、いかなる經濟的運動が必要であるか――これを闡明することが經濟理論の課題である。だが、今のところでもなほ、われわれはこれだけは、言ふことができる、すなはち、こゝに採用せられた意味において、資本家的に生産せられるときには、かゝる剩餘が絶えず繰り返して實現されるのでなければ、長きに亘つてはこの生産は到底行はれ得ないのである。そしてまたこのやうに、「資本」の概念は、剩餘の概念を、しかも、純量的に捕捉しうべき、抽象的の貨幣量で表はされた剩餘の概念を、伴ふものである。これに反して、生産せられた生産物でもつて、いかに多くの欲望が滿されたかといふ問題は、資本家的生産にとつては重要でない。就中、いかにしてこの貨幣收益が生じるか、このことすらもまた重要でない。

この收益はより大なる生產を基礎として成立するか、それともより小なる生產の上に成立するか、生產者はこれに興味をかけない。たゞ、彼は出來るだけ大きな剩餘を獲ようと努力するばかりである。彼はこの剩餘と、生產にあたつて共に活動する一切の價値量との關係をみる、そして、この關係をわれわれは收益性と呼ぶ。同樣のことは、われわれが、欲望を滿足しようと欲する生產者と結びつけて、この剩餘を考察するときにも現はれる。欲望充足經濟において、いかなる程度で消費者――それは生產者と範圍を同じうする――がその欲望を滿しうるかを決定するものは、實物での生產剩餘である。然るに、發達せる交易經濟において、個人の欲望滿足の可能性を決定するものは、貨幣で表はされた剩餘である。そして、われわれはこれを所得と名づける。それから再びこの關係をあべこべにして、われわれは次のやうに言ふことができる。すなはち、不斷に流れてやまない貨幣の流入が、ある個人の支配下にあるならば、このときには欲望滿足の可能性が存してゐるのであるから、そこに所得があるのだと謂ふ。かうなると、もはや、所得の基礎に生產が橫つてゐるか否かは、問題でない。――例へば、カルテルの取締人は、生產しないよう

にと、もしくば、生産を手控へようと心懸けてゐるにかゝはらず、所得をあげ、これに反して、生産者であつても、彼の商品を賣り捌きえないものには、所得がないのである。してみると所得もまた、發達せる資本家的交易經濟の總ての概念と同樣に、一つの抽象的概念である。

六　使用價値、交換價値、價値及び價格

從來考察してきた經濟の基本事實は、すべて互に相關聯してゐるものである。なぜかといふに、經濟行爲は合理的行爲であり、從つて、それは中心において しつかりと結びつけられてゐるからである。そもそも行爲といふ行爲は、その實現せんと努力する目的から、己の意味を與へられ、この目的から己の內容が定められる。さて、欲望充足經濟を觀察するに、その經濟行爲の目的を構成するものは、有用性、品質、一定の性質をもつた一定數量の物である。物といふ物は悉く、それに宿る有用性に準じ、それをもつて滿足せられるべき欲望に準じて、重大であり、また評價せら

れる。われわれが――欲望滿足のためにこの物を必要とすることを顧慮して――物に附するところの重要さを價値と名づけるなら、欲望充足經濟は使用價値を顧慮することによつて嚮導せられてゐる。經濟的行爲は、出來るかぎり多く且つ高い使用價値物にと向けられており、ある經濟行爲が合目的で、從つて「正當」であるか否かの問題は、この行爲によつて實現せられうる使用價値の大いさから、決定せられるのである。

ところで、この使用價値は、交易經濟においては、特に、發達せる交易經濟においては、もはや直接には活動してゐない。それは、物の財たるの性質と同樣に、たゞ間接に活動してゐるにすぎない。財貨が商品に化するが如く、使用價値の概念もまた自らの形態を變じる。なぜならば、使用價値は生產者にとつて問題とならないからである。彼にとつて本質的なことは、彼の生產物は交換せられるか、さうしてまたそれはいかなる比例で行はれるか、といふことである。生產物は生產者にとつては交換物として意味がある。それが交換物となるのは個々の財貨が出合はすところの有效需要に比例してであらう。なぜかといふに、今や財貨が生產者に對

して有する意味は、それがいかなる欲望を滿足しうるかの點に存するのではなくて、かへつて、財貨の有する他財と交換せられるといふ能力に應じて、客觀的に測られるからである。この、市場で交換せられるといふ能力は、いはゞ、一つの新な、單に交易經濟でのみ與へられた、財貨の特性として現はれる。それでわれわれはこれを交換價値と名づける。

こゝにおいて、今やわれわれは再び、貨幣が一般的交換手段として一つの重大な職能を營んでゐるのに接する。すなはち、總ての生産物は何よりも先に、そうしてまた最も容易に、貨幣と交換せられるから、貨幣は生産物の交換價値を測定することをうる尺度である。そして、この、貨幣の職分は延いて、價値の變形として現はれる廣汎な概念、すなはち價格に導くのである。

理論家のうちには(例へばカッセルの如く)、上述の意味における價値概念を經濟學一般から排除した方がよいと考へるものがある。もとより、發達せる交易經濟においては、たゞ價格のみが出現するには違ひはないが、それは余りにゆきすぎてゐる。われわれが、發達せる交易經濟では、生産者の目指すところは、たゞ交換價値

のみであると言つても、それはたゞ單に、事物が經濟上現はれるのは、その欲望滿足に對する直接の意義においてゞはなく、實に市場經由といふ廻り路をしたにほかならないと、かういふ事實の結論を下したまでゝある。生產物は一般には、たゞ市場經由の道をとりうるかぎりにおいてのみ、經濟上存在しうるのであるが、然るに、生產物が市場を經ることゝなると、それは交換量として現はれる。それで、交換比例が、從つて價格が、生產物の通る路においての最も緊要な事柄である。これがため、この交換比例の決定を支配する法則を闡明することが、これが理論經濟學の核心の問題である。

七　對應する諸槪念の照合

上述してきたところによつて、われわれは、互に同一ではないが、互に對應するところの、多數の一對づゝの槪念から、一つの全表を作りあげることができる。われわれは從來陳べてきた諸槪念を、なほ多方面に亘つて擴張することができる。が、

恐らくその一つ一つについて特に詳論するの要は、今においてはもはやないであらう。

欲望——需要（需要狀態の連續としての市場景氣）
財貨——商品
生産手段（工具）——資本
經費——費用
使用價値——交換價値（價格）
勞働——賃勞働
産出力——收益性
財貨産出——商品生産
欲望充足——所得
活動——企業

かくの如く、經濟の結構は相對應する根本諸要素において與へられてゐる。 經濟の自然的内容は、經濟形態が異らうとも、或は同一であるかもしれない。 だが、わ

れわれの興味を惹くところは、この內容ではなく、かへつて、社會的諸條件と、これと共に與へられる諸形態、これである、そして、この諸形態において、かの內容は發展をとげ、また相互關係の中に入り込むのである。マルクスの言葉を藉りれば、紡績機械は紡績機械である。一定の事情の下において、それは資本となる。ニグロはニグロである。それは、一定の社會的條件の下において、奴隷である。

第三章　勞働價値學說

一　交易經濟における交換過程の意味

さてこれより轉じて、われわれは發達せる交易經濟の分析に移らう、この經濟の根本形態及び根本諸概念は從來われわれの確立したところである。發達せる交易經濟に對する經濟理論の課題は、交換聯關の網狀體を統一的に說明する點に存する。發達せる交易經濟の一切の經濟的聯關は、交換關係であり、交換聯關である。それらは貨幣によつて單に媒介せれてゐるにすぎない。購買といふ購買はみな交換である。なぜなら、賣手は實際上には常に、今ではなくとも將來いつかは、その貨幣を再び商品または仕事に對して、引き渡さうと考へてゐるから。また、勞働を給付することも交換である。なぜかといふに、勞働給付は、欲望を滿足せんが

ために、貨幣と引き換へに與へられるからである。全生產は、經濟的に考へてみれば、交換である。生產者――これをわれわれは今や企業家と名づけようと思ふ――は交換して生產諸要素を手に入れ、さうして、新に生產諸要素及び彼自身の必要品を買入れんがために、生產物を再び貨幣と交換するのである。だから、理論的經濟學の課題は、市場における機構を、市場で生じる交換關係を、說明することと、この交換關係がいかなる合法性に從つて成立するかを探究することと、これである。そして、いかなる程度において、人々がその欲望を滿足しうるか、またいかなる割合で、消費財が、生產に從事する個々の人々に配分せられるかは、實にこの交換關係の左右するところである。だから、われわれは經濟的行程そのものを考察しよう、總ての人々は、彼等が經濟活動を營み、そして經濟行爲によつて財貨を手に入れるのでなければ、欲望を滿足することをえないものと、假定しよう。從つて所得には、經濟的諸法則に從つて構成せられる所得しかなく、消費には、かゝる所得に基いて行はれる消費しかない。つまり所得には、交換關係から生じる所得しかなく、その結果、また所得といへば、諸商品が市場で相互に入りこむ交換比例の所產にすぎない

のである。

かくてわれわれは、商品相互の交換比例から、從つて、われわれの市場で發見する量相互の關係によつて測られるところの價格から、出發しなければならない。この際、われわれが商品對貨幣の關係を考へようが、または、商品相互の關係を考へようが、なんらの相違も生じない。余は、リンネル1ヱルレ＝5マルクと言ひうると同様に、リンネル1ヱルレ＝鐵1キログラム＝砂糖2キログラムなどと、言ふことができる。第一の表現はより簡單であるが、しかもその含蓄するところはより多い。第二の表現は、貨幣經濟が想定せられるとき、はじめて一般に展開せられうる、なぜなら、財貨相互の直接の關係は、貨幣經濟なくしては不可能であるから（上述參照）（註一）。これに反して、貨幣表現は――貨幣經濟を想定すれば――商品の表現に變へられることができ、そして、内面的にもまたかゝる意味を有する。なぜなら、貨幣は決して最終の目的ではなく、つねに交換の中項たるにすぎないからである。

（註一）嚴密にいへば、貨幣經濟なくしては、商品相互の關係は、僅に間接の交換行爲の結果として表

現しうるにすぎない。従つて例へば、紡絲2ポンド＝リンネル1エルレ＝鐵10キログラム＝砂糖2キログラム＝石炭50キログラム等。これにより、斷るまでもなく、紡絲から石炭に達するのには、上掲の如き幾多の中間停車場を經由するほかないといふことがわかる。これに反して、次の

紡絲2ポンド＝リンネル1エルレ
紡絲2ポンド＝鐵10キログラム
紡絲2ポンド＝砂糖2キログラム
紡絲2ポンド＝石炭50キログラム
紡絲2ポンド＝x
紡絲2ポンド＝y

などの諸關係は直接には成立しない。

この種の交互的關係は、同一の、一般に承認せられた交換商品の、それゆゑ貨幣の、媒介による規則正しい間接交換を既に前提するものである。

(a)「需要と供給」の法則

われわれはそれゆゑ、交換比例を貨幣價格で表現する。ところが、價格はいつたい何によつて決定せられるかと尋ねると、實際家は直に答へるだらう、價格は、需

要供給によつて、すなはち總ての經濟行爲を支配し、總ての市場を統轄し、いかなる變更をも許さない絶對的の法則である、かの「大法則」によつて決定せられるのであると。 一切の價格が需要供給によつて決定せられるとの命題は、誤ではない。それは疑もなく、正しい。 なぜかといふに、ある商品に對する需要が阻まれるときには、例へば、前週よりも砂糖の需要が増したにもかゝはらず、市場には前の週よりもより多くの砂糖がないときには、砂糖の價格、すなはち、賣手がその砂糖に對して受けとることができ、從つてまた要求するであらうところの、貨幣等價は上騰するだらう。 そして、反對の場合にはまた反對の結果に。 しかしながら、需要供給の方式をより精密に考察するならば、それは單に、需要と供給とがその相互の比例において變化するときには、價格もまた變化、する、と、かういふことを謂ふにすぎない。 しかるに、問題は次の如くである。 (1) 需要と供給とになんらの變化も生じないとき、それゆゑ平衡狀態が存してゐるとき、價格はいかにして定まるか。 そして、この平衡狀態はいかなる價格のもとに出現するか。 それはいかにして可能であるか。 (2) 需要供給が變化するのは、いかなる事情に依存するか。 かゝる變化はいかにし

て生じるか。そして、(3)この變化は量的にいかなる作用をもつか。需要供給における變化の結果としての價格の騰落は何を意味するか。この變化は持續的のものであるか。それはいかなる大いさであるだらうか。

それゆゑ、需要供給の方式を引合ひに出すことは、この方式がたとひ實際家にとつていかに貴重な働きをなさうとも、價格問題を解決するものではなく、かへつて幾多の問題を新に投ずるものである。殊にそれによつては、いかにして人間の經濟が單に交換關係に因るばかりで自ら維持せられ、そしてまた絶えず更新せられるかの理は、闡明されない。獨立の個々の生産者(上に展開させた意味に於ける)によつて行はれてゐる生産が、單に需要供給の方式に因るだけで、いかにして可能であるか、しかもその生産が絶えずそれ自身のみの力で、商品を造り出す生産として可能であるといふふうに。外部から立てられた計畫がなに一つあるではなくまた、統制者の干渉の手の加へられるでもなくして、全體としてみて人間の欲望が滿足せられるのは、いかにしてか、それも單に偶然的ではなく、また一度だけではなく、繼續して行はれる生産行程において、永久的に滿足せられるのは、そしてそ

のためこの生産行程が、あたかもある計畫に基いて建設せられてゐるかの如き印象を與へるのは、いかにしてか、しかも實際はこの生産行程は單に、總ての人々が「經濟人」として自己の利益を追及するといふことによつて成立してゐるにすぎないのに。最後に、この商品生産行程が生産期から生産期へと次第に段階を昇つて、すなはち規模を擴大しつゝ營まれるのは、いかにして可能であるか。

(b) 單なる使用價値は説明理由にならない

いかにして生産物が互に交換せられるか(この場合には貨幣は單に媒介者として觀察せられるにすぎない)、この問題に對して與へられるであらう、第一の解答は極めて手近にある。すなはち、人間にとつてその手の生産物が重大であるのは、彼等がこれをもつて――欲望充足經濟において直接になされようとも、發達せる交易經濟において間接になされようとも――欲望を滿足するからである、これがために、生産物相互の交換比例に基準を與へうるものは、個々の生産物の效用である、それゆゑ、生産物の價値を決定しうるものは使用價値である、とかういふ

のである。けれども、この路の行くべからざることは直にわかる。なぜかといふに、高い使用價値のあるものであつて、その低い使用價値のある他の物との交換比例が、極めて不利なことを示すものがあるからである――例へばパンのダイヤモンドまたは金に對するやうに。かくて、われわれは使用價値をもつては少なくとも、一般的の意味における使用價値をもつては、行論を進めえない。それは理論上使用しうべき概念ではない。少なくとも、このまゝの形式では、それは利用できない。それで從つて、從前の諸の理論的體系においても亦、なんらの役割をも演じてゐないで、かへつて、説明の出發點としては、前もつて否定せられる。

二　勞働價値學説の根本思想

かくてわれわれは、先づもつて使用價値を、財貨相互の交換比例の尺度として用ひることができない。需要供給の方式は、上掲の理由からして、充分のものでない。それで、生産物相互の交換比例は何に基いて決定せられるか、しかも、長きに亘つて

決定せられるか。かういふ問題が提起されたとき、ひとは、交換せられる生産物が槪して、勞働生産物であるとの事實を、看過することをえなかつた。もちろん、かういふ制限を設けることは必要である。なぜならば、自然の賜物もあれば、更に勞働をもつて生産せられるには相違ないが、必しも再生産のできない物があり、そして最後に、例へば、人間の勞働力のやうに、一見してはそのまゝでは勞働生産物とは解しがたい交換物があるからである。事實、生産物が勞働生産物として交換せられるといふ、この出發點をして理論上充分に實り豐かならしめるがためには、そしてそれに宿つてゐるあらゆるものをそこから取りだすがためには、學問上の幾時代かの勞作を必要とした。

(a) 勞働價値學說の一般的意味

發達せる交易經濟における生産物は、それに含まれてゐる勞働を尺度として、交換せられると主張するなら、それと共にまた、かういふことが當然いはれてゐるべき筈である、すなはち、この觀點からして、ひとは、經濟行程の全景に到達すると。

それゆゑ、市場で發見せられる一切の生產物は勞働生產物と解せられ、これを生產するに要する勞働時間を尺度として交換せられつゝあるといふふうに。また國民經濟において獲られる所得といふ所得はみな、この同一の觀點からして構成せられ、それの大小の相違を、この原則から了解することができるといふふうに。また、一切の財貨の集積、すなはち、一切の財產といひ、上に展開させた意味における「諸資本」といひ、最後には、土地——それ自身では正しく勞働生產物ではないもの——の他のあらゆるものに對する交換比例もまた、勞働價値の尺度によつて了解することができるといふふうに。それは、眞にどえらい一見打ち勝ちがたくみゆる困難である。

(b) 單純なる交易經濟に於ける勞働價値學說の妥當性

勞働價値の思想を檢するがためには、われわれはまづ第一に、何處にこの思想の本質が存するかを、そして、何處に確にそれが妥當するかを、尋ねなければならない。勞働價値の原則が意味するところは、經濟上の、一切の、量關係が、勞働量の、諸關係と

して解釋しえられるといふのである。　いま假に、ある分業的社會において、原則として人はおのおの各種の勞働をする能力があるものとし、更にそこにおいては、人々は諸種の勞働に少しも價値の強弱を附けることなく、すなはち、ある勞働をするのを好むこと、または嫌ふこと、他の勞働と同樣であるとし、そしてそこにおいては生活するがためには、人々はその手の生産物を互に交換しなければならないとすれば、　この社會においては、なんぴとも勞働するにあたり、その成果が他のより少い勞働の生産物と交換されるやうな勞働はこれを擇ばないであらう。　例へば、ある人が交換によつて四時間の仕立工勞働の成果を手に入れんがために、六時間の指物工勞働をしなければならないとすれば、彼は自ら仕立工勞働に着手するだらう、　そして、指物工勞働をする勞働者は見あたらなくなるだらう。　このことは更に、われわれが單に一種目の勞働を、例へば指物工勞働を、とつて考ふれば一層明瞭となる。　扉と窓とを拵へるのに用ひられた六時間の指物工勞働は、それぞれ六時間づゝのなんらか他の勞働の成果と市場において交換せられるのに――、これに反して、家具の製作に用ひられた六時間の指物工勞働は、僅に五時間のなんらか他

の勞働の成果としか、交換されないものとすれば、總ての指物師はみづから、他の出來るだけ多くの勞働の成果と交換されるやうな種類の勞働に、向ふことゝなるだらう。さうして、この運動は、どの種類の指物工勞働もみな同一の成果を産むことゝなるとき、はじめて靜止するに至るであらう。かくて、勞働價値學説の根本思想は、勞働が人々から自由に選ばれうるといふ前提に結ばれてゐる。その時には――更に總ての勞働は同等の疲勞を惹きおこし、また、いづれの勞働もみな同樣に好んで選ばれるといふ前提の下において――、長きに亘つてみれば、二勞働時間づゝの成果は任意の他の二勞働時間の成果と互に交換されなければならないであらう。このことは自明のことであつて、それに對しては、なんらの特別な思索を費やすの要をみないことゝ信じる。萬事は懸つて一に、この基本現象からの諸種の乖離が存するにかゝはらず、經濟上の一切の交換關係が、勞働價値思想の基礎の上に立つて、理解しえられるかどうかを、證明することに存する。かくて、人間勞働は――特にそれが同樣に困難なものであるとき――交換關係の尺度として觀察せられることをうる。これが古典派經濟學の根本思想である。そして、このやうに

規定されるなら、この思想はまた攻撃し難い。

（註一）この思想は、スミス、リカアドー及びマルクスのもとにおいて、それぞれ異つたニュアンスを帯びて、與へられてゐるのであるが、余はここにはそれを問題の外におく。

そこでは單に單純なる人間勞働しかなく、そして人々が互にその生産物を交換してゐるところの單純なる交易經濟（四一頁）においては、總ての生産者は同時に勞働者である。彼等はその生産物を分業的生産において拵へる。すなはち、各の生産者は、彼みづからの用ふるものを拵へないで、他人の需要の向ふものを拵へる。彼がこれらの生産物を拵へるのは、たゞ彼が、みづから投じたところと同じだけの勞働時間の成果を、取り戻せるときにかぎるであらう。もし、それがより尠なければ、彼はその行爲を非合目的と考へるであらう。なぜかといふに、彼は最小の勞力を投じて、最上の成果を收めないからである。（こゝにおいても、われわれはもちろん總ての人を「經濟人」と考へる）。彼自身は恐らく彼の勞働から、もはや身を退くことができないであらう、けれども、誰も好んでこの勞働を敢てしようとするものはないであらう。その生産者の子弟は、身を他の業務に捧げるであらう。かくて

これがために、遂に平衡の回復せられるまでは、需要と供給とに變化が起る。自己の利益への努力、それゆゑ各人が自己の勞働時間を出來るだけ最良の方法で用ひようと試みることと、これがこゝに勞働價値の法則を實現する。この種の生産及び分配のもとにあつては、勞働價値法則は自明のことである。

同樣な自己の利益の認知、最小の費用をもつて最大の效果をあげやうとする努力、それは分業をまた分化させるであらう。分業の營まれることが、廣汎となればなるほど、一勞働時間の成果はますます豐富となる。勞働の分割が擴大せられるとともに、同一の勞働時間をもつてより多くの生産物量が、もしくば、より少ない勞働時間をもつて同一の生産物量が獲られるであらう。これらの場合は兩者とも有利である。總ての生産に亘つて同時に同樣な分業の改善が施されるときには、再び等しい勞働時間は等しい勞働時間と交換されるであらう。だが、その間に、その生産物、すなはち、この同一の勞働時間の成果は、より多くなつたであらう。けれども、國民經濟における勞、働、價、値、は變らないであらう。國民經濟の各員は、例へば從前通りに日々十時間もしくば十二時間の勞働に服し、そして、これと交換に再び

十時間もしくば十二時間の勞働の生産物を受取るであらう。けれども、この日々の交換行爲の內容は變つてしまつたのであらう。從前よりも多くの財貨が生産せられ、從つて交換においても從前よりも多くの財貨が手に入り、そして、より多くの財貨が消費せられる。このやうな社會の富は、使用價値において增加したのである。だが、恐らく交換價値の大いさには變りはなかつたであらう　そして勞働價値の思想そのものにも些の變更をみないであらう。それゆゑこのやうな勞働力の新編制(分業などの進步はいづれもみな勞働力の新編制である)の眞中においても、勞働價値の根本法則はまた實現せられる、しかも、新編制前に行はれたのと同じ方法で、すなはち、勞働力の流出流入によつて。この勞働力の流出流入は波の盲目的な運動ではなく、かへつてそれによつて、勞働聯關の基本的均等化の行はれる、すなはち、自己の勞働をもつてできるだけ最上の效果を擧げやうとする、總べての人々の努力の行はれるこの生産組織の法則が實現される。もし生産の增加が單に一勞働部門にのみ起るときには、この生産部門における生産者は、最初には著しく優先の利を占める。彼等は槪してその勞働生産物を交換して、それよりも

長い勞働時間の成果を收めることができる。 彼等が從來と同樣に長く、例へば十時間、勞働するならば、彼等は從來よりもより多くの生產物を造り出すであらう、それで、彼等の商品と他の生產物との交換比例が變更せられて、優先の利の一部分は取り去られる。 それでもなほ利益が存するかぎりは、そのときには他の生產者がこの生產に取りかゝりはじめるから、 結局は、勞働時間の產物と勞働時間の產物との間には等價値關係が回復せられ、そして、價値法則は再び有效となるのである。 それでこの動搖によつては、たゞ生產の內容が變つたにすぎないであらう。すなはち、從來よりもより多くのものが、しかも從來とは異つた比例で、生產せられる。 これに反して、今においても各の勞働時間は他の各の勞働時間と同樣に通用する。 だから、個々の生產部門における生產の改良はいづれもみな、長きに亘つてみれと、總ての生產者の財貨補給を同じ程度で改良するか、もしくば彼等の勞働苦を同じ範圍で減殺するものである。 こゝにおいてはそれゆゑ―― 利己主義の生產者の意思に反して―― 自己の利益のためにする行爲はいづれもみな、同時に、自働的に、必定的に、その遠作用についてみれば、主として他の總ての人々の利益とな

る行爲なのである。

この生産組織に對して、なほ一つの注意を加へておきたい。すなはち、勞働はすべて同樣のものであるわけではない。困難な勞働もあれば、單純なものもある、愉快な勞働もあれば、不愉快なものもある。もし分業の行はれてゐる單純なる交易經濟において、いづれの勞働時間の成果も、ある任意の他の勞働時間の成果と交換せられるものとすれば、困難な、不愉快な勞働を實行しようとするものは、一人もないことゝなるだらう。しかもなほ、人間の切實なる欲望を滿足するがために、困難で不愉快な勞働が必要であるならば、この勞働の生産物は、より多くの勞働時間の成果と交換されなければならない。何故に、その通りでありうるか、またさうあらねばならぬかは、なほ今後においてわれわれの取扱はんとするところである。たゞこゝにおいては、われわれはこのことを斷定し、從つてまた、困難で不愉快な勞働の生産物は、あたかもそれに含まれる勞働時間の數がより大であるかのやうに交換されるだらうと、いつておけば充分である。事實的には、このやうな生産においては困難な、または不愉快な勞働をする生産者は、いづれの他の人々よりも、

より長くは働かないで、例へば、總ての他の人々と同樣に十時間勞働する。けれども、彼の生產物は、あたかも彼が日に謂はゞ十三乃至十五時間の勞働をしたかのやうに、そんなふうに交換されるであらう。これ以上この問題に關して論じることは、目下のところ、われわれのなしえざるところである、だが、この箇所においては、それで充分である。

三　發達せる交易經濟における勞働價値學說

假に、あらゆる人々が單に勞働者にすぎなければ、あらゆる商品が單に勞働生產物にすぎなければ、それゆゑ、勞働時間の增加につれて、商品が任意に增大しえられるならば、勞働價値の法則は、われわれを滿足して遺憾ないといふべきであらう。けれども、事實はさうでない。そこで、次のやうな疑問が投ぜられる、すなはち、勞働價値の根本思想は發達せる交易經濟においても、間然するところなく、われわれ

われに總ての交換關係を解くに足る鍵鑰を與ふるものであるかどうか。この疑問はまた果してわれわれは發達せる交易經濟をも理論上一個の勞働聯關と解しうべきか否かとの問題とその意味を同じうする。といふのは、實際上においては、いやしくも個人の行爲の自由である發達せる交易經濟は、いづれも一個の勞働聯關である。すなはち、分業によつて人々は互に切離されるが、しかもまた再び結合される。彼等は、獨力で經濟してゐる個人としては、互に別々になつており、その利害は相ひ反するものであるが、しかしそれにもかゝはらず、依然として彼等は互に倚頼し合つてゐるのであり、交換關係を通じて彼等は互に絶えず必然的に結合されてゐるのである。

四　第一の困難、利子問題

(a)　機械採用のための諸條件

單純なる交易經濟における交易關係の分析にあたつては、生産が工具をもつて行はれてゐるとのことは、これを問題の外においても別に差支へなかつた。互に交換せられるものが純然たる手工勞働の生産物であると、かういふことから出發しても、別に思想過程を不正確ならしめることはありえなかつた。然るに、發達せる交易經濟においては、生産手段は生産の重要なる構成要素である。そこでこのことからして、勞働價値思想には、その第一のゆゝしい困難が生じる。この終極生産物の生産に缺くべからざる生産手段は、それ自身人間勞働の成果である。勞働價値の根本思想によれば、生産行程の中に生産手段を組入れることは、次のやうにして果されるべきものであらう、(1)工具はその應用が有利であるときに採用せられる。だが、それが有利なのは、これを使用することによつて、勞働が節約せられるときである。工具が勞働を節約するのは、この工具の製作に要する勞働時間に、この工具をもつて終極生産物を生産するに要する勞働時間だけを加へたものが、この工具或は改良せられた工具を用ひないで、該生産物を生産するに要するところの勞働時間よりも、より僅少なときである。だから工具が勞働を節約するかど

の問題にとつては、工具の製作時間ばかりでなく、またそれの「壽命」も、すなはち、その工具を用ひてこれが磨損しつきるまでに生産せられうる生産物の數量も、そのときどきに決定的である。(2)かくて、生産物の間には新な交換比例が作りあげられることゝなるだらう。例へば、從來一ポンドの紡絲は一〇ポンドの鐵と交換せられたが、紡絲の勞働時間が半分に減ずるなら、そのときには機械採用の結果として、一ポンドの紡絲は五ポンドの鐵と交換せられることゝなるだらう。いふまでもなくそれは常に、紡絲には單に勞働時間のみが含まれてゐるといふ前提の下においてゞある。かくして、工具及び諸機械の採用は、生産物の交換比例を變更するの結果を招かざるをえないことゝなるだらう。けれども、勞働價値原則はそれにもかゝはらず、工具の使用にもかゝはらず、なほ常に妥當すると考へえられるであらう。

(b) 機械の採用に伴ふ價値剩餘

さて、われわれは再び具體的の機械の、例へば紡絲生産における紡錘の採用を考

へよう、そのときには紡錘の採用にあたつて二つの場合が可能であるだらう。或は同數の人々が、紡車をもつてする代りに、機械仕掛の紡錘をもつて紡絲を生産するであらう。そのときには生産物の數量は極めて著しく增加される。他の場合には、遙に小人數の人々が、より少い勞働時間をもつて紡絲を生産するであらう。だからして紡絲の數量そのものは增加しない。われわれは第一の場合を考察しようと思ふ。なんとなれば、他の場合には、それの遠作用において、未だわれわれのこゝに追及しえない幾多の錯雜した事項が現はれるからである。それゆゑに、從來と同人數の人々が、紡車で勞働する代りに、機械仕掛の紡錘を用ひ、さうして幾倍かの量の紡絲が從來と同一の勞働時間で、生産されるとすれば、この生産は、たゞ國民經濟、すなはち、市場がこの增加した紡絲量を「消化」しうるときにのみ可能であるだらう。そして、市場がこれを消化しうるのは、これが對價を提供することができ、且つその心構へでゐる買手が存するときに限られる。さて假定によれば、增加した紡絲量は從來と同量の勞働の成果である。從つて、總體としては、これに對して從來よりもより多くの他の生産物が交換せられるべきではなからう。だから、

紡絲生產者等は、新しい技術的構成において、同一の勞働時間を費し、それに對して從來と同一の對價を取得することゝなるであらう。それで、國民經濟上の分配行程は、わづかに一點において變化したにすぎない。すなはち、紡絲の消費者はすべてその生產物に對して、從來よりもより多くの紡絲を、例へば一ポンドの代りに、時としては二ポンドを受取ることゝなるであらう。なぜなら、紡絲の生產に要する平均勞働時間が半分に減じたからである。こゝに余は一言注意しようと思ふ、それはほかでもない、上述のことが機械採用の結果であるといつてよいのはもちろんであるが、しかしまづ當初においては、紡絲生產者は自己の勞働支出に全然は比例しないで、幾分かより多い對價を受取るべきものであらう。なぜなら、もしさうでなければ、彼は恐らく、從來とは異なつた方法で紡絲を生產しようとの、なんらの誘因をも有たないだらうからである。たゞこの利益は、生產者のできるだけ有利に勞働を用ひようとする競爭によつて、時とともに平準化されるであらう。

（それに就いてはなほ後に述べよう）

この行程は、いつてみれば莊園經濟においてはどんな具合に起るでもあらうか。

この經濟においては、勞働を節約する機械の採用のために、生産物の量が增すならば、この生産物について個々の人々の享ける分前もまた殖えるであらう、そしてなんらの困難も發生しないであらう。恐らくは該生産物がそこには「餘りに多く」ありすぎるといふことが現はれるであらう、すなはち、だがさういふときには、それはたゞ他の滿足されない欲望に較べると、さほど重要ではない欲望が滿足せられるといふにすぎない。これを全く具體的にいへば、經濟共同體の重要な欲望が滿足されないで、かへつてさほど重要ではないものが充されてゐる、すなはち、欲望の順位を顧慮すると、生産が非合理的に行はれてゐるといふのである。けれども生産物は全部、それで、さほど切實ではない欲望を滿足する生産物も亦、消費されるであらう、そして、たゞ翌年には生産力を從來とは別樣に分配しようと試みるだけで濟むだらう。だが全生産が擾亂に陷り、危殆に瀕するやうなことは、なにひとつ起らないであらう。

(c) 發達せる交易經濟における機械採用に伴ふ錯綜

しかしながら、發達せる交易經濟においては、同一の事情が遙に錯雜してゐる。すなはち、前の例に留つてこれをみれば、增加した紡絲は、その對價(單位生產物についで算定せられたもの)が引き下げられてさへも、市場はこれを消化しきれないし、收容しえないと、いふことが起りうるのである。實際、このことは、半値位では紡絲の消費量が二倍とはならないで、僅に一倍半位しか消費しようとしないといふふうに、人間の欲望が秩序づけられてゐるときには、事實おこるのである。さういふときには紡絲の著しい部分が賣り捌けないまゝで殘るであらう、すなはち、交換せられえないであらう。ところで紡絲生產者にとつては、使用價値の創造ではなく、交換價値の創造が問題であり、また問題たらざるをえないのであるから、このやうな紡絲生產は經濟上可能ではないだらう。

もちろん、この場合にも、紡絲に對する極めて切實な欲望が今もなほ滿足されないといふことは、ないわけではない。しかし、それは自ら生產物を有うてゐて、それを紡絲と交換することのできる人々の欲望ではない。が、さうなれば現に欲望衝

動で充されないものがあるにかゝはらず、紡絲は「賣り捌けない」まゝに殘るであらう。今や、紡絲の一部は、他の商品と交換せられないのであるから、(そして、貨幣の介在するときにあつても、終局において、互に買ひとり合ふものは商品である。貨幣が商品を買ふのではない、假に貨幣は買ふものとしても、むしろ貨幣は單にそれが支拂はれた商品の代表者であるにすぎない)、まさに他の商品もまた交換されることをえない、それらも同様に「賣り捌けない」まゝにとゞまる。かくて、幾らかの商品量が賣り捌けないで殘るといふことになるばかりではない、實に、一切の生産に亙つて擾亂が生ずる。ある生産において「過剩に」生産せられたとすれば、それはこの生産者が自らの需要を限縮しなくてはならないといふ結果を招き、そしてそれは、今や他の諸生産においてもまた「過剩に」生産されたかの趣を呈するだらう、といつたことを意味する。たゞ僅に、幾多の障碍を經て、再び平衡狀態が回復せられ、こゝにおいて、總ての商品が販路をみ出しうるに、すなはち、他の商品と交換せられうるに至るであらう。このやうに機械の採用は、それは生産量を高め、生産物相互の交換比例を本質的に變更するものであるが、發達せる交易經濟において

は、常に諸の困難を伴ふものである。なぜなら、前途を豫見する意思があつて、個々の生產の範圍を統制的に決定するのではなく、かへつて、生產物販賣のために奔走することは、個々の生產者に放任されてあるからである。こゝにおいて、いかに生產界における變化のたびごとに、それは延いて諸の困難に導くことゝなりうるかは、明瞭である。なぜなら、市場はなんら組織立られてゐないから。むしろそれは、生產と販路について、すなはち交換に關して、豫め相互の間になんらの意思の疏通をもたないところの生產者たちの交換關係及び努力の總和である。

しかしながら、機械の採用も、勞働價値に基く交換の根本法則には、なんらの變更をも加へないといふことは、正しいであらうか。これは極めて重要な問題であつて、いま一般的の形式においては、次のやうに設問される。すなはち、上に展開させた意味における資本の應用は、それゆゑ、「商品の生產行程における使用を目的とする、抽象的な商品處分權」を伴ふ生產は、その生產された生產物の交換比例に、なんらの變化をも與へないであらうか。われわれは今までそれは與へないものと假定してきた。

資本をもつてすれば、資本なしのときより、よりゝ多くの生産物が作り出される、この事實は前の假定に反するものではない。換言すれば、資本が物理的生産力を有するからとて、すなはち、その助力をもつてすれば、單に勞働のみをもつてするよりも、よりゝ多くの生産物の單位が作り出されうるからとて、未だなほ價値についての剩餘は生産せられない。なぜかといふに、生産物の分量がより、多くとも、機械の採用後には以前のよりゝ少ない分量に較べて、もし兩者の生産物量に同一の勞働時間が含まれてゐるにすぎなければ、それは決してよりゝ大なる價値をもつわけにはゆかないからである。

それでわれわれは今まで、機械或は資本の使用は、勞働價値法則に對してなんらの難點をも構成しないと考へてきた。だが、われわれの結果を現實と較べてみると、極めて著しい背馳があることが分るであらう。もちろん、理論上の結果と現實との間に背馳のあるごとに、理論上の思想過程を强ひて變更するには當らない。なんとなれば、單に、結局は解決さるべき外見だけの困難が問題とされてゐるにすぎないことが屢ゝあるからである。(われわれは、土地の協働といふことのため

に、勞働價値法則が破棄されはしないかとの問題を論じるに際して、このやうな外見だけの困難に出合はすだらう)。しかし、こゝにわれわれのぶつつかる事實は、大いにわれわれの頭腦を痛めるものであらう。すなはち、現實において觀察せられるところでは、「資本」を用ひて生産された生産物は、單にそれを生産するに必要なる勞働時間の尺度に準じては交換せられないで、かへつて、それはより、高い、價値を實現する、なぜなら、このやうな生産においては、絶えず繼續して、費用以上の、それゆえ、投下せられた勞働給付以上の、剩餘があげられるからであつて、これは、現實において利得、利子、地代等として、われわれの熟知するところである。いかにして、このやうな利子が、長きに亘つて可能であるか、しかも總ての生産物は、單に、そのうちに含まれるところの勞働時間の尺度に應じて交換せられるにすぎないといふのに。商品の生産には、資本財、原料、勞働力が必要であるが、それらは、結局、單に勞働費用にすぎない。しかるに、その商品を賣却すれば、たゞに、この勞働費用に對する對價が、回收せられ、かくて更に生産を新に開始しうるばかりでなく、またそれ以上になほ剩餘が獲得せられるのは、いかなるわけのものか。これが利子の發生理

由の問題であつて、勞働價値原則に對向する第一の最大の困難である。

(d)　餘剩生産物は永久に餘剩價値であるか？

そこで、一度われわれは、生産手段が生産行程のなかに取り入れられる途を辿つてみよう。發達せる交易經濟においては、生産手段を所持するものは、すべての人々がみなといふのではなく、僅に一群の人々だけである。例へば、國民經濟において二〇人の紡絲生産者があり、彼等はすべて同一の方法で、すなはち、いつてみれば一人の勞働者が二〇個の紡錘を取扱ひ、これで一〇時間に五〇ポンドの紡絲を生産しうるといふふうに、紡絲を生産するものとしよう。さて、この二〇人の生産者のうちの一人が、彼の經營に改良を加へ、この改良によつて一人の勞働者が四〇箇の紡錘を取扱ふことをえ、從つて、十時間に一〇〇ポンドの紡絲を作り上げることをうることゝなれば、そして、またわれわれが假定するに、これと同時に、人口の増加、全體における生産の膨脹の結果として、今までよりも多くの生産物が市場に現はれ、ために嘗ては $20 \times 50 = 1000$ ポンドであつたものが、今や $21 \times 50 = 1050$ ポンド

の紡絲が日々消費せられうるものとすれば、新しい方法でやつてゐる、かの一人の生産者は、彼の日々の餘剩生産物――それは彼の雇つてゐる勞働者一人當り五〇ポンドの高に上る――を賣り捌きうるであらう、そしてそれに對して、他の綿絲紡績業者の二倍の交換財を受取るであらう。なるほど彼の支出はまた從來よりも多額となるだらう　なんとなれば、彼は他の綿絲紡績業者に比して、倍數の紡錘、倍量の原料、倍量の石炭等を、必要とするだらうから。が、これに反して、彼は他の紡績業者よりも、より多くの勞働者を雇傭しはしないであらう、從つて、彼は剩餘を獲るであらう。この剩餘は、彼がその他の綿絲紡績業者に較べて節約するところの賃銀と、同じだけの大いさであらう。事情がすべて同樣で變ることがないなら、すなはち、たゞ一人彼のみが改良の利を有してゐて、その他の綿絲紡業者は仕來りの方法で働き、彼自身もまたその生産を、もはやそれ以上には擴張しないなら、綿絲とその他の生産物との交換比例には、それゆゑ紡絲の價値には、なんらの變化も起らないであらう、そして、彼は永久に剩餘を獲得するであらう。

しかしながら、現實においては機械の採用は、決してこのやうには行はれないで

あらう。なぜかといふに、この場合において、例へば、このやうに本質的な改良を用ひてゐる綿絲紡績業者は、恐らく彼の經營を擴張するであらう、より多くの綿絲を作り上げるであらう。また、他の紡績業者は紡績業者で、その改良を自分のところにも取り入れようと圖るであらう、そして、恐らく彼等はそれに容易に成功するであらう。かくして、總ての綿絲紡績業の生產經營は技術的進歩をとげるであらう、そして先づ第一に、生產物量が極めて著しい增加をみるであらう。かく增加せられた生產は、直ぐには、また常に同一價格では販路を見出しえないであらう。なぜかといふに、その他の諸生產においては、短時期のうちには恐らくは大した變更は行はれないであらう、それで、從つて紡絲生產者が彼等の生產物をもつて、その數量の增加に該當して、他の生產物の同樣に增大せられた數量を買ふべき可能性は、全く存してゐないであらう。そこで彼等はその生產物をもつて、互に市場で競爭することゝなるであらう。われわれの前提によれば、交換は、交換者が自己の勞働の生產物に對して、同じ長さの、同じ困難さの他の勞働の產物を受け取るかぎりにおいて、行はれうるのであるから、長らくのうちには競爭の作用が現はれて、

綿絲の價値はその勞働價値にまで、すなはち、生產時間の短縮に應じて、引き下げられることゝならなければならないだらう。そして、過渡期において紡絲の生產者たちが剩餘を獲得しえようとも、それは未だ全部の競爭者が改良の實を掌中に收めなかつたせいであつて、漸時、新しい技術及び方法の普及するにつれて、この剩餘は消滅することとなるであらう。なぜなら、このやうな餘剩がなほ取得されうるかぎり、資本及び勞働力は長くこの有利なる生產に流入して熄まないであらうから。それゆゑ、われわれが長きに亘つては、生產物はその製作に必要なる勞働時間の尺度に準じて交換されると、想定するとき、機械の應用と資本の應用とは、單にこの關係に一時的の訂正を加へうるでもあらう、が、生產者相互の競爭が自由なる場合には(このことは實際必要である)、そしてまた各產業のどの營業部門にも自由に就くことができる場合には、長きに亘つては、この部門において使はれた勞働時間の實現のみが行はれうるにとゞまり、それ以上のことは起りえないであらう。技術的改良を施したからとて、一時、優先の利を占むるからとて、資本をもつて働くからとて、永久的の剩餘をあげることは不可能であらう。なぜかといへば、こ

の剰餘は生産者及び資本所有者の競爭努力の犠牲となつて消失することゝなるだらう。これ「經濟人」は己れの取得しうる利益といふ利益によく注意してゐて、他を顧みることによつてもこの點については決して踏み誤らないといふ法則から當然に生じるところである。

(e) 利子の難點は依然として存續する

けれども、この經濟理論上の結果は、事實と甚しく矛盾する。なぜかといふに、この理論によれば、工具の使用者は永い間には結局、單に彼の勞働費用のみを、報償として受け取るにすぎないことゝならざるをえないだらうから。そして技術の利益といへば、それは單に、給養の一般的の向上において、より豐富なる消費において、表はれるであらうが、機械及び資本の使用者の期する利得には、現はれないであらう。このやうな秩序でも、もちろん技術的進歩を阻みはしないであらう。なぜかといへば、改良を加へられた工具の使用者は中間利得を目的としており、これを放棄するなどといふことはあるまいからである。彼は過渡期において、ある割

增金を取得するであらう。 だが、それは消滅するものであるから、再び割增金を享有せんがためには、彼は新規の發見をなさねばならないであらう。 技術的進歩のあるごとに、消費は忽ちのうちに全體に亘つて、消費高の增大といふ形において、この進歩の恩惠を蒙ることゝなるだらう。 技術的進歩の紹介せられるに伴つて進行する、このやうな過程は、恐らく望ましいことであり、且つ合目的であらうが、しかし、事實と合致するものではない。 事實上われわれのみところによれば、かの使用者は單に工具の勞働費用のみを、また、單に中間利得のみを收得するのではなく、かへつて、彼は彼の費用以上に、更に、消滅せざる、恒常的の餘剩を取得する。 そして、こゝに、この、今までわれわれの解說しえない利子の原因の問題が生じる。

繰り返へして强調することを許されるならば、 機械の應用による生產量の增加は利子の說明を與ふるものでない。 資本の物理的生產力は、單に、一勞働時間に對應する生產物の、數量が增加を來たすといふことの條件をなすにすぎないであらう。 生產高、並に賣買高は高まるでもあらう、 しかし、生產者によつて實現される價値はさうではないであらう、 まことに、機械はなんらの利子をも生產しうる

ものでない、それは單に生産物を生産するにすぎない。なにゆゑに利子が生じるかは、機械的設備の技術的能力から、説明せられうべきものではなく單に交易經濟の埒内においてのみ、經濟的に説明せられうるにすぎない。だが、こゝに勞働價値學說の見地から、利子の説明を試みようとするに先だち、われわれは、この學說の初期に當つては一つの難點を構成するものと思はれたが、遂にリカアドーの思索力をまつて征服せられたところの、一つの、他の問題に向かはう、すなはち、地代の問題これである。

五　第二の困難、地代

(a)　問題の定立

生産にあたつて共に働くものには、單に、勞働力と「資本」とがあるばかりではなくて、また土地がある。そしてわれわれは現實において、なんらの勞働生産物ではな

いのにかゝはらず、土地もまた價格をもち、他の生產物と交換されるのを看る。この價格はどこから說明せられるか。その大いさは何によつて測定せられるか。更に、われわれの看るが如く、土地で穫られる生產物、例へば、田畑作物、材木や棉花のやうな原料が價格をもち、この價格は土地の所有者をして、自由所得を、すなはち借地料を不斷に徵收することをえさせてゐる。土地に對して借地料が獲られるならば、それはほかでもない、農產物の價格は、たゞに使用された勞働力、諸機械、原料などを償ふばかりでなく、更にそれ以上に剩餘を齎らすといふことを、語るものである。この剩餘はどこから出てくるか。例へば、アダム・スミスの考へたやうに、この剩餘が價格の構成部分であれば、勞働價値原則は用にたゝない。そのときには、生產物を拵へるのに必要な勞働時間が、その生產物の交換比例を決定するのではなく、かへつて、この勞働時間は地主への納物だけ增される。さうなると、地主がその小作料を引きあげさへすれば、それだけで價格は騰貴するのだと、かういふこともなりうるであらう。だから、この困難がなほ存立してゐるかぎり、生產物相互の交換比例は、勞働價値原則によつて理解することをえない。勞働價値原則が

どこまでも維持せらるべきならば、地代は價格の構成部分たることをゆるされない。それが價格の構成部分でなければ、しからば、それは何であるか。

(b) 差額地代としての、リカアドーによる地代の説明
(土地の性質の差別)

リカアドーは上述のやうに、地代、すなはちそれゆゑ、農業生產の費用以上の剩餘に對して經濟的說明を與へた。彼は、英國の農業が主として小作經營であつたから、小作料の形式で、地代に出會はした。(註一)

(註一) 小作人が、永續して暮しを立てゝゆくことをうるがためには、まづ第一に、彼は農業經營から彼の費用を回收しなければならない。それ以上に彼が所有者に小作料を支拂ふときには、これの存在と大いさとは、勞働價値法則から直には導きうべきものでない。

リカアドーの議論は、次のやうにして、最もよく理解せられる。一國の土地は總べてが同じ性質のものではない。人間の勞働は最優等の土地においては、より劣等の土地におけるよりも、より多くの生產物を作り出すであらう。

從つて、まづもつて最優等の土地が耕作せられるであらう。この土地が十分に存在する間は、より劣等の土地に近づくべきなんらの誘因も存してゐないであらう。しかし、最優等の土地がもはや足りないのなら、その次に優等なる土地が耕作に向けられねばならない。この土地においては、從來と同一の穀物量を穫んがためには、從來よりも多い勞働給付が必要である。さて、われわれが、この二等地が十分多量に存在するものと假定するならば、農業者相互の競爭と農耕者對工業經營者の競爭とは、農產物の價格を、劣等の方の土地で穀物を生產するために要する勞働の經費に該當するやうな點に定めるであらう。從つて、それは、勞働價値原則に從つて、直ちに說明せられうべき價格であるだらう。しかしながら、統一のある市場では、同一生產物の各別の單位に對して、各別の價格を要求するわけにはゆかないのであるから、正にこの價格が全體の穀物に對して實現されねばならないであらう。さて、全體の穀物、それで最良の土地で穫られた穀物も亦、劣等の方の土地での勞働費用に該當する價格を實現するのなら、優良地の所有者は、その穀物に對して、彼の費用よりもより大なる等價を受取るであらう。すべての穀物が、あたか

も最劣等の土地で穫られたものであるかのやうに、價格を支拂はれるがゆゑに、彼は剩餘を取得するのである。この剩餘をわれわれは地代と名づける。地代は、劣等地において價値法則に從つて生じる價値の結果である。從つて、この場合における地代は、價格の歸結である、しかし、價格は決して、地代が獲得されねばならないといふ事實の歸結ではない。劣等の方の土地には、なんらの地代も獲得されないで、それはたゞ優良地の方だけである。だからそれは差額地代であり、その結果、勞働價値原則をなんら破るものではない。

この根本思想は頗る實りゆたかである、それで、いまや更に進んでこれを追究しなければならない、すなはち土地の等級は一種にとゞまらないで、その數が幾つかある。耕作が逐次より劣等なる土地へ進展するにつれ、このより劣等なる土地で穫られる穀物の勞働費用は高まる。そのときごとに、それに先んずる優等地の地代もまた上騰するのである。例へば、勞働費用は

第一等地において、穀物1ヘクトリッターにつき　20
第二　〃　　　　　〃　　　　　　　　　　　　　30

第三	〃	〃	40
第四	〃	〃	50
第五	〃	〃	60
第六	〃	〃	70
第七	〃	〃	80
第八	〃	〃	90
第九	〃	〃	100
第十	〃	〃	110

であるとしよう。

しからば、例へば、耕作が五等地より六等地に進展するときには、價格は六〇より七〇に上騰せざるをえないであらう、それと共に、一等地の實現する地代は四〇より五〇に、二等地の實現するそれは三〇より四〇に、以下もまた同樣に上騰するであらう。そして、五等地は從來なんらの地代をも實現しなかつたのであるが、今や一〇の地代を産み出すことをうるであらう。（註一）

（註一） こゝに「より優良なる土地」といふのは、そのときどきに、與へられた事情の下において、すなはちそれゆゑ、與へられたる技術のもとにおいて、より多く收穫をあげる土地と解される。 例へば、ケアリーが駁論して、 土地の耕作はリカアドーの主張したやうな具合には、行はれなかつたやうである、なぜなら、眞先には、さほど豐饒でなくとも、最も容易なる土地が耕作に着手せられ、後に至つて始めて、比較的困難ではあるが、より豐饒なる、より肥沃なる土地が着手せられたから、と言つてゐるのは誤である。 なぜなら植民時代には、困難なる土地は、經濟上よりみれば、一般に存在しなかつたからである。 なんとなれば、それらの土地は、實際その當時においては全く鋤耨を加へることをえなかつたから。

(c) 位置の地代

しかしながら、地代構成の作用をなすものは、單に土地性質の差異にとゞまらないで、位置も亦さうである。 農業生産物の生産に際して生じる費用のなかには、生産者から消費者への輸送費もまた顧慮されねばならない。 この費用は、特に鐵道の發明以前にあつては、重大なる役割を演じたのであつた、 なぜかといへば、陸上輸送は極めて入費がかゝり、挽馬を立てることを要したり、勞働力を要したりするからである。 その結果として、土地性質が同じであつても、消費地から遠く離れて

作られる穀物の生産費用は、消費地附近におけるよりも、より高くつく。從つて、まづ最初には、消費地の近傍にある地面が耕作せられ、後に至つて始めて、遠隔の土地に及ぶであらう。そして、遠隔の地にある地區にまで進展するとともに、すべての穀物の價格は一樣に騰貴し、最も遠隔の地にある地區の最大の費用をも償ふに足るやうになるであらう。かくて、消費地の極く近傍にある性質優良なる一地區には、たゞに性質の地代ばかりでなく、また位置の地代が生じるであらう、それで、單に最も劣等であつて、また最も遠隔の地にある地區のみが、地代なしであるだらう。僅に狹い一帶の地區、しかもこのなかでも、たゞ最も豐饒でない地區のみが無地代であるだらう。その他すべてのものは地代をあげるであらう　そして、それはまた差額地代であるだらう。

これらの差額地代は、穀物に對する需要が、最も劣等でまた最も遠くにある土地の耕作を要求してやまないなら、永く實現されるであらう。それはいかなる競爭によつても減ぜられえない。なぜなら、土地は增加しえないものであるから（上揭六一頁參照）。一定の經濟領域及び範圍内にある、最も優良な性質の土地が、增加し

えないからには、いかなるこの世の力も、發達せる交易經濟内においてはこの地代を除去し、もしくば削減しうるとは思はれないのである。從つて、アダム・スミスはいふ、土地所有から出てくる所得は、所有者を、いはゞ「捜し出す」のであると。但に、性質優良なる土地を增加することゝ、たゞこのことだけが、最後の、そして恐らくは更に、最後より二番目、三番目等の土地を耕作の外に立たしめ、これによつてそのとき最も劣等なる土地で償はれるべき費用を減じ、かくて穀價を引き下げうるであらう。これに伴つてはじめて、優良地の地代が減少することゝなるであらう。(このことは亞米利加の競爭により、歐羅巴大陸において大規模に惹き起こされたところであるが、この亞米利加の競爭は、輸送費の低減に伴ひ、優良地の增加と同意味のものであつたのである)。しかるに、かくの如き行程にあたつて、地代の取得者は全く受働的である。彼は市場關係から、價格から、地代の大いさを定められて受けとるのであるが、その價格は、なほ未だ耕作せられるもののうち、最も劣等なる土地で要する費用の、全然左右するところである。從つて、地代の大いさは、彼の希望のまゝになるものではなく、一方においては人口數の如何に、他方においては、その

國の土地の性情の如何に基く。（註一）從つて、リカアドーが、地代は、なほアダム・スミスの主張した如く、價格の構成部分ではなく、かへつて、それの歸結である、といつたのは全く正當である。

（註一）一國の土地の性情は極めて重大な意味がある。例へば、われわれが假に甲國において

第一等地が	1.000	土地單位
第二 〃	1.000	〃
第三 〃	1.000	〃
第四 〃	3.000	〃
第五 〃	10.000	〃
	16.000	〃

存在すると考へ、他の國は次の如き地割をもつものとする。

5.000
4.000
7.000
16.000

第二の國においては、第一の國におけると同じ人口の場合には、地代は決してさほど高くはありえないであらう。第一の豐饒ならざる國土においてはそれゆゑ、間もなく地代の構成が始

まるであらう、 そして、頗る高く上騰するであらう。 第二の、遙に豊饒なる國土においては、地代の構成は、ずつと後になつて、始まるであらう、 そして、全國土の耕作せられるときにあたつても、地代はさほど高くは上騰しないであらう。 それゆゑ、地代の高いことは一國の富に對する惡い徴候である。 それは、土地が瘠せてゐることを意味し、生活條件の困難なることを意味する。 こゝに既に、私人の利益と國民經濟の利益との間の矛盾が現はれてゐる。

(d) 土地收穫遞減の法則と、その地代に對する意味

土地の耕作は諸種の方法において可能である。 使用する勞働力や工具を少くして、廣大なる地面を耕作することもできれば、また、多くの勞働、諸種の器具機械を用ひて、小經營を極度に働かせ抜くこともできる。 第一の場合には、土地のなかにある一切の力が利用しつくされないが、 第二の場合には、さうされるのである。第一の方法は粗笨的農法と名づけられ、第二の方法は集約的農法と名づけられる。そのいづれの農法が實施されるべきかは、こゝには論ずるに及ばない。 たゞ、これは一に全經濟的事情の如何にかゝるところであるといふことを、述べるにとゞめよう。 粗笨的耕作が經濟上正當のときもあれば、また集約的耕作が正當のときも

ある。さて、土地の耕作にあたつて、收穫遞減の法則が支配してゐるといふことは、確言しうるところであるが、この法則の眼目は次の點に存する、すなはち、いま一定の地面を余が五〇單位の勞働と、一〇〇單位の資本とをもつて耕作して、二〇〇の收穫をあげる場合に、一〇〇單位の勞働と、二〇〇單位の資本とをもつては、余は四〇〇の收穫をあげえないで、かへつてそれよりも尠く、それゆゑ、恐らく三五〇、もしくば、三〇〇をあげるであらう。この法則は決して普遍的には妥當しはしない、だが、費用配劑の極致點をかなたに越えると、その妥當をみる。といふのは各の地區には、すなはち與へられた經濟事情の下にある各の經營には、比例上最も有利なる收穫を生じるところの、資本及び勞働の一つの使用法がある。土地一單位につき、資本及び勞働の使用が、この限界の以下、に留つてゐるならば、出費と收穫との比例はまだまだ不利である。その使用がこの限界を越えるときには、その比例は同樣にまた下る、しかも、それはもちろん土地單位についてゞはないが、しかし投下された勞働單位及び資本單位についいては確に下る。（從つて、土地耕作の方面において諸の發明がなされて、資本及び勞働の使用を增加すれば超、比、例、的の

收穫がえられると、かういふことゝなるかぎり、往々、この收穫遞減の法則は、これがために常に再び停止されることができる。そのときには、この法則は正にこの新な極致點から妥當するのである)

人口の増加に伴ひ、穀物の需要が膨脹して、そして穀物と工業生産品との交換比例が穀物の方に有利に變動するときには、集約的耕作に移ることが可能でもあれば、また、經濟的でもあるだらう。この集約的耕作はまづ最初には、最も豐饒なる土地を捉へるであらう、しかも、この最も豐饒なる土地のうちでも、また、消費地を最も近くに控へてゐる土地を捉へるであらう、そして、その耕作は漸時に、またさほど豐饒でもなく、また遠く離れてゐる土地にも波及するであらう。そのたびごとに、耕作集約度が高まるといふことは、一等お仕舞ひに穫られる穀物の勞働費用が高まり、そしてそのために、穀物對他の生産物の交換比例もまた變つて、穀物の方に有利に傾くといふことを意味してゐる。それで、いま一定の性質の土地の上に、耕作が集約的に行はれ、また、經濟上集約的に行はれうるときには、そして、この土地が、一般に耕作せられた最終の土地であると假定すれば、次のやうな事象が生じる。す

なはち、從來は穀物生産の最高費用は、例へば、一〇であつて、その穀物の價格はこの費用を償つてゐた。ところが、いま、耕作はますます集約的となる。新に附け加へられる分の、穀物量は、一二の費用を投ずるのでなければ、穫られなくなる。この一段と集約度を増してきた耕作が、永きに亙つて可能であるべきならば、穀價はこの費用をも償はなくてはならない。さて、價格が今や一二に高まるならば、この最も劣等なる土地もまた、最初にこの土地で作られた部分の穀物から、12－10＝2の地代を實現する、なぜなら價格は正しく總ての穀物に對して、今や一〇ではなく、一二であるだらうから。かやうにして、總ての土地が、その地質の良否、並に消費地への距離の遠近に基いて實現するところの、その地代は、一樣に、穀物一單位につき二だけの増加をみるであらう。かくて、われわれは三重の地代の源泉、すなはち、地質の良否、消費地からの距離の遠近、耕作集約度の三つをもつ、土地のなかには、これら三つの總ての原因から、地代を受取るものもあるであらう或は僅に、二つ若しくは一つの原因から、それを受取るものもあるであらう。だが恒に、全國土の穀物は、あたかもその穀物が最も劣等の、且つ最も遠隔の土地で、最終分の勞働及び資本の投

下量をもつて獲られたものであるかのやうに、價格の支拂をうけなければならないであらう。この最終分の穀物の費用、この「限界穀物」の費用が、穀物一般の價格を決定する、それだから、總ての場合を通じて地代は價格の結果である。

(e) リカアドーの地代學説より生じる二三の結論

上に述べて來たところからして、次に示めすやうな二三の結論が生じる。

1、地代は、つねに差額地代であるから、それは價格の歸結である。それゆゑに、土地、仕事量は、格別、價格において代償をうくるものでない。土地仕事量はこれを切り離すことができる。それは無償である。穀物を買ひ入れる消費者は、その交換をもつて單に土地に投下された資本及び勞働費用だけを支拂ふにとゞまる。たゞ、優良の土地が地代を産むのは、このやうな優良地が稀少であるといふことにのみ歸せられるべきである。けれども、地代は土地仕事量に對する價格ではない。從つて、穀物の價格は、勞働價値原則からして遺憾なく説明することをうるのである。土地には價格があるといふ事實から生じる困難は、從つて、除去せられたのである。

ある。

2、　歐洲諸國内において、土地といふ土地には悉く價格があるといふことからして、なんらかの駁論を導き出さうとしても、それはできない。しかもそれができない所以は、今日、土地といふ土地には既に勞働投下費用が含まれてゐる、それゆゑ、土地もまた「生産せられた生産手段」であるからである、　また、到るところ耕作の集約度が高くて收穫遞減の法則が行はれるに至つたからである。最も劣等なる土地でも、なほ收穫遞減の法則からして、地代を産み出すのであるから、この最も劣等なる土地にもまた、價格が實現されるわけである。（時としては、土地の價格もまた、他の、原因に基くことがある、　例へば、一區一區の土地にあつては勞働場所を確保することとの代價として存することがある。　だが、そのときには、これは穀物の價格とは一般になんらの關係もなく、また、全く他の領域に屬することである）

3、　してみると、土地の價格そのものは、資本財の價格と同様に決定せられる。永續的な收益の基礎としての土地は、永續的な收益の他のそれぞれの基礎の如く、かくて、資本の如く見做される。　從つて、一定の收益に際して、一定の地代に際して、

いかに地價が決定されるかの問題は、こゝではなく、資本財の價値論を講ずるにあたつて、取扱はれるべきである。かくてこれをもつて、地代の事實から生じると見えた諸の困難は、遺憾なく征服せられたのである。

六　第三の困難、勞働力の價格

(a)、發達せる交易經濟における「勞働」の性質

自由なる、發達せる交易經濟においては、すべての經濟財は商品であり、そして、その商品相互の交換比例は勞働價値原則からして説明されるべきであると、この前提からわれわれは再び出發しよう。さうすると、勞働力そのものはどうなるか。勞働力の生産に必要なる勞働時間とは、なにを意味するか。果してわれわれはそれをもつて研究をやつてゆけるであらうか。いつたい發達せる交易經濟において、資本家的交易經濟において、いかにして生産せられるか。

一つの重要なる事情、といふのは、生産手段が少數者の手に集中せられてをり、勞働してゐるものの全部が全部、生産手段を所持してゐるのではない、といふことは既に論じておいた。

さて進んで、企業家の生産手段のもとで營まれる勞働をみるに、これが本質的のことは、その勞働が自由なる勞働者からなされるといふことである。このことは經濟上、次のことを意味する、すなはち生産行程のために勞働者を全體として、生ける勞働力として、總括的に買ひ取るわけには、いはゞ奴隷經濟においてその實例をみるが如くには、ゆかないのであつて、かへつて勞働者は人格的には自由であり、そして自己の勞働給付をみづから處分し、交換財としてこれを他の交換財に對して賣り渡すのである。このことは、更に進んでゆけば、勞働者は等價原則の結果として彼の仕事量に利害關係を有つこととなり、從つて(それに該當する賃銀制度のもとにおいては)その仕事量を高めようとする傾向があると、かういふ歸結となるのである。この傾向は、奴隷勞働の制度内には存在しない。從つて、奴隷勞働は、單に奴隷を所有するのに資金を投じなければならないがゆゑばかりでなく、奴隷勞

働者の仕事は常に最小量にとゞめられ、そして强制手段でこれが增加を計つても、それは極めて狹い範圍で可能であるにすぎないがゆゑに、それは最も高價な勞働である。或はまた他の方面、すなはち、企業家の側から看るに、自由なる勞働の際には、より以上に高度に、より以上に無頓着に、仕事量を增加することが可能である。といふのは、勞苦が增された結果として勞働能力を喪失しても、企業家が新に他の勞働者を自分のもとに引き寄せうる地位にあるかぎりは、それは、彼にとつて些の經濟的損害をも齎すものではないからである。このやうに、自由なる勞働はみづから動的要素を包藏するものであるから、それとともに勞働者自身の利害もまた動的に作用する。もちろんそれに際しては、事情の如何によつては、仕事量が增加せられても、それは單に企業家の利益にしかならないかもしれないから、その限りにおいて、勞働者は自己欺瞞に囚はれてゐることがないともいはれない。だがそのときには、われわれは是非とも、素晴しい勞動仕事量の增加を、しかも、資本家的交易經濟以前の有史時代にあつては、未聞のことに屬してゐたほどの增加を、導き出すに至つた、世界史的な規模の幻想を考へてみる必要がある。實際、勞働が自由な

るもの」として、資本家的交易經濟において行はれてゐると考へるのは、全く幻想である。なんとなれば、こゝに自由といつても、それは單に、直接的の、絶對的の政治的拘束に比較すれば、存してゐるといふにすぎないから。然るに、その他の點においては、無産狀態といひ、生産手段からの隔離といひ、プロレタリア階級の創造といひ、悉く、勞働契約の締結に對する、すなはち、資本家的生産設備のもとで勞働――たゞこれのみが生存を可能ならしめるのである――を給付することに對する、絶對的の、免るべからざる强制を意味する。かくてわれわれは、資本家的交易經濟においては、なるほど、政治的强制組織とは關係するところがないのではあるが、經濟的强制組織とは關係するところが少くない。まことに、この經濟的强制組織は、その嚴重なることにおいて、その拘束力あることにおいて、農奴制度、もしくば、奴隷經濟に劣るところがなく、しかも、その機械的に作用することにおいてもまた同樣である。しかしながら、その拘束力が殆ど表面に現はれてゐないところから、また、勞働者の移轉の自由は、それ自身についてみれば、ともかくも存してゐるところから、また、勞働者は原則として一應は勞働を否認しうるところから、勞働者仲間の內

においてもまた、心理上の諸種の力は悉く羈絆を脱することゝなり、そしてこれが勞働仕事量の增加を可能ならしめたのであつた。（註一）

（註一）上掲八八頁參照

かくて勞働者は、私的契約に因つて生產手段の所有者から、生產手段のもとで勞働するやうにと定められる。それに對して勞働者は賃銀を、すなはち、貨幣形態で與へられた彼等の勞働給付の等價を受取る。勞働するものは、全く生產手段をみづから所持してゐないから、彼等が生きてゆかんがためには、絕えず勞働すべく餘儀なくされてゐる、從つて彼等は、その經濟的生存形式からみれば、純然たる勞働者である、賃銀に對する勞働者、賃勞働者、プロレタリアである。生產手段は、單に一部のものの手にしか存してゐないのであるから、資本家的生產においては常にプロレタリアがあるべき筈である。そして、絕えず人々をプロレタリア階級に陷らしめて止まないところのものは、實に經濟的循環である。生產手段の所有者は賃勞働者の勞働給付を自由に處分することができなければならない。彼はこれを組織立てる。常に生產手段については、特に、その處分力が集中してゐればゐる

ほど、ますます勞働力の組織が必要であり、またそれが存してゐる。從つて、生產手段の所有者は常に組織者である。この所有者が剩餘を獲得せんがために、生產手段を組織立てることを顧みて、われわれは彼を企業家と名づける。

資本家的勞働行程は、つねにまた、場所的に綜合せられて行はれなければならない。それは既に、勞働行程を生產手段について組織的に綜合せしめる條件をなしてゐる。これと共に、社會的勞働の組織は、勞働を諸種の活動、諸種の手工業などに分配する分業から、進んで、いはゞアダム・スミスが彼のピン製造の例において述べてゐるやうな、勞働分割の意味における分勞に移つてゆくのである。かの例にみるやうに生產を著しく促進させる勞働分割は、とりもなほさず、生產手段の一手に集中することに伴ふところである。なぜかといふに、生產手段が「民主主義的」に分配されてゐること(いはゞ一般的な手工業經營)は、工場手工業經營をすら排除するものであり、また家內、工、業、の形式——この形式のもとにあつては「資本」は直接に生產手段のまゝで存するのではなく、貨幣形態として存在する、そして個々の勞働者は自分の住居にをりながら商人の中央部から組織される——をも不可能な

も、信用制度が既に發達してゐるものとすれば、技術的にも組織的にもより高度の生産形式が可能であるにはあらうが、しかし、それはこの前提のもとにおいては、大財産の構成されない以前には期待されない。)

らしめるからである。(註一)(生産手段が「民主主義的」に分配せられてゐて

(註一)これらの經營形態については、ビュッヒァー著「國民經濟の成立」を參照せよ。

この種の生産は、すなはち、生産手段が少數のものの手に集中すること、勞働するひとびとを生産手段から切り離すこと、このひとびとの人格上の解放、並びに、彼等を辛うじて賃勞働によつてのみ生存することができ、これがなくては如何ともすることができないで、たゞに經濟的ばかりでなく、肉體的にも滅亡するほかないところの、純然たる勞働者たらしめること、これらのことは永い歴史的過程の結果である。この生産手段の集中、大衆と生産手段との分離、これがいかなる道程を經て生じたかは、玆には論じることができない。實際また、この經濟體系を理論的に取扱ふのには、それが權力の政治的方法(マルクスの謂ふ「原始的蓄積」)に因つて爲しとげられたか、もしくば、節約と經濟上の適者生存とに因つて爲しとげられたか、

それは問題でない。

この、生産手段の不平等なる分配が一度び定められるならば、みづから絶えず再生産してやまない一つの經濟體系が問題になることゝなる。この經濟體系においては三つの根本要素が最も本質的のものである、すなはち、それは資本、勞働、及び土地である。資本には資本財の所有者、すなはち、資本家が對應し、勞働には純然たる勞働者が、土地には地代を收める土地所有者が對應する。三つの生産要素に對應して、社會の三集團、三階級がある、そして、資本家的生産の經濟的分析は同時に資本家的生産の社會圖を與へる。

資本家的商品生産は、これらの經濟的及び社會的の諸根本形式において與へられてゐる。これをもつて、この資本家的生産の諸條件が與へられており、同時にまたその增大の諸條件が與へられてゐるのである。事實上、この生産形式においては、生産力の增大は途轍もない勢で行はれた。歷史上、より以前の時代においても素晴しい個々の事業(例へばピラミット建築、ローマの水道などのやうな)があるにはあるが、しかし、資本家的經濟體系の成立以後にみるやうな、絶えざる仕事量の

増大は、到底われわれの見聞しえないところである、だがこゝには上述の如く、われわれはこの經濟體系を所與のものと假定し、これが發展原因については所見を述べない。

(b)、資本家的交易經濟における勞働の價格(古典學說)

さて、問題といふのはかうである、總て生産に必要なる一切の要素は交換せられ、市場を見いだすと、これが交易經濟の原則であるが、この原則はいかにしてこの場合に實現せられるか、またそれはいかにして勞働及びその仕事にも妥當するか。かくてこの場合においては、各の商品がその內に含まれる勞働時間を標準として交換されるといふ勞働價値の原則は、勞働そのものもまた一つの商品であり、資本もまた諸商品から成り立つ、といふことによつて複雜化せられる。

市場交易においてわれわれの出會はす一切の貨幣額は、一切の交換比例は、いかにして勞働時間に還元しえられるか。それゆゑ、勞働力の價格としての賃銀は、いかにして價値法則の上に打ち建てえられるか。

古典派經濟學は、この困難にして且つ重大なる問題を、賃銀は勞働の取得する價格であると述べて、比較的簡單に解決した。この價格と他の諸商品の價格との間には直接の關係がない。なんとなれば、勞働は他の諸生産物の如き、生産物ではないからである。が、それにもかゝはらず、われわれは、賃銀が幾何の大いさであらうかに就いては、これを述べることができる。すなはち、ほかでもない賃銀は自然的に定まるのである。いふまでもなく勞働者が生きてゆかねばならぬことは、明白である。それで、彼は結局のところ賃銀については、これで彼が生きてゆけるだけのものを、貰はなければならない。たゞに彼自身ばかりでなく、彼の家族もまたその勞働で生きてゆけなければならない。といふのは、もし彼がさうすることをえないならば、彼は彼の子孫を維持しえないことゝなり、そうしてその結果、生産は長きに亘つては不可能となるであらう。だから、賃銀は少なくとも、生存最小限度には達すべきものである。さて、賃銀が必要なる生活資料の價格よりも、より大であるならば、勞働者の數もまた殖えるであらう。だから、賃銀は必要なる生活資料以上には上ることをえない。なぜなら、勞働者人口の増加は、從つてまた、勞働を求

める人々の增加は、再び賃銀を引き下げるから。同様にまた、賃銀は生活資料以下にも下ることをえない。なぜなら、そのときには、自由に使へる勞働者であつて、市出でをするものの數が減少し、かくして、勞働者に對する企業家の競爭は再び賃銀を高めるからである。(註一) このやうに賃銀は、それゆゑ、必要なる生活資料に應じて決定せられるのである。けれども、この思想が經濟的理論的のものでないことは、明かである。この見解によれば、勞働の價格を決定するものは、決して純經濟的法則ではない、ではなくして、こゝに應急の橋渡しとして用ひられるのは一つの自然法則である。だから、賃銀の大いさ如何の問題は、生活資料の價格如何によつて定められる。例へば、生活資料の價格が、それを生産する骨折の如何に應じて動搖するものと假定すれば、もしくば、少なくともそれが變化するものと假定すれば、勞働者の賃銀もまた變化しなければならないだらう。假に、その國の人口が增加し、そしてその結果、生産がさほど豐饒でない土地に移つてゆかざるをえないといふ場合を採つてみよう。このことは、より多くの勞働時間をその生産に必要とするところの穀物が消費されるとの事實と同意義である。その結果として、他の

商品で表はされたる、穀物の價格は上騰するであらう。穀物の價格が上騰すれば勞働の價格もまた上騰しなければならない。勞働者はそれからなんらの利益をも享けるものではない、なぜかといへば、元來、彼はその賃銀をもつて再び穀物等を買はねばならない、然るに、その價格はより高くなつてしまつたのであるから、彼は彼の勞働に對して同一の對價を受取るにすぎないのである。だがしかし、その勞働では、今やより多くの勞働時間をその生産に要するところの勞働生産物が買へるのだから、勞働の價値は高まつたのである。このやうに、勞働の價値は、勞働の裡に在るなんらかの決定理由によつて與へられてはゐない。それは經濟的に定まつてゐはしないで、むしろ、それは自然事實によつて、すなはち、生活資料の數量によつて定められてゐる、そしてこれを勞働時間で言ひあらはすと、勞働の價値が示される。それは確定的の大いさである、が、價値法則によつて與へられてゐるのではない、なんとなれば、勞働は「生產」せられないから。しかしさうかといつて、この價値法則と矛盾するものではない——それは計算のうちに取り入れられるべき一つの所與事實である。企業家もまたこの所與事實を既定のものとして

計算を立てねばならない。それは生産物の價格には影響しない、それは絶對的の大いさであつて、長きに亘つてみれば、これにはなんらの變化も起りえないのであるが、しかしそれみづからは、行程の他の總ての所與事實を決定するところのものである。

（註一）勞働力は一つの商品であつて、その供給は價格のより高いときには增加し、價格の余り低いときには、制限せられる、そしてまたその生産は「中止」せられるものであると。だから、勞働力は謂はゞ「生産」せられるものであるとするひとが少なくない、そして彼等は、さういつた見解を人間にあるまじきことゝ考へる。それは誤解である。古典派經濟學において開陳せられた思想は、單に事實を確立し、これを說明しようとするのにすぎない。だから、それはかくあるべきものだと、主張するのではない、ではなくて單に、それはかくかくのものであり、そして、與へられた事情の下においては、これ以外のものでありえないと、主張するにすぎない。この見解の根底に橫つてゐるものはまた、夢想的觀照ではなくて、むしろ現實的觀照である。なんとなれば、アダム・スミス及びリカアドーの時代には、事實上、ことのほか子澤山なことは、プロレタリア階級の目だつた特徵であるから。そして、恙なく育つた兒童の數の多少は、また、食物上の餘裕、收穫の結果の如何に懸つてゐるから。實物賃銀の高いときには、人口を增加する傾向があつた、賃銀が生活最小限度以下に低落するときには、きつと、人口を減少せしめた。初期資本主義の時代においては、賃銀は完全に生活最小限

度を中心に變動したことは、よしんばこの概念の歷史的變遷から生じる一切の制限を加へようとも、疑もなく正當である。

生產行程を指揮し、これを遂行する企業家は、それゆゑ、次のやうな諸種の大いさを計上しなくてはならない、すなはち、彼は資本財(諸機械、諸原料等)を調達し、これに對して、これら諸商品の勞働費用に該當する對價を與へなければならない、――彼は勞働力を雇入れ、これに對して、生活資料の價格に應じて、賃銀を支拂はなければならない。さうして、彼は生產物を、そのなかに含まれてゐる勞働費用に應じて賣却する。そこで、彼の投じる勞働費用が、彼の實現する價格よりも、より尠いといふことがありうる。それは、勞働者の生活手段等を生產するのに要する勞働時間が、勞働者が生產行程そのものにおいて費やす勞働時間よりも、より尠いときに、つねに事實となるであらう。すなはち、さういふときには、生產行程に投げ入れられねばならなかつたよりも、より大きい價値が、この行程から生じるであらう。剩餘が生じるであらう。しかしながら、この剩餘は、いまや明瞭なるごとく、絕えず經濟的循環から必然に生じるところの、特別の事情に負ふものではない。企業家の

特殊な仕事に對する報酬ではない。といふのは、それは、生産物に含まれてゐる勞働時間の方が、生産に直接間接參與せる總ての勞働者の生活資料を生産するに要した勞働時間よりも、より大きいときにしか存しない。しかし、かゝる剩餘の生じないこともまたもちろん可能である。だから、剩餘が獲られるか否かは、一方においては生活資料に（すなはち「必要なる」生活資料には何が屬するか、また幾何のものが屬するかといふことに）、他方においては、これらのものを生産するに要する勞働時間に、依存する。剩餘は殘餘量である、それで生活資料の價格次第では、ちようど零ともなりうる。それは決して生産の必然的な要素ではない、よしそれが無くなるときには企業家は生産についての興味を失ふではあらうが。

こゝに試みられた説明には、二つの缺陷が見いだされる。(1)この説明の試みは經濟的でない。賃銀はこゝでは所與事實として採り入れられてゐて、そしてそのために、この、本來經濟的な事象の經濟的説明が放棄されてゐる。(2)賃銀の大いさが生活資料によつて現實に決定せられてゐると考へるのは正しくない。なぜかといふに、生活資料は歴史的發展において變化するものであり、そして、何が生存に

必要であるかの問題は確定をゆるさないから。だから、この見地が當然に與へるべき筈の自然科學的決定性は、それをもつては達せられるべくもない。

(c) この方面より觀たる經濟的及び社會的全景

かくて、われわれが資本家的商品生産の圖象を全體として觀察するならば、次の光景が生じる、すなはち商品はそれに含まれてゐる勞働時間が、他の商品に含まれてゐる同じだけの勞働時間と互に交換せられるといふふうに、賣られるのである。かういふふうに企業家はその商品を金に換へるのであるから、彼は剩餘を取得することができる、もし土地における勞働の生産力がそれをゆるすならば、それゆゑ、一家族の生活資料を生産するのにこの家族の全勞働時間を要しないならば、(ここに「生活資料」といふのは、單に農産物ばかりでなく、工業生産物も含めて解せられるべきである)。だから商品の價格において、企業家は彼の出費の一切を回收して、翌年に再び生産を始めるうるばかりでなく、なほまた剩餘を收めて生産の擴張を企てうるのである。さらに、農業者も勞働者と資本とをもつて働くかぎり

は、彼もまた「企業家」であつて、上述の諸條件の下に營まれる生産において生じるところの剩餘を取得するものである。然るに、彼は既に前もつて、土地の耕作の進展するにつれて、地質の優良なること、位置の有利なること、乃至はその國における耕作集約度の增進することに基いて生じる地代を、農産物の價格のうちにおいて受け取つてゐたのである。それで、農業者もまた、資本家、企業家としては、その收穫物からして彼の生産を絶えず續行することができるのである。また、彼は、單なる地主としては、利子依食者としては、この地代を消費することをうる、すなはちその收益を消費財と交換することをうる、しかも、地代は特殊な生産手段の磨損、もしくば、費消から發生するのではないんだから、彼の生産に些の危害をも及ぼすところがない。最後に勞働者も、もちろん同樣に(全體として、階級として、「全勞働者」として、だが個人個人の勞働者としてゞはない)絶えず生産において勞働者として働くことができねばならない。なぜなら、勞働者がなくては生産は不可能であるから。このやうに、商品相互の交換比例の決定理由は、同時に、生産の結果をその生産にあたつて活動する三つの生産要素(それは三つの社會的階級と合致する)に分配する

にあたつての決定的なる合法性を、みづから含んでゐるのである。生産とその分配との解剖は、同時に社會の全景を與へる。なんとなれば、生産はみづから分配の法則を含んでおり、そして、かくて生じた生産結果の分配は分配でまた、新な生産の序曲であり、新な生産期に對して決定的であるからである。かくして、生産の年輪は他の年輪と互に結びあひ、各の生産行程は一つの分配行程を生む、その生産行程みづからが同様に一つの分配行程から出てきたやうに。

最後に、補遺のためなほ一言を加へたい。われわれの既に述べたやうに、資本家＝企業家の獲得しうる剰餘の大いさは、賃銀の大いさ如何によるものである。なぜならば、一生産物の價格は、單にそれを作りだすに必要なる勞働時間に依存するから。それでこの勞働時間が變化しなければ、その生産物の價値、すなはち他の生産物に對する交換比例もまた不變のまゝである。ところで今、人口の増加の結果として、さほど豐饒でない土地にも手をのばしたり、耕作を集約的に高めたりなどする必要が生じてくると、生活資料の價格は騰貴するであらう。それとともに賃銀も騰貴するであらう。これに反して、工業生産物は、その生産になんらの變化も

起らなかつたから、價格の騰貴をみないであらう。かくて、賃銀の騰貴する結果として、利潤は低落するであらう。そして、人口がますます增加してやまず、穀價がますます高くならざるをえないときには、愈もつてますます利潤は低落しなければならないであらう。それは引いて、國民經濟の悲觀すべき局面に導く、すなはち工業上の諸力は漸時に枯渇し果て、すべての自由所得は悉く地代へと移りかはることゝなる。なぜかといへば、かつて自由な剩餘、利潤、資本利潤であつたものは、いまや地代と化し、工業的生産みづからはそれから潤ほされることがなくなるからである。(註一)

(註一) この場合、かゝる局面を描いてゐるリカアドーは、地代もまたその取得者から消費しつくされるわけのものではなく、かへつて——しかも工業において——蓄積せられうるといふことを看過してゐる。だから、工業における生産力の發展は、土地での生産が累進的にますます多くの勞働力を要求するときには、緩漫にはなるであらうが、枯死するほどのことはない。(利得の漸時に低落することが資本の工業への放下を妨ぐるものであるか、もしくば反對にそれを促進するものであるかは、斯學において未だその決定をみざる論爭に屬する。)

(d) 勞働賃銀論の經濟的試み(マルクス)——

經濟的生産と消費とのこの全圖象には、なほ闡明することを要する一つの點がある。賃銀が自然法則によつて定められるならば、それは價格の現象のなかには組み込まれてゐない。賃銀は勞働の價格として説明されてゐなければならない。でなければ、われわれは總經濟行程の統一的説明をもたないのである。マルクスはかうした説明を試みた、そしてこれによつてはじめて勞働價値原則は眞に鞏固なものとなつた。

賃銀を説明するために、われわれは勞働市場から出發しよう。勞働市場において企業家は、すなはち生産手段の所有者は勞働者をみつける。さて、企業家は勞働者から（そしてこれはマルクスにおいて拓かれたこの思想の新生面であるが）勞働力を謂はゞ十把一束に買ひとる。だから彼は個々の勞働時間を買ふのでもなければ、個々の勞働給付を買ふのでもない。でなくて彼は勞働力の自由處分を買ひとる。そしてそれから、この自由處分によつて彼は勞働給付を手にすることをう

るのであるが、その勞働給付の大いさは、勞働日の通常の長さの如何により、勞働者の熟練の如何等によつて、種々に異る。

勞働者は彼の勞働力を商品として市場で賣りに出さなければならない。彼は單に商品賣却者として生存することをうるにすぎない、ちようど企業家が單に商品賣却者としてのみ生存することができるのと同樣に。商品賣却者としては勞働者もまた價値法則に支配される。すなはち、彼はその賣却から對價として僅に、彼の勞働力の生產に必要なる勞働時間を實現しうるにすぎない。勞働力は生活資料(これには、勞働者階級の養育に必要な生活資料も亦、ともに含まれてゐる)を消費することによつて生產せられる。それだから從つて、この生產に必要なる勞働時間が、商品としての勞働力の價値を決定するのである。かくて、この價格は自然法則から生じるのではない、ではなくて、それはこの高さにおいて、ただ商品生產者の社會においてのみ、すなはち、勞働力もまた一つの商品となる社會においてのみ定められる、それもこの價格がこの限界を越へて高まるときには、その供給が增し、その價格がその限界以下にとゞまつてゐるときには、供給が減ずるといふ

ふうに。

勞働者は商品として彼の勞働力を一切れ幾らで賣るのであるから、彼はそれの自由處分を企業家に與へる。企業家は今や社會的勞働日の限界内において、それを使用することができる。だが企業家はこれをもつて、ある特別な性質の商品を手に入れたのである。他の生産手段はいづれも、その價値をもつて生産物に移つてゆくものである。例へば、鐵五キログラムの生産に一時間の勞働を要したならば、この時間の勞働は、鐵の價値構成部分として、鋼鐵にそしてこれから鋤に、移つてゆくであらう。これに反して、企業家は勞働力を手に入れることにより、一つの特別な商品を手に入れるのである。その商品は、これが生産勞働によつて與へられるといつた、客觀的な價値をば全くもたないのであつて、その價値は一に、企業家がその勞働力を生産においてどれほどまでに長く使用することができるかに、依存するだらう。賃銀が六勞働時間の等價値を意味し、さうして勞働者が五時間しか勞働しなければ、企業家はまたその勞働仕事の對價としては、僅に五勞働時間の等價値しか、商品の價格において實現しえないのである、だから損失を蒙るであら

う。たゞ勞働者が六時間よりもつと長く勞働するときにのみ、彼の賃銀より以上に大なる價値が再生產せらるであらう。勞働力は、それゆゑ、特殊な種類の商品である、すなはち、勞働力を買ふことをにより、企業家は實は一つの見込を、可能的の價値を、蓋然的の價値を、買ふのにほかならない。彼は、未だ鐵における如く、實體となつた價値を買ふのではなく、これからまづ創造されねばならない價値を買ふのである。そしてそうだから、このまづ創造されるべき價値が勞働力自身の價値よりもより大である、といふ可能性も亦そこにあるわけである、――そしてこれによつて、同時に利子の謎は解かれたのである。

しかしながら、勞働の性質は單に一つとかぎつたものではなく、幾つかの種類の勞働がある。從つて勞働力の等價値は同一でない。教育の費用とか、生活資料とかは、未熟な下端の職人にとり、或は電氣技手もしくは技師にとつて、同一ではない。これらの連中の各のものは、自己の勞働力に對する報酬として、その生產及び再生產に「必要なる」勞働時間の等價値を、價値法則に從つて、要求することができる、そして、長きに亘つてみればまた、それを受取ることゝなるべき筈である。これがた

めに、諸の賃銀は互にひどく異なつてゐるにはゐるが、しかし、勞働力といふ商品の價格を表はしてゐるといふ共通點は、いづれもみなこれをもつてゐる。かくて、熟練勞働は價値理論上、幾倍かの單純勞働として表はされる、そして、このことは、賃銀にも、また給付によつて創造される價値にも、現はれてゐるところである。

發達せる交易經濟においては、企業家から生産せられるのは、たゞ、彼が「上揭の意味に解せられた」「必要なる」勞働時間以上に亙つて勞働者を使ふことができるときにかぎられる。たゞそのときにのみ、勞働者は「餘剩價値」を創造する。だから、これが存在とこれが大いさとは、社會的勞働日の如何にかゝるものである、がしかしまた、勞働者を養ふためになほ必要とされる最終の農業生産において、勞働の生産力がどれほど大きいかといふ事情にも、かゝつてゐるのである。かくて、勞働の物的生産力は一つの所與事實であつて、それの程度如何によつて、餘剩價値の存否（從つて資本家的生産一般の存否）及びそのが大いさが、左右されるのである。

かくてわれわれは、この事情を、勞働者の勞働時間の一部は不拂ひの勞働である、といふやうにも說くことができよう。もつとも、かういへば本當はマルクス的構

想の立場からは、全く正確だとはいはれない、といふのは、勞働者から賣られるのは、實は、勞働時間ではなく、勞働力であるから。この「不拂ひの勞働」が「必要なる」勞働に對する比例を、マルクスは餘剩價値率と名づける。全社會のうちには、いづれの企業にも、この餘剩價値率に基いて、餘剩價値がつくり出される、そして、これがすなはち――地代は別として――生產手段の所有者、企業家によつて自由に處分される價値である。

それゆゑ、社會において爲された勞働の總量から、生活資料の生產に必要なだけの勞働時間を減じると、その社會において全體として獲得された餘剩價値量が生じる。實體で言ひ表はせば、勞働者に分與せられる生產物だけを差し引いた社會の總生產物が、餘剩價値量である。この餘剩價値量は、資本家等からその餘剩價値が消費せられないかぎり、前もつて既に生手產段の形體でつくり出され、そして、國民經濟の資本蓄積を表はしてゐるのである。

(c) 企業家の社會的職能

生産の最も本質的な三つの要素は、それゆゑ資本と勞働と土地とである。これらの要素は合して、いづれの生産期においても絶えずその次の生産期の諸條件が既につくり出されるといふふうに、はたらくのである。われわれは、生産者の間に分業が行はれてゐるのをみるのであるが、しかし、この分業は今や、單純なる交易經濟におけるとは、その趣を異にした働きをする。われわれの既に論じたやうに、單純なる交易經濟において勞働價値の法則が維持せられるのは、いづれの生産者もが彼の勞働に對して等價値を受けとらうとする自明的な關心によつてゞある、そして、なんぴとも、このやうな等價値を彼に提供することができないやうな生産は、これを措いて顧みない傾向をもつてゐる。それで、價値法則は直接に生産物相互の交換比例について證明せられる。さうして、需要供給の運動は、われわれがこの運動のなかに、彼の勞働に對してなるだけ多くのものを受け取らうとする努力を、讀みこむことによつて、始めてその意味をうるのである。ところが、發達せる資本家的交易經濟においては、事情は異る。こゝにあつて、生産の方向と種類とについて決定を與へるものは、勞働者ではない。勞働者は――勞働の難易、快不快の相

違をしばらく措いて考ふれば――どこにおいても彼の働きに對しては常に同一の賃銀を受けとるのである。彼は生産の方向については、なんの興味ももたない。また土地所有者も、生産に對して、個々の生産部門への勞働の分配に對して、なんらの影響をも及ぼしえない。彼は、地代徵收者として、市場價格に依存してゐるものであつて、この價格そのものに影響を與へることは、いかにしても彼のなしえないところである。すなはち、市場價格が彼の費用以上に騰るならば、彼は地代を收得し、市場價格がそれ以下に降るならば、彼は生産を斷念しなければならない。農業的生産は全然相關的の大いさのものであつて、しかも人口の大いさ及びその他の生産部門に(資本の運用者としての、土地での生産者が「企業家」でないかぎり)依存してゐる。これに反して、價値原則が、最も鋭敏に感得されるのは、その企業、企業家に及ぼす作用によつてゞある。企業家は、つくり出された生産物が、それにかゝつただけの勞働時間と交換せられえないときには、すぐさまそれを感じる。すなはちこのやうなときには、對價が、所得における貨幣收益が、他の企業に從事するほどに多くない。それでその結果として、剩餘が他より尠いのである。各の企業家は生産

して最も多くの剩餘をあげようと考へてゐるのであるから、この生産は制限せられるだらう、もしくば、いづれにしても増加せられないだらう　然るに他の生産は増大する、そこで、その交換比例は再び價値の大いさにまで高められるであらう。反對に、この交換比例がある生産物にとつて有利であれば、資本の流入が起るであらう、それでこれがために、剩餘は「平均的な」もの、「正常的な」ものにまで低落するであらう。けれども最上の分業の傷けられることを感じるものは企業家である。彼は最大の剩餘に對するその努力を以つて、勞働の社會的分配計畫に代へねばならない。かくて、徹頭徹尾、彼の利己的な私の利益を營みつゝ、彼は一つの重要な社會的職能を果すのである。このやうにして、こゝに經濟の自動制はこの方面からしても亦、與へられてゐるのである。

七　第四の困難、利潤率の平準

(a) 餘剩價値量と利潤との矛盾

勞働價値原則に對しては、實際のところ、一つの大きな困難が生じる。それにはこれまで觸れなかつたのであるが、しかし、今やわれわれはいつまでも長くその困難を見のがしてはゆけない。資本家的交易經濟においては、生產は資本家的企業において行はれる。これは、剩餘の獲得を目的とする生產手段と勞働力との諸の組織である。剩餘が、勞働價値原則により、マルクスの意味において、社會的勞働時間と生活資料の生產に必要なる勞働時間との差であるなら、いづれの企業における剩餘も、その企業に雇はれた勞働者の數の如何に依存すべきはずのものであるだらう。けれども、それは明に事實ではない。こゝにわれわれはまたもや、理論の根本思想と調和しない事實の前に立つ。誰れでもが知つてゐる通り、ある企業において働いてゐる勞働者の數と、その企業においてあげられる剩餘との間には、なんらの關係も存してはゐない。もし、かういふことが本當に存してゐるものとすれば、それはたゞ、企業家から勘定に入れられるべきものが、單に勞働給付に對

する費用、それゆゑ、賃銀ばかりであるといつたやうな場合にかぎられるであらう。しかしながら、彼は總ての他の經費をも同様に使はなければならないから、それゆゑ、これらの經費は生産行程において再現しなければならないから、投下せられねばならない、すなはち、放資せられねばならない全資本財産は不可分の全體である。これが、費用であつて、企業家はこの全體としての費用と剩餘とを關係せしめる。彼にとつて最も有利である企業といふのは、そこで獲られる餘剩が、總體の經費に比較して、最大のものである。

(b) 利潤率の平準

しかしながら、經濟行爲のこの方向は、既にわれわれに、その困難から脱するの道を示してゐる。すなはち、最も利益の多い生産についての競爭の働きで、諸の剩餘は、資本について勘定すると、互に平準することゝなるのである。社會の生産において實現せられるところの、價値の總剩餘は、個々の企業に、これにおいて投下せられた資本を標準として、分配せられる。これがために、個々の商品相互の交換にお

ける關係は、明に變動をみるのであるが、しかし、それは、この變動の程度が理論的に確立せられることができるといふほどのものである。このことは、一つの數字の例から、最もよく明瞭となるであらう。

われわれは國民經濟における個々の生産種類を代表的のものと假定し、そしてこれらの生産においては「諸の資本財」と賃銀割宛部分との比例は確定してゐるとしよう。こゝに「諸の資本財」といふのは、ほゞ三〇年で磨損してしまふ建物や、ほゞ一〇年で磨損してしまふ諸機械や、また生産において全部使ひつくされてしまふ原料や石炭をも、意味してゐる。すべてこれらの資本財をわれわれはc＝不變資本と名づけよう。(既にリカアドーも、固定資本と流動資本とを區別したのであるが、その場合、彼が固定資本といふのは、建物や諸機械を意味し、流動資本といふのは、原料や石炭のほかに、なほ勞働賃銀をも意味してゐた。こゝで採用しておいた、マルクスによつて代表される見解は、理論的に役だつことがより多いといふ利益がある。）これに反して、われわれは、賃銀とか給料などに對する支出額をv、または可

變資本と名づけよう。 c と v との割合（c/v）を、われわれは有機的構成と名づける
そして、これは生産種類の異なるにつれてまた異なるものである。 例へば、建築業においては、c は v に比して小であるが、紡績業においては、c は v に比して大である。 生産の速度が急速であればあるほど、加工せられる原料が高價であればあるほど、機械装置が大規模であればあるほど、維持費とか燃料費などが多ければ多いほど、 それだけ賃銀に對する支拂額、v は後退する。

われわれは、國民經濟の全生産の構成を次のやうに考へることができる。 一〇の生産部門があり、それらの有機的構成は次のやうな圖式であらはされるものとする。

100c＋ 10v
90c＋ 20v
80c＋ 30v
⋮
10c＋100v

更に、われわれは假にいづれの種類の生産も同様にすつかり塞つてゐるものと

しよう。最後に簡單のために、c は總て、生産期の經過とともに生産のなかに移つてゆくものと前提する。かういつたことは、もちろん、現實と一致しはしない、だが、便宜のために、われわれの行つて差しつかへのない一つの樣式化である。さて個々の生産部類において、いかなる價値がつくり出されるかを知らんがためにはなほ、上に分析した意味で(一)「必要なる勞働時間」と社會的勞働日との差を知るの要がある。この差をわれわれは m(マルクスにおける餘剩價値)と名づけよう。この差は、個々の勞働者について計算すると、同じ大いさであるだらう。從つて國民經濟内の全體の生産に對しては、勞働者の數を乘ずることによつて、計上することができる。この大いさは、社會生産物のうち、勞働者の生活資料と、消耗した生産財の再生産に使はれる生差物とを控除して、なほ殘存するところの部分に、該當する。だから、それは計上することと、名稱を附することとによつて捕捉しえられる一つの大いさである。ところで、この、全體で生産の剩餘を表はし、そして勞働市場の機構から生じるところの價値量は、總ての企業に分配せられる、しかも、競爭の働きの結果、この價値剩餘は、一緒になつて働いてゐる全體の資本について、等しなみに

分配せられ、それが不變資本であるか、可變資本であるかをも問はなければ、また、當該生産期において不變資本のどの部分が消耗せられたかをも問はない。　かういふことになるのは、競爭の働きである。　なぜがといふに、そのときどきに(全資本について計算して)平均以下の剩餘しか獲られない生産部門は、もしあれば棄てられるであらうし、また、平均以上の剩餘が獲られる生産部門は、競つて求められるであらうから。　從つて、「高度の有機的構成」(この場合にはcがvに對して優つてゐる)を伴ふ商品の交換比例は、「低度の有機的構成」(だからcに對してより高いv)において生産される商品の方の犧牲で、價値法則に該當する交換比例よりも、より有利な形をとるであらう。　こゝにおいて明に見ることができるやうに、一方の商品にとつて交換比例を良からしめることは、その他の諸商品の交換比例を惡からしめるのと、同じことであり、そして反對の場合には反對のことゝなる。　なぜなら、實際、交換比例を良くするといふことは、その商品がより高くなることを意味しており、このことは他の總ての商品が、先の商品で測つてみれば、より安くなるといふのと同じ謂である。　だから、そこに起る變動は、經濟的に互に固く聯關しており、これが程度

は競爭の働きと、同額の資本使用のもとには同額の剩餘を生むといふ見地とによつて、一義的に定められる。このことを、われわれは次の圖式について明瞭ならしめることをうる。さうするにあたつて、「必要なる勞働時間」は社會的勞働日の半數に上るものと假定しよう。

$$\left.\begin{array}{rrrr}
100\,c+ & 10\,v+ & 10\,m= & 120 \\
90\,c+ & 20\,v+ & 20\,m= & 130 \\
80\,c+ & 30\,v+ & 30\,m= & 140 \\
70\,c+ & 40\,v+ & 40\,m= & 150 \\
60\,c+ & 50\,v+ & 50\,m= & 160 \\
50\,c+ & 60\,v+ & 60\,m= & 170 \\
40\,c+ & 70\,v+ & 70\,m= & 180 \\
30\,c+ & 80\,v+ & 80\,m= & 190 \\
20\,c+ & 90\,v+ & 90\,m= & 200 \\
10\,c+ & 100\,v+ & 100\,m= & 210 \\
\hline
550\,c+ & 550\,v+ & 550\,m= & 1650
\end{array}\right\}\ 110(c+v)+55\,m=165$$

これによれば、この生產期の總價値量は一六五〇の額に上る、そのなかで、五五〇mは使用せられた總資本の五〇パーセントに當る。いま各の生產において剩餘が使用された資本に對して、同じ比例に立つべきであるなら、いづれの部門においても個々の生產物の交換比例の代りに(生產物の諸の價格の代りに)一六五〇をうる。それゆゑ、この前提の下においては、いづれの部門の生產額も他のいづれの部門の總生產物と交換せられるであらう。なぜなら、運用された資本はすべての部門を通じて同であり、そして運用された資本はすべて必ず生產物のなかに入りこむからである。もちろんかゝる單純な關係は現實には存しない、けれども、簡單なる運算を行へは、各の項目において所要の結果に到達する。

さて、われわれはこゝにマルクスによつて造りあげられた用語例に從つて、價値と生產價格との別を立てよう。こゝに價値といふのは、生產された商品のなかにはいりこんでゆくc及びv、並びにその際個々的に用ひられた不拂ひの勞働mとから成り立つところの大いさである。生產價格といふのは、總て生產のなかに入つてゆく事實上の費用(だからそれはやはり入り込んでゆくcとvとである)に、社會

的生產において獲られた餘剩價値量の一部分だけを加へたものである。しかも餘剩價値量のなかから、ある企業の總生産物に割當てられるのは、その企業において働いてゐる資本が社會的總資本に對して有する持分に該當するだけのものである。例へば、一般に働いてゐる社會的總資本が――一〇〇億あるとし、その社會で獲られた剩餘が五億であるとすると(總て價値量である)、この二つの大いさの比例は、五對一〇〇、すなはち五パーセントである。この大いさをわれわれは社會的利潤率と名づける。ある企業において一〇〇萬の資本が働いてゐるものとし、そのなかで不變資本の一〇萬と賃銀の一〇萬とが生産のなかに入つてゆくものとする。だから二〇萬のものが消耗せられ、そしてそれが生産物において再現しなくてはならない。これになほ使用せられた總資本の五パーセント、すなはち五萬のものが加はる。從つて、この企業の總生産物の價格は二五萬である。この價格をわれわれは、價値に對して、生産價格と名づけるのである。(この場合の價値は、われわれの例についていふと、五億の社會的賃銀額が支拂はれたといふ前提、だから賃銀額と餘剩價値とが一對一の割合であるといふ前提の下においては、三〇萬に

等しい。それでこの生產物はその價値以下で賣られるのである、これはまさにこの生產物と交換される對價物が、これに相應して、その價値以上に賣られるといふことと、同じ意味である。)

(c) ボェーム・バーウェルクの批評の排擊

このやうに交換比例が價値から乖離することは價値原則を放棄するものであらうかどうか、これに關する見解は非常に區々である。例へば、それをもつて價値原則は放棄せられたのであると、かういふことを立證しようとするのが、ボェーム・バーウェルクの批評の主旨である。彼はいふ、もしこんなことをいふなら、同様にまた、商品相互の交換比例は重量によつて測られるのだと、主張することもできよう。なぜなら、一方の商品がその重量に該當するよりも、より高く賣られることは、そのことのために他方の商品がより安く賣られるからである。それで商品の總額は、まさしくその重量として賣られもすれば、また全く同様に、その容積、もしくば、その容量として賣られもする。商品の總額は、實際、ひとの取扱ひうべき經濟的

の量ではなからうと。

このことは、いふまでもなく勞働價値學說のいふところが、單に、商品は或は價値以上に或は價値以下に賣られるといふにとゞまつて、この乖離のより正確なる度合を說明するところがないとすれば、正しいでもあらう。けれども、これが乖離の度合は、企業における資本の有機的構成によつて精密に與へられてゐるのである。價値以上に、もしくば價値以下に賣るときには、そこにはある偏差が、すなはち、ある屈折が存してゐるにはゐるが、この偏差屈折の度合は理論的に決定しうべきものである。それで、從つてこの生產價格の方式は一つの解答である、それはボェーム・バーウェルクの言ふやうな、見かけばかりの解答ではありはしない。

八　勞働價値學說の限界

勞働價値原則は、それゆゑ、素晴しく大きい勤めをわれわれにしてくれた。それは、國民經濟の生產が、しかも、人格上自由なる人々から成れる分業的國民經濟の生

産が、生産手段の不平等な分配狀態をもつて、いかにして可能であるかを、しかも永續的のものとして可能であるかを、また商品相互の交換比例が、いかにして形成せられるかを、また社會生產物が、いかにして社會の個々の階級に分配せられるかを、われわれに明にしてくれた。このやうにわれわれは、以上のほかになほ、この理論が經濟の世界を、理解できる圖象として示めしてくれるものであつて、その業績の極めて大きなことを認めつゝも、しかもまたわれわれは、その理論の妥當する限界を意識しなくてはならない。

(a) 生產價格と「社會的欲望」

勞働價値理論のもとにおいては、勞働の分配が「社會的欲望」に適合してゐるといふことは前提されてゐる。生產が社會的欲望に適合するといふことは、總體の生產が生產價格で賣り捌かれて、その結果、生產者たちはその生產によつて、彼等から投下せられた費用に社會的平均利潤率だけを加へたものを受けとるといふやうな市場狀態が存してゐることからみて、明かである。けれども、いかなる前提

のもとに、この市場狀況が存してゐるかは、さらに進んで研究されない。それで經濟的利益の法則の作用する結果として、生産はある量關係において行はれ、また永續的に行はれうることゝなるにはなるが、しかし、何がこの量關係を決定するか、どの點まで所得の分配、所有關係、結局はまた人間の欲望形態がこの量關係に影響を及ぼすか、これらのことはどこまでも曖昧のまゝである、もしくば所與の事實として、更に進んで研究されない。總てこれらのことの代りに、勞働價値論者は「社會的欲望」といふことを言ひ、そしてこれをもつて、生産と市場狀況との間には、ある一致が存してゐて、それも商品相互の交換比例は現に生産價格に從つて定まるといふ具合にであると考へる。もし、それがかういふ具合になつてゐなければ、總ての企業が最大利潤へと努力することによつて、この比例は立て直される。從つて社會的欲望といふことには、勞働價値學說の側からは、なんらの特別な注意は拂はれない。このやうに等閑視することが正當の理由あるものかどうかは、限界效用學說を說述する際に、はじめて明になるであらう。

(b)　獨占價格

勞働價値學說は、更に進んで、實際自由競爭が全般的に支配してゐるといふ前提のもとにおいて、妥當するにすぎない。自由競爭の行はれるところには、利益の活動は阻害せられないで存してゐる。自由競爭のもとでこそはじめて、商品の交換比例における、生產價格以上の、もしくばそれ以下の賣買を惹きおこす變化は、それがいかに些少のものであれ、この乖離を再び除去するの力を、解き放つであらう。實際、自由競爭といへば、そこではいづれの經濟擔當者もまた眞に市場狀況に通曉してゐて、なんびとも暗中模索をやらないし、また全くの出鱈目の考へで動くのではない、といふことが考へられてはゐる、また自由競爭といへば、そこでは各の行爲者が全經濟事情に通曉してゐて、それによつて彼の決心をつける、といふことが觀念されてはゐる。もし、それが事實でなければ、生產價格からの乖離はより大きくなるであらう、特に、それはより長く持續するであらう、それがみづからを正すことは、より難いであらう。けれども、その場合でも自由競爭さへ支配してゐ

るならば、すなはち、資本にはいづれの投資部門にも自由に向けられるの可能性があり、勞働者には、最高の賃銀を享けるところで勞働につくの可能性があり、また買手には、同じ品質の商品はこれを最も廉く手に入れうるところで買ひ入れようとの正確なる識別力があれば、　かの法則は近似的に妥當するのである。かくて、自由競爭のもとにおいては、企業家や、勞働者や、消費者に、市場についての百科全書的な、ひと通りの知識があれば、勞働價値原則は綺麗に實現されるであらう。このひと通りの知識がないかぎりは、それがために乖離が生じる。しかしながら、たゞ自由競爭さへ、しかも、まづ第一に企業家たちの投資部門についての競爭さへ、有效に存してゐるのであれば、かの法則は、幾分弱められるにしても、常になほ實現せられるであらう。

　自由競爭といふ概念は、單に、生產者が互に競爭しあつて、各の生產者が最高の利益を獲ようと試みる、といふ意味をもつてゐるばかりではない。　間接には、實は問題とせられる商品が、どれくらゐの數量でも（實際的には市場に對して考へられるが）同じ費用でもつて作り出されるといふことも亦、ともに意味されてゐる。とこ

ろで、生產物のなかには任意の數量に亘つて必しも再生產しえられないものがある、さうではなく、生產の增加は、從來よりもより大きい費用を投じなければならないことを、意味するものがある。それは例へば、總ての農產物については、事實である。けれども、工業のなかにも、生產の增加は一に費用の增大をもつて、はじめて可能であることが、例へば採炭についてみるが如きことが、ないでもない。もしくば、既に最も有利な位置が塞がつてゐて、生產の增加はたゞ最も不利な位置(これがために例へば、より高く運賃がかゝることゝなる)においてのみ可能であるときには、鐵や鋼の產出についてもみられるところである。すべてこれらの場合には(農產物については最も明に見られるところであるが)全體として生產せられた分量の交換比例は、あたかもそれらが最高の費用で生產せられたかのやうに、決定されるであらう。だから、ここにおいても亦、――農產物の場合に類似して、工業生產物の場合にも同樣に――勞働價値原則はある特別な使ひ方において妥當する、そして、限界生產者よりもより惠まれた諸條件の下で働いてゐる生產者には、一種の差額地代――それは價格がより高いといふことの歸結であつて、その原因ではな

い——が發生するのである。

けれども生産の増加がより多くの費用を使つてさへも可能でない、もしくば、いはゞ農業におけるやうに、少なくとも、連續的な具合にはゆかないときには、この問題は勞働價値學説にとつてより困難となる。費用を高めるときには、そのたびごとに生産の増加が獲られるならば、そしてその生産のなかで、費用の最も高くかゝる部分においては自由競爭が行はれてゐるならば、そのときには、勞働費用も亦なほ恒に決定的である。けれども、ある生産において生産額が需要に比して尠いときには、すなはち、市場は著しくより多量の商品をも收容しようと構へてゐるのに、これに反して、より多量には生産されえないときには、買手の競爭が出現するであらう、そして、この競爭は該生産物の價格をその費用以上に昂めるであらう。かうなると、われわれの取り扱ふべきものは稀少財であつて、任意に生産しうべく、且つ増加しうべき商品についてゞはない。この場合においても、この財の價格はその勞働價値以上に、或はその生産價格以上に登るであらうと、これだけは云つて云はれないことはない。だが、いかほどだけか。それは專ら、一方においては需

分しうる財の分量がどれほど大きいかに、他方においては、買手の支拂はうとする心構へがどの程度にまで及んでゐるかに、係るところである。この二つの要素——それらを需要と供給と謂つてもよい——は、しかしながら、こゝでは進んで理論的に研鑽せられてゐない。勞働給付相互の等量といふことは、この場合には、作り出されえない、なぜなら、前提によれば、正にこの財を生產するために勞働給付を增加することは不可能であるから。例へば、特殊な品質のダイヤモンドと眞珠とを採つてみよう、これらはある數量しか存しない。有名なる畫家の繪についても同樣である。これらの生產物はある數量しか存しない、そして、その價格の大いさが幾何であるだらうかは、專ら、一方においてはその數量の如何に、他方においては欲望の切實さ及び支拂能力の如何に、かゝつてゐる。それが合法性は、いかなるものも、樹立されない。たゞ全然一般的に、次のやうにしか云ひえない。すなはち、ある國民經濟において大所得と大財產が急激に增加すれば、かゝる生產物の價格は上騰するだらう、反對に、所得財產が平均すると、これらの生產物の價格は低落するだらう、國民の富が同一のときには、騰落いづれのこともおきるであらう。

かくて、その結果を決定するものは、購買者間における富の、すなはち、購買力の分配、生産物の數量、最後に、欲望及びこの欲望の切實さ、これである。けれども、この事實は、勞働價値學說の土臺に出發點を求める一つの思想過程には接合できないところである。されば勞働價値論者、例へばリカアドーもマルクスも亦、これらの「稀少財」の交換比例を更に進んで研究することを斥けたのである。彼等はひたすら、上に確定した含蓄のある意味においての「商品」の研究に從事した。たゞ、ある物が「商品」であるかぎり、すなはち、任意に再生産しうべき勞働生産物であるかぎり、それは經濟理論的考察の照射界に立ち現はれる。そのものがさうでないかぎり、それは理論にとつて存在しない、それは無視してよい。さて、このことは、問題となる大概の生產物が、事實上、この意味においての「商品」であると考へられる狀態においては、經濟的に可能である。そして、自由競爭の支配してゐるときには、大概の生產物はこの意味における商品であるであらう。

けれども、この自由競爭が廢止せられるときには、どうであらうか。例へば、一經濟地域の全部の炭坑の自由處分が一手に收められてゐる場合を考へてみよう。

このことは、全部の炭坑が一人の所有者または幾人もの所有者の排他的な團體に屬してゐるときには、もしくば、石炭採掘の許可を仰がねばならないのに、その許可は誰にも彼にも與へられるのではなくて、一つの排他的な團體にしか與へられないときには、事實起りうるところである。かゝるときには、それらの産出地以外において、またそこで採掘せられる石炭以上に、なほ多くの石炭が獲られないのではないといふ事實があつても、それは問題ではない。かういつた抽象的な可能性は石炭の價格には影響を及さない。それでかゝるときには、そこに排他的な利益團體による供給の支配があるのである。このやうな一生産部門についての絶對的の支配を、われわれは獨占と謂ふ。獨占が個々の人に屬するか、もしくば、一團體に屬するかは、たゞその團體の内部に競爭さへ起らなければ、どうでもよい。

ある生産部門にこのやうな獨占が存してゐるときには、獨占の支配者は、小利をもつてするよりも、むしろ大利をもつて經濟すべし、との箴言に遵つて、生産からできるだけ大きい利得を引き出さうと圖るであらう。例へば、從來までは自由競爭が支配してゐたのであつたが、一分野の總ての生産が一手に合同したので、獨占が

成立した場合をとつてみよう、さうすると、獨占者は、より多量の生産物よりもより少量の生産物を、より高い價格で賣り捌くことができることを、容易に看取するであらう。それによつて、一面において彼の收入は高まるであらうし、他面において彼の費用が減じるであらう。もつとも、價格の昂騰につれて、實際彼の生産物の單位個數もまた同時に減少するがゆゑに、彼の收入の增加もまた緩漫となるであらう。だが、そのときには、一定の生産數量と一定の價格のもとにおいて、使用された資本に比較して、最大の、費用以上の剩餘が收められることは、彼の容易に發見するところであらう。その利得を極大にまで追及せんがためには、生産分量を幾何となすべきか、それは彼のたゞ實驗的に確定しうるところであらう。それで、の場合において、獨占の支配者が剩餘を、しかも、平均利潤以上の剩餘を收めることは、明白である。同樣にそれだけ他の總ての生産者が、正にそのことのために、その商品を買ふことによつて、彼等の收益の減少、財産の低減を蒙ることは、更に明白である（註一）。けれども、この獨占者の利得がいかに、大であるか、その他の生産者たちの被る損失がいかに大であるか、それは說明せられえない。それは、全然、國民

經濟における所得の分配の如何に係はり、また、賣手の請求するまゝに、より高い價格を支拂ふ心構への買手が幾人あるかに係はり、最後に、生産の縮少に當り費用がいかなる形をとるかに係はる。すべてこれらのことは、勞働價値學說からは答へることができない。それゆゑに、勞價價値原則が言ひうるところは、商品であつて、その生産が獨占のもとにあるものの價格は、競爭價格以上に上るであらうと、いふにとゞまる。だが、競爭價格以上に上ること幾何であるか、われわれの先に確立した生産價格以上に上ること幾何であるか、それは說明しえない。獨占價格は、われわれの前提の意味における「商品」の價格ではない、それで從つて勞働價值原則によつては、捕捉しえない。

（註一）總てこれらのことは、本章で常になされてゐる前提、すなはち、所與事實のかく如き動搖、もしくば變動も、國民經濟の發展をよび起さないといふ前提のもとにおいてゞある。だから、勞働、資本、土地等の數量は、確定的に與へられてゐる。もし、そうでなければ、かゝる變化はいづれもまた遠作用をよび起すのであるが、それを論じることはこゝにはできない。

そのことは勿論リカアドーのよく氣づいてゐたところであつて、從つて彼はそ

の研究を自由競爭下の商品生產に限つてゐた。同じやうな研究の制限はマルクスにも見出される。それは、これらの理論家の生存してゐた時代にはまた可能のことであつた。なぜかといふに、工業的生產も、農業的生產も等しく、自由競爭下に立つ生產であつた。獨占は、本來、國家の獨占——それは全く間接課税の特殊の形式たるにすぎないもの——として、極めて僅かの役割しか演じなかつた。ところが、十九世紀の九〇年代以來、歐羅巴の諸國民經濟の圖象は根本的の變遷を蒙つた。いまや、決定的に重要なる諸工業においては、生產の土臺においては、例へば石炭において、鐵において、大きな諸の獨占構成がある。また、幾多の完成品工業においても、獨占類似の諸種の聯合が存する。總てこれらの、生產者の諸聯合は、競爭を制限することによつて、價格を昂め、そしてそれによつて、利潤を增大することを目的としてゐる。このことは、他の未だ獨占の組織をなさない多くの生產を犧牲としてのみ、起りうるところである。この獨占資本主義と關聯する諸問題には、こゝでは全く觸れることができない。けれども、上述のことからして、自由競爭の前提から出發する經濟理論は、生產の基礎が獨占において與へられてゐる狀態においては、

實にゆゆしき困難をもつであらうことは、見やすいところである。もちろんこの場合に、獨占價格の競爭價格からの乖離が、難點となるのではない、むしろ、その理論によつては、この乖離の大いさが幾何であるかが、說明しえられない、といふことである。これらの乖離に於ける合法性は、勞働價値學說の立脚點からしては、全く認識せられえないところである。かくて、生產物相互の交換比例は、もはや決定せられえない。こゝに、全く致命的の、解決しうべからざる難點がある。それで勞働價値理論は、この難點を征服しえないことを、すなはち、それは獨占資本主義に對しては充分でないことを、告白しなければならない。獨占資本主義においては、價格は生產價格に等しくない、資本家たちの利潤率は互に同一のものではない。そして、獨占資本家たち相互の利潤率もまた同一ではなくて、それは、上に示唆しておいた諸種の事情の如何に係るところである。それゆゑ、この現象を說明せんがためには、われわれは他の方途を求めなければならない。われわれは――その譬喩を續けるなら――われわれの途を前進することができない、その障碍は回避されえもしなければ、征服されえもしない。われわれは、だから、途を引き還へし、そし

が、その出なほすにあたつては、問題の認知や、從來の途上においてわれわれの見聞し來つたことや、われわれの既に征服して來つた幾多の困難は、われわれによく貢献を致してくれるであらう。

て始めから出なほさなければならない、

第四章　使用價値(限界效用)學說

一　主觀的(限界效用)學說の根本思想

(a)　使用價値への回歸

もし、われわれがもう一度、根本的にどういふ仕方で交易における經濟的の量の聯關を把捉しうるかを省み、そして、商品を勞働量として觀察することが獨占資本主義の體系において挫折することを考量するならば、われわれは出發點に立返つて、使用價値、すなはち、欲望を滿足せしめうる限りにおいての生産物の意義に到る。われわれは、普遍的觀點としての使用價値は既に古典派經濟學においていくたびか檢せられ、そして、それが經驗から知られた價格と矛盾するところから、いくたび

か棄てられたことを知つてゐる。なぜならば、高い使用價値をもつた物、例へばパンは僅かな價格しかもたず、反對に、僅かな使用價値しかもたない物の價格が高いことがありうる。これで以つて日常生活の言葉で知られてゐるやうな意味における使用價値の概念は用に堪へないことが既に證明されてゐる。もし、該概念を役に立ちうるやうに、特に、價格構成を理解せしめるやうに、うまく理論的に加工することができないならば、われわれの思索はこの出發點を取りえない。

使用價値概念のこのやうな理論的彫琢が行はれるまでには、經濟學は百年以上も要した。そしてしかも、それは二三の理論家(註一)によつて同時になされたのである。このことからして、いかに甚しく科學的の思想がこの方向に突進したかを容易に知ることができる。(註二)

(註一) ほとんど同時に、そして、それぞれ互に獨立に、使用價値、效用の觀點からして國民經濟の交換價値機構を基礎づけようと試みたのは墺太利人のカール・メンガー、英人のウイルヤム・スタンリー・ジェヴォンズ並びに佛蘭西人のレオン・ワルラであつた。(その思想は殊にウイーザー、ボエーム・バーウエルクによつて更に完成された。)

(註二) 獨占價格の說明に際しての勞働價値學說の諸の困難こそ理論における新なる方向を來た

さしめたものであつたといふことはできない。なんとなれば、七十年代にはこの問題は中心的のものとしてまだ知られてゐなかつた。まづ第一に假定できるのは、利潤率の平準化に當つて生ずる諸の困難が價値問題をもう一度ひつくり返して見る誘因を與へたといふことである。恐らくなほまた學問外の觀點も一緒にはたらいたであらう。といふのは、もし、商品の交換關係を勞働量の交換と解し、從つて、剩餘、利子を不拂賃勞働の等價物と解するならば、この剩餘は元來勞働者に屬するものであり、そして、全部の社會生產物は、それが勞働者によつて造り出される限り、また勞働者の手に再び歸するやうな生產形態を求めねばならないといふ要求がぢきに出てくる。かゝる結論はぢきに出てくるものでもあるが、また同時に、理論的研究の獨立のために排斥すべきものでもある。全部の社會生產物を勞働階級に與へるといふことは、これを理論的に價値學說から基礎づけることはできない、なんとなれば、勞働生產物の一部を削いて、企業者の手に渡すことが、より高い段階における生產の恒常的可能性の先條件であるといふことも實際ありえようから。かくて、その生產期間內において造り出された全體の生產物の價値が消耗された生產手段の價値を差引いて、理論上はなるほど勞働者に歸屬せられるべきものであると考へることもできよう、しかし、分配はなほ他の觀點、例へば、收穫の一部を企業者階級に與へることによつてのみ保證されてゐる資本蓄積の觀點を考慮せねばならないと考へることもできよう。それは可能なる立場であつて、それを引證することはただ理論的分析と實際的要請とが、根本的に、別の平面にあることを示すべき筈であるにすぎない。そのことはなほ一層明かになる、もし該問題をひとり經濟政策的の側からばかりで

なく、倫理的の側からも提起するならば。 それは丁度中世がその公正價格の學說においてしたやうに。 なんとなれば、明かに、經濟理論的思索は、たかだか、いかなる分配が、持續して行はれうるか、また行はれるべき筈であるかについて述べうるに止どまつて、いかなる分配が公正であらうかについては述べえない。 それにも拘らず、しばしば抽象的の理論家すらこの異つた設問を區別することができない。 そして、ある點までは確により新たなる價値學說の成功はこれらの設問の混淆と關聯してゐる。 私有財產に基く資本家的生產方法の「理論的基礎」を造るには、勞働價値學說よりもより適してゐるといふのである。

使用價値は、既にいつたやうに、理論の一つの古い要素であつた。 それはマルクスの理論においても重要な役目を演じてゐる、 彼が使用價値、すなはち、生產物の、ある欲望を滿足せしめる能力を指して、交換價値の、そしてそれと共に價値一般の前提、だとする限りにおいて。 けれども、この思想を進めてゆくと、それに內在する諸の大なる難點が直ちに現はれる。 なんとなれば、この聯關における使用價値とは何か？ 生產物がある欲望を滿足せしめうれば、それで足りるか？ それは大抵總ての生產物ができる、 全然やりそこなつた、技術上失敗に了つた生產を除外すれば。 だから、抽象的な有用性は明かに問題にならない、 なぜなら、これは目的

をもつた人間勞働の生産物が總て具へてゐるから。さうではなくて、社會的階梯における有用性が重要である。しかし「社會的に有用な」のは、市場を見出すもの、すなはち、交換財に對し、貨幣に對し交換できる、しかも生産が少くともその儲けから再び更新されうるやうな關係において、交換できるものである。もし、この思想が、單に交換價値をもち出すといふこと以上を、すなはち、單なる同語反覆以上を意味すべきであるとすれば、それは修正されねばならない、そして買手が市場で交換財を生産物の獲得のために費さうと心構へするための諸の條件、進んでは、何時買手が或はより多くの或はより少しの交換財を費さうと心構へしてゐるかなどを明かにしなければならない。一言を以つていへば、交換價値の成立に對する前提または條件として使用價値をもち出すことは需要の分析を、勞働價値學説論者の多くが與へられたものとして假定しがちな買手側からの市場の觀察を必要とする。(註一) 實際、近代の價値學説は悉く需要の側から交換並びに持續的生産の問題に近づかうとする試みである、――勞働價値學説が同じ問題に供給の側から取掛つたやうに。

（註一）どのくらゐまで生産によつて實際に需要が與へられてゐるかは經濟の全行程の觀察において示された。しかしながら、それほどに緊密な生產と消費との聯關を呈示したところで、それはまだなんら需要の分析ではない。

もし使用價値を中心に置くならば、人間の諸の欲望から出發しなければならない。諸の欲望は、もし、それを區分せずに、そして、その全範圍に亘つて、理論的思索に入れ込むならば、理論的になんら利用しえない事象である。全體としての、一般的の意味における食欲、衣服欲を以つてしては何事も始めることができない。むしろ、欲望が意識に現はれるのは、決して全體的な、未分の、抽象的なものとしてではなくて、たゞ個々の欲望衝動としてゞあることを想ひ出さねばならない。個々の欲望は一定の順位をなして存してをり、そしてしかも、その順位は客觀的に異つてゐる。更に、個々の人々が個々の欲望衝動に賦與する意義も亦主觀的に異つてゐる。ところで、われわれは欲望衝動並びにそれの意義について何か一般的なものが見出されるかどうかを考へねばならない。

(b) 欲望飽和と限界效用。孤立した經濟者の價値評價

こゝにおいて、われわれは、まづ欲望飽和の原則を顧みねばならない。それによれば、諸の欲望は個々の欲望衝動において感じられる、そしてその欲望衝動はある欲望を次ぎ次ぎに滿足するにつれて切實さを減じる。その最も明瞭なのは食欲においてであるが、しかし、衣服欲、住居欲においても同樣にさうである。ある欲望が意識のうちに押し進む際に伴ふ重要さ、意義、切實さは、それが全然滿足されないときには無限に大きくありうる。けれど、最初の、最も切實な欲望衝動が滿足されると、その次の欲望衝動の强度はもはやそれほど大きくなく、三番目のはなほ小さくなり、以下これに準じる。かくて、欲望滿足のこの原則は、欲望をば、全體において、抽象的に、未分のまゝにでなくて、その個々の欲望衝動においてのみ觀察すべきことをわれわれに示唆する。かく部分欲望に分解することによつて、そもそも使用價値の思想が理論的に役に立つものになるのである。なんとなれば、使用價値そのものとして生產物を解すことはできない。使用價値そのものとしては、生產物は理論的觀察の手の屆かないものである。各ある欲望衝動を滿足するに適した部分量に分解することによつて、一つの理論的に少くとも更に分析を進めうる

學説も亦最初には、代替できる、任意に分割しうる生産物を取扱ふことが示唆されてゐる。そして、更に限界效用學説も最初には、勞働價値學說と同樣に、自由競爭を前提することがわかるであらう。特に、欲望衝動の一全群を滿足せしめうるでもあらう、全體として觀察された財の貯への價値表現は、限界效用學說の最初に展開するところではない。

どういふやうにして、かく部分量(その各がある欲望衝動またはある欲望衝動群を滿足せしめるのに適する)へ分割することが理論的に進んでゆくかは、事象を單純化することによつて最もよく明かになる。その際われわれは次のやうに假定する、すなはち、一定の期間の、例へば一年間の諸の欲望が意識のうちに動いてをり、今日手にしてゐる貯へのうちの生產物は、この年の間だけでそれ以上には涉らない欲望の滿足に用ゐられる、それは、經濟を營む者がそれほど遠く未來まで慮らないためであれ、生產物が有效性を喪ふためであれ、一年の經過後には同種類の生產物が再び手にされるであらうためであれ(持續的生產)。

これらの前提は、――ボェーム・バーウェルクの例に從つて――ロビンソンのやうな人を、すなはち、消費財のある貯へを手にしてゐる孤立した經濟者を考へるときに、最も純粹に表はされる。これらの消費財は總て次の經濟年度の欲望滿足にあてられてある。もし、例へばロビンソンが收穫の後に五袋の穀物を所有するならば、彼はこれを次の目的に費すであらう、第一と第二の袋は彼の直接の生活欲のために、第三の袋は翌年度のための種子として、第四の袋は、彼の食物をより滋養あるやうに、またより變化に富むやうにするために鳥を飼ふのに。第五の袋は、彼はその食料のためにはもはや必要としないであらう。そして、彼はそれを酒精飲料を作るのに用ゐるか、それともそれで鸚鵡を飼ふであらう。もし彼の手にしてゐる五袋の穀物のうちの一袋が喪くなるならば、勿論彼は、最後の、最も重要さの少い欲望の充足を斷念するであらう。かくて、彼は鸚鵡を再び放してやるであらう、この奢侈欲望のために彼の食料も、また翌年度の種子も制限しようとは思はないから。

さて、この單純化された事象において次のことが認められる、もし、ロビンソン

に尋ねるのに、穀物の彼に對してもつ重要さ、意義、價値を以つてするならば、彼は全體の貯への價値を尋ねられたのなら、價値は彼にとつて全然評價できないと云ふであらう。實に彼の全存在が穀物を所持してゐることに懸つてゐるのであるから(他の食料品を存しないものとすれば)。それは生命が彼にとつてどれだけの價値をもつかを尋ねるのと同樣であらう。それは經濟的の量で表現することができない。それに反して、五袋の貯へのうちの一つの袋の穀物の價値を尋ねるならば、彼はこの問題をもはやそれほど馬鹿げたものだとは思はないであらう。なぜならば、多くの袋の貯へのうちにおいて一袋の價値は彼にとつて、既に述べたところからして、一四の鸚鵡を飼ふことが彼に對してもつ重要さと同意義である。そして、彼は多分この穀物をいつてみれば、一年の間喫煙の樂みを彼に與へうるでもあらう一〇ポンドの煙草と比べて評價することができよう。もし、彼が一〇ポンドの煙草を一袋の穀物と比べて評價し、そして、一袋の穀物を一〇ポンドの煙草と代へて手放すべきか否かを決しなければならないとすれば、たゞ、どちらの欲望が彼にとつてより重要であるかといふ考量のみが、その決定に際して彼を導くであ

らう。そして、交換は、或は交換の起らないことは、欲望、また從つて彼に對するそれの重要さの比較から說明される。

更に進んで、ロビンソンが、たゞ四袋だけしかもつてゐないやうなときに、一袋の穀物を一〇ポンドの煙草と交換するであらうかどうかを尋ねるならば、答は明かに違つてくるであらう。最後の袋の穀物もロビンソンはなほ彼の食料のために必要とする、たとひ止むをえない場合にはそれを棄てうるとはいへ。もし彼が全く激しい愛煙家であるとすれば、そのときには彼は四番目の袋の穀物をも一〇ポンドの煙草と代へて遣つてしまうであらう、が、恐らく彼は既に躊躇するであらう。もし、彼がある不幸のために二袋の穀物を喪ふならば、彼はもはや躊躇することなく、交換を斷乎として拒むであらう。なんとなれば、彼はよき經濟家として、必ず翌年度における穀物に對する所持をば煙草と交換はしないであらう。彼の決定がどうならうと、それは、彼の所持してゐる最後、最後の袋の意義が、最後の袋を以つてなほ充たしうる欲望が、煙草を所持することによつて滿足されるべき欲望より、大きいかまたは小さいかによつてきまるであらう。彼の決定にとつては、彼が欲

望を互に較量することができれば、それで完全に充分であらう。それは彼にとつて非常に困難なことがあるかも知れないが、しかし、交換の可能の前に置かれるならば、彼はなんらかの決定に到達しなくてはならない。或は彼は拒むか、そのときには最後の袋の穀物に懸つてゐる欲望滿足の方が彼にとつて煙草よりもより重要なのである、或は、その欲望滿足が彼にとつてより重要であるかのやうに行動する。もし、彼が交換すれば、反對の事象が存するのである。かくして、交換行爲を遂行し、または拒むためには、一の欲望滿足が他の欲望滿足よりもより重要であるかどうかに關する決定のみがたゞ必要である。

(c) 主觀的の評價は數量化しえない。

さて、更に進んで、ロビンソンにとつて第四の袋は第五の袋よりも、第三の袋は第四の袋よりも、どれだけ重要であるかを尋ねたとすれば、彼はそれになんらの答も與へえないであらう。なぜならば、生命を維持することは鸚鵡を飼ふことよりも、一〇倍、五〇倍、或は二、〇〇〇倍も、より價値に富んでゐるなどゝいふことは勿論云

はれないから。それは、生命、生存の價値は、無限であるからして經濟者にとつて全く計算できない大いさであり、從つて、これと他のなんらかの欲望滿足との間における量關係は全然擧示されうるものでないことをもち出しさへすれば、排擊することができよう。同じ事は、それ自身では必ずしも不可缺でない財の比較、從つてそれ自身では決して無限大でないところの欲望の滿足の比較においても妥當する。例へば、ロビンソンが第五の袋の穀物を一〇ポンドの煙草と交換しようと即座に心をきめてゐたとすれば、彼は、たゞ、煙草を喫む方が鸚鵡を飼ふよりも自分にいより重要だと云ひうるのみである。だが、彼はこれらの欲望滿足が互に一の數的の割合にあると云ふことはできないであらう。彼は、一〇ポンドの煙草は第五の袋の穀物より五倍だけ、または二倍だけ重要だとは云ひえないであらう、なぜなら、欲望强度は意識內容として、從つて質的要素として與へられゐるから。なんたるとを問はず、正確な量がそれと結びつけられることはない。しかし、意識內容そのものが數量化されるかどうかは、使用價値原則の有用性に對しても亦重要でない。このことの證明は後に至つて始めて與へることができる。だから、いまは、一

見逆理のやうに見えるが、簡單にかう提言して置きたい。といふのは、一見すると個々の生産物と結びついた價値評價の數量化を許さない原則を、價値の決定に用ゐるのは馬鹿げてゐるやうに見える。いはんや、しかも、交易經濟においては價格、すなはち量への置換へが行はれ、そして價格が最も重要な經濟的事實であるにおいては。しかし、それは、いま既に強調して置くやうに、たゞ外面的の矛盾であつて、なほ後に至つて分明すべきものである。

もし、われわれが使用價値、效用の原則をば價値論的考察の出發點とするならば、そのことは一の全く定つた形において起るのである。この際問題になるのは、ある貯への價値並びに交換關係ではなくて、生産物のその貯へのうちの一つの單位の價値決定、交換關係の決定である。同種の生産物のある貯へのうちの一單位の價値は常に最後の部分量の價値に從つて測られる、すなはち、最後の欲望衝動を滿足せしめるのに用ゐられるところの部分量の價値に從つて測られる。それだから、ある貯へのうちの單位の交換關係に對しては限界效用が標準的であるといふのである(該表現はウィーザーに發する)。かうした限界效用の原則が近代の理

論上の論議を支配してゐるのである。ところで、われわれは、いかなる意味においてそれが用ゐられ、そして、いかにしてそれが個々の細かい點について適用されうるかを、なほ仔細に見ねばならない。なんとなれば、われわれが出發した簡單な事象はそのものとしては、われわれの交易經濟の抽象にほかならず、むしろ、基礎的概念を展開するための出發點、方便としてたゞ選ぶことができるにすぎない。

しかしながら、高い使用價値を具へた生產物が低い交換價値をもつことがありうるといふ、また、その反對のことがありうるといふ、最初に與へられた難點がいかにして消去るかはいまや既に明瞭である。一部分量の價値は、この部分量の所持に依存するところの最後の欲望滿足の重要さによつて決定され、そして、その重要さは、貯へが大なるときには極めて僅かでありうる、たとひ、その欲望が、一般としては、第一の、または優先的の地位にあるにしても。だからして、重要な、生產物の交換價値が低く、例へば金のやうな重要でない生產物の交換價値が高くありうるのである。いな、極めて高い有用性をもつた生產物の交換價値が零でありうる、そして、人間の自由になるその貯へが、總ての欲望衝動を滿足せしめて餘りあるなら

ば、それはいつも零であるだらう。水の一部分量を失ふことは、例へば豊かに流れる泉におけるやうに、水が總ての欲望衝動を滿足せしめるのに充分なほどに存するならば、欲望滿足になんの影響も及ぼさずに濟むことがありうる。そして、そのときは、この部分量の水にはなんらの價値評價も結びつかず、その價値は、有用性の高いにも拘らず、零であるだらう。だが、その貯へが乏しく、ために各の部分量にある欲望滿足が對應してゐるやうな貯へにあつても亦、價値はその貯への大きさに依存するであらう。こゝにおいて、われわれは既に根本的な差異に到る。といふのは、いかなる勞働が財を作るに用ゐられたかといふことが標準的ではなくてたゞいかなる欲望衝動が滿足されないでしまふかといふことが標準的である。決定的の觀點は、最後の部分量を所持することにその滿足が依存してゐるところの欲望衝動であり、生產に必要とした勞働時間ではない。いかに、しかも、兩方の觀點が聯關するか、それについては後に述べねばならないであらう。

二　單純なる交易經濟における限界效用原則

ところで、限界效用の觀點をたゞ一人の、ロビンソンの經濟から交換經濟に移すことが必要である。生產物相互の交換をこの觀點に從つて構成することができるか？　この目的のために、われわれは、個々の人々が一定の貯へのうちの一財の部分量の各に一定の價値評價を結びつけると假定する。そして、いま述べたところにも拘らず、更にこの價値評價が數字で表現されると假定する。われわれがまづそれを爲すのは敍述を容易にするためである。いかなる意義を數字がもつかは後に明かになるであらう。いづれにしても、それは、それが個々の意識强度を寫すといふやうな意味ではない。なんとなれば、一の欲望衝動に屬する意識强度、重要さの感情は數字のうちに容れられるものではない。しかし、われわれはまづ、この、後に解けるであらう難點を無視する。われわれは次のやうに假定する、市場において購買者と賣却者とは個々の生產物に價値評價を結びつける、そして、そ

の價値評價は數字に表はされる、それも、賣却者は、彼が賣らうと心をきめるためには何單位の他の財を獲ねばならないか、そして、何單位のこの(價格)財を購買者は一單位財の獲得に對して與へようと心をきめてゐるかゞ詳細に云はれうるやうにである。さうすれば、交換關係は次の如くに形成される。

(a) 孤立したる交換

もし、賣却者Aが彼の貯へのうちの生産物の一單位を二〇に評價する、すなはち、それを二〇單位の交換財と交換しようと心をきめてゐるならば、そして、もし購買者Bが、Aの賣る生産物の一單位を獲るために三〇單位の交換財を差し出さうと心をきめてゐるならば、そして、AはBの、またその逆にも、價値評價を詳細に知つてゐるならば、一單位の購買が、從つて賣却(交換)が成立するだらう。しかし、交換客體(例へば馬)と交換財との間の交換關係を精密に確立することはできない。これはむしろ交換者の手腕に依る。もしAがBよりも手腕があれば、價格は三〇により近く、反對の場合には二〇により近いであらう。

(b) 買手の一方的競爭

われわれはいまや買手の一方的の競爭を假定する。買手は若干存するが、賣却者はたゞA一人だけだとする。Aの評價は元通り二〇のまゝである。が、購買者の側においては、B^1は一單位の生産物に對し三〇を與へようときめ、B^2は二八を投じようときめ、B^3は二六、B^4は二四、B^5は二二といふやうだとする。いまや、該財の賣られる價格は既に遙かに精密に決定されるだらう。もし、Aがたゞ一單位のみを賣らうといふつもりであれば、價格は勿論二八以上に定まらねばならない、が、三〇以上に上ることはできないであらう。二八以下でも、また丁度二八でも、價格はありえないであらう、なぜなら、かゝる價格では、等しく該財を獲ようと心をきめてゐる者が市場に二人あるから。($B^3$$B^4$等は二八といふ價格において既に除外されてゐる。)そこでB^1は自ら、その競爭者B^2を排除するため、價格を二八以上に高めるであらう。しかし、價格は三〇以上に上ることはできないであらう、なぜなら、さうすれば購買者がもはや一人も市場にゐないから。かくして、價格はいまもま

た、それぞれAとB_1の手腕に從つて、二八により近く定まることもあれば、三〇により近く定まる事もあらう。しかし、購買者相互の競爭は、こゝで既に、價格の定まるべき範圍を非常に著しく狹める。そこで、こゝでは價格は、もはや買ひえない最後の買手の價値評價（二八）と購買するに到りうる買手の價値評價（三〇）の間で定まる。

(c) 賣却者の一方的競爭

もし若干の賣却者とたゞ一人の購買者が市場にあるならば、だからして、賣却者の一方的競爭が存してゐるならば、事情は似たものである。例へば、A_1は二〇で賣らうと心をきめてゐるとする、A_2は二二の價格に至つて始めて賣らうと、A_3は二四の價格で、A_4は二六の價格で賣らうと心をきめてゐる、――そして、Bは以前の通り該生産物の獲得に對して三〇を支出しようと心をきめてゐる。この場合においても亦、かくて價格は、しかも既に市場狀勢によつてやゝ精密に、定められる。それはいまや二〇と二二の間で定まる。それは二二に達することはできない、なぜなら、さうだとすれば、二單位の生産物が市場に存し、購買者はたゞ一人しかない

ことになるから。最も强い賣却者、すなはち、二〇で賣らうと心をきめてゐる賣却者は彼の競爭者を市場から推し退けようと試みるであらうが、それはたゞ値段を下げることによつてのみ起りうる。そこで、價格は二二以下に下り、そして、二〇より幾分か上になければならないだらう。だから、こゝで價格は、いま說明した場合と類似して、最後の、もはや交換するに到りえない賣却者の價値評價(二二)と「最も强い」すなはち、最も廉い賣却者の價値評價(二〇)との間で定まる。こゝにおいても勞働費用と價格の關係は存してゐないで、交換者、つまり、購買者と賣却者の價値評價が決定する。

(d) 發展したる市場圖象

實際上最も頻繁なのは、若干の買手と若干の賣手が互に向ひ合ふ場合である。そのときに價格がいかにして定まるであらうかは、ボェーム・バーウェルクの構成した圖式によつて最もよく確立することができる。

一〇人の買手と一〇人の賣手が市場にあるとする。市場の對象物は馬である

とする。　總てが同じ性質のものであり、賣手は各一匹の馬を賣る筈であり、買手は各一匹の馬を獲ようとの意向をもつとする。　價格財で表した、買手の價値評價は種々異つてゐるとする、　買手が馬を必要とする目的が異るか、または、買手の手にしてゐる交換財の量が種々異つてゐるか、いづれかのために。　同樣のことが賣却者についていはれるとする、　同じく、賣却者が賣りに出した馬に結びつける價値評價は種々異つてゐる、　それは彼等が交換財を評價する高さが種々異るためにせよ、または、彼等自らが、その經濟を行ふにあたつて、馬を種々異つた目的に用ゐるためにせよ。（それはまた彼等の經濟の種々異つた備へ、その種々異つた大きさと關聯するでも、あらう。）賣手は、その馬をより廉く賣らうと心をきめてゐれば、それだけ經濟的にはより強いであらう、　反對に、買手のうちでは、最も高い價格を拂らふつもりでゐる者が經濟的に最も優越してゐるであらう。

評價
300
280
260
240
220
210
200
180
170
150

賣手	評價	買手
A_1	100	B_1
A_2	110	B_2
A_3	150	B_3
A_4	170	B_4
A_5	200	B_5
A_6	215	B_6
A_7	250	B_7
A_8	260	B_8
A_9	280	B_9
A_{10}	300	B_1

ところで、われわれが次のやうに假定するならば、すなはち、馬が總て同時に市場にあり、購買者と賣却者も總て同樣である、馬は總て互に等しい、更に買手と賣手が皆彼等自分のばかりでなく、他の人の價値評價を詳しく知つてゐる、購買並びに賣却は競賣の方法で行はれる。かう假定すれば、總ての賣られた馬に對して同一の價格が定まり、そして、いかなる價格で購買並びに賣却が起るであらうかの問題に對して一義的な答が出てくるであらう。同樣に、幾匹の馬が所有者を換へ

るであらうかの問題も一義的に答へられるであらう。

試みになんらかの價格を取つて見て、それが可能かどうかを檢すれば、これらの問題の答に達する。假りに、例へば、一五〇といふ價格が競賣の糶屋によつて叫ばれたとすれば、一〇人の買手が全部申込むであらうが、これに反して、賣りに出るのはたつた三匹の馬にすぎないだらう。一五〇以上を出すつもりでゐる買手、すなはちB_1——B_9は各三匹の馬の一匹を獲得するために、より高い呼値を云ふであらう。そして、購買者の一人は恐らく、供給と需要との間の甚しい不權衡を見て、二〇〇といふ價格を申出るであらう。この價格では七人の購買者が申込むが、しかし賣手は五人だけである。そこでなほ不權衡が存し、ためにこの二〇〇といふ價格は定まりえない。漸次に呼値は糶り上り、恐らく二二〇まで騰るであらう。すると、いまや、關係が逆になつたことが明かになるであらう、この價格では五人しか買はうとしない。これに反して六匹の馬がこの價格では市場において賣りに出る。六人の賣却者(A_1——A_6)は各、確實に賣りうるために、價格を下げようと心をきめるであらう。價格申出の下落は、二一五の價格を割るまでに行かねばならない

であらう。なんとなれば、二一五の價格ではなほ賣手は六人あり、これに反して、買手はたゞ五人だけしかない。かくして價格は二一五と二一〇の間で定まるであらう。そのときには、すなはち、五人の賣手が賣らうと心をきめ、五人の買手が買はうとするであらう。しかるに、二一五の價格もまた二二〇の價格も共に明かに不可能であらう。もし、いかにして價格が定まるかを、全く一般的に云ひ表さうとすれば、價格は「双方の限界一組の間で」決まるといふ、ボェーム・バーウェルクの云ひ方を選びうるであらう。その際、第一の限界一組は、なほ賣却に來るところの最後の、從つて最弱の賣手（A5）と市場の機構によつて既に排除される買手のうちでの最強者（B6）とである。この限界一組は下の限界をなすからして、そのより高い數字、この場合には二一〇が標準的である。もう一つの限界一組は、市場の機構によつて市場から排除される賣手のうちの最強者A6と、買ひうるところの最弱の購買者、從つて、購買者のうちで最も少くしか値をつけえないがなほ買ひうるといふ者（B5）によつて造られる。この二人の者は上限をなし從つて、低い方の數字、かくて二一五が標準的である。

これらの限界一組の價値評價が、上述の條件の下における價格構成に對して標準的である。このことが最も嚴密な語義において正しいことは、限界一組以上のまたは以下の價値評價が價格構成並びに取引の高さに對してなんの意義も有しないことからしてわかる。例へば、假に、A_1の價値評價が五〇もしくは二〇であり、同樣にA_2、A_3等のそれが一一〇や一五〇等より著しく低く、これに對してたゞA_5が二〇〇で、A_6が二一五であるとし、――更に、B_1の價値評價、すなはち、彼が支拂はうと心をきめてゐる價格が三〇〇でなく、五〇〇或は一〇、〇〇〇であり、同樣にB_2、B_3、B_4等がより高い價格を承諾しようと心をきめてをり、たゞB_5とB_6の評價が元の儘だとする。最後に、假に、A_7以上の價値評價がこゝで構成したよりも高く、同樣にB_7のそれがより低いとするならば――總結果においては、といふのは、價格並びに五匹だけの馬が所有者を換へるといふ事實においては、なんの變りもありえない。A_1――A_4並びにB_1――B_4が交換において獲る利益は、こゝで假定したよりも著しく大きいでもあらう、なぜなら、彼等は、また、まさに、より低い價格を受取り、また從つてより高く支拂はうと心をきめてゐたでもあらうから。しかしながら、誰

でもがより少い利益よりもより大きい利益の方を以つて交換するといふ原則、そして誰でもが、よし小さくとも、利益のある交換を求めるといふ原則からみれば終局結果においてなんの變りもないであらう。上の前提の下においては、買手は、より廉くても賣らうと心をきめてゐるやうな賣手があるからといつて、より低い價格を強ひることはできない。なほまた、逆に、賣手が、遙かに高い價格を承諾しようと心をきめてゐるやうな買手があるからといつて、より高い價格を獲ることもできないであらう。たゞ限界一組の價値評價が萬一變つたときにのみ、價格が變るであらう。――これをより詳細に究めることは恐らく無用であらう。

(e) 供給及び需要のより詳細なる決定、市場當事者とその價値評價の分析

かくして、市場でわれわれがぶつかる諸の價値評價の分析は、供給と需要の內的構造を、そしていかにしていかにしてこの價値評價が價格を決定するかを示す。供給需要の變化とは何を意味するかゞ、これまで見ることのできたよりもより明瞭になる。

われわれの圖式に止どまるなら、もし、A_7のところに、その馬を二五〇で賣らうと心をきめてゐる賣手が一人でなくて一〇人、或は一〇〇人をり、A_7等においても同樣であるならば、——B_7、B_8のところに、二〇〇或は一八〇や一六〇等で馬を、しかも澤山に買はうと心をきめてゐる買手が一人でなく數人あつたとするならば、それは皆、他の條件が同じであれば、大したことなしにすむ。これに反して、A_1、A_2等、B_1等の數の變更は、價格の極めて重要な變更を惹起するであらう。例へば、一人の代りに二人のB_1がをり、各三〇〇の値をつけようと心をきめてゐたとすれば、價格は變るであらう。（それはすなはち、二二〇と二四〇の間になるであらう）。たゞ「給付能力ある」需要と「給付能力ある」供給のみが價格に對して決定的である。これに反して、市場價格以下で買はうと心をきめてゐるやうな需要者の增加は問題でない。そのことは需要供給の概念の闡明にあたつて極めて重要である。

該圖式並びに、市場狀態がどんな働きをするかといふことの考察とからして、既に、決定を行ひうるのは限界一組のみであつて、價値評價のなんらかの平、均、でないことが、なほまた明かになる。それは、誰でも最大の利益を以つて交換しようと、つ

まり、買ふなり賣るなりしようと試みるものであるといふ命題から出てくる。それゆゑ、より高い價格をつけようと心をきめてゐたやうな購買者は限界一組、すなはちより弱い購買者の働きによつて、保護を享ける。彼等の價値評價は完全に現はれる必要を見ない。同じことは、市場價格よりも遙かに低い價格でも賣らうと心をきめてゐたやうな、最も給付能力ある賣却者についても云はれる。彼等はより高い價格を獲る、その一方、より弱い賣却者は市場から排除されて、空しく市場を去らねばならない。限界一組はより強い市場當事者に對して、いはゞ彼等を價格の騰貴、或は下落に對して保護するところの一つの堅牢な壁をなすのである。彼等は價格をより低く保つために、またより高く保つために何もしなくてよい。市場から排除された購買者の不足、市場から排除された賣却者の損失が同時に、より強い購買者と賣却者に利益を給與する作用をもつてゐる。より強い購買者の利益は上の例においても數字的に表はされる。そして、マーシャルの提議に從つてそれを消費者餘剩と呼んでもよからう。（註一）

（註一）例へば、一四の馬に對して三〇〇を與へようと心をきめてゐたB_1は二一二の價格において

かくして、具體的の價格はそのときどきに主觀的評價の合成として理解することができる。そこで、市場でわれわれがぶつかる價格といふ價格は、限界一組の確立によつて定められる價格である。供給と需要の働きは、限界一組、すなはち、價格を現實に定めるところの購買者團並びに賣却者團（といふのは常に個々の人ではなく、人々のやゝ大なる群に關してゐるから）を發見することに存する。その際、價値評價が何によつて定まるか、それの大いさを決定するものは何かについては未だ何事も云つてない。

これらの問題を全く究め盡さないで、次のことを注意したい。

(1) 生産物の獲得に對して或はより大なる量或はより小なる量の交換財を遣らうとする心構へは、他の點が同じだとすれば、買手が手にしてゐる交換財の量に依存する。その人の欲望等級（欲望の順位）がどうなつてゐるかは全然措くとして、彼は欲望等級が同じまゝだとすれば、その手にしてゐる交換財の量が大なれば大なるほど、それだけ大なる量の交換財を遣らうと心をきめるであらう。なぜならば、

彼にとつて、生産物を獲得するといふ能力において測られるところの交換財の限界效用はそれだけ少くなるから。 買手は、例へば交換財の所有が倍になれば、以前よりも大なる量の交換財をある財の獲得に對して遣ることができ、また、やらうと心をきめる。 彼が、例へばいままでは一單位の生産物も獲得するつもりでなかつたとすれば、いまや彼はさうしようと心をきめるであらう。 また、これまで、いつてみれば二〇といふ價格で、その生産物の五單位を獲ようと心をきめてゐたとすれば、いまや彼は恐らく八或は九單位を獲ようとするであらう。（註一）

（註一） われわれはこゝで、これまで根柢にしてきた事象を多少修整することができる。 個々の買手は、大抵、生産物をば一部分量ではなくて、數部分量を獲ようといふ希望をもつてゐる。 彼等は、賣りに出る生産物の單位に、高さの種々異つた價値評價――交換財において表はされた――を結びつける。 例へばB^1が一單位の生産物に對して一〇〇單位の交換財を與へようと心をきめるとすれば、彼は第二の單位には恐らく八〇、第三のには六〇、第四のに對しては多分たゞの四五だけを與へようと心をきめるでもあらう。 彼が若干單位の生産物を獲ようと欲するならば、彼は、單位の各に對する價値評價が種々異るにも拘はらず、彼の獲得する單位の總てに對して同一の價格を支拂ふであらう、 かくて、限界一組が價格を決定するのにつれて、例へば、四五或は四〇或は三〇を支拂ふであらう。 彼は、價格が、例へばたゞの三〇にすぎないからと

いつて、四單位以上の生產物を獲得しはしないであらう、なんとなれば、第五の單位は彼はこれを二八或は二五に評價するから。彼はまた次のやうに云ひはしないであらう、すなはち、彼は第一、第二などの單位において極めて著しい消費者餘剩を獲た、そこで、この理由からして第五の單位に對して彼の評價に相當する以上の價格を與へうる、なぜなら、五單位全部で彼に與へる效用は、彼がそのために爲さねばならなかつた費用よりもなほ大であるから、と。かゝる考量は總て彼の爲すところでない、なぜなら、彼は一人の經濟人であり、そしていかなる效用、いかなる意義を第五の單位は自分に對してもつか？を考慮するから。その效用が、交換財の單位において、限界一組の決定的の價値評價よりも少いならば、彼はこの第五の單位をなほ手に入れようとはしないであらう。その際固執せねばならないのは、生產物の單位が分割されうるといふこと、並びに買手がその貯へを全體として評價し、そして獲得しなければならないといふやうなことはない、といふことである。ところで、假に、買手の價値評價が變るとすれば、一〇〇、八〇、六〇、四五、二五等から二〇〇、一六〇、一二〇、九〇、五〇に騰るとすれば、買手の有效需要は、以前よりもより澤山の生產物の單位に及ぶであらう。生產物のより多くの單位が所有者を換へ、そして以前とは別な限界一組が價格を決定し、しかもこれは騰るであらう。B^1が前より少い交換財の單位を手にしてゐるときにはこれと逆である。その際、買手の手にしてゐる交換財の單位の量が何により、そして何時變化するかは、さしあたつてまた、問はないで置く。同樣に市場のその他の所與事實は總て變らないものと假定する。

(2) 生產物の諸單位の價値評價に對して、またその結果は、買手が與へようと心を

きめる交換財の量に對して決定的なのは、彼が既に手にしてゐる、そしてしかも、經濟期として彼がその考量と評價の基礎にするところの期間に亘つて、手にしてゐる該生產物の量であらう。

(3) これまでの圖象を更に補ふために最後に次のことを假定しうる、すなはち、賣手の、その賣りに出す生產物に對する價値評價は零に等しい、すなはち、彼等は、彼等が賣りに出すところの、そして、彼等が(直接にまたは間接に)造り出したところの生產物に對して直接の使用の可能性をなんらもつてゐない。

個々の生產物に內在する有用性は彼等に對しては存しない、なぜなら、彼等の欲望は完全に充たされてしまつてゐるから。彼等にとつてはその生產物がこれまで用ゐてきたやうな語義における有用性をなんら有しないことを見るには、われわれは靴屋、または裁縫師、または麥酒釀造者のことを考へさへすればよい。それらは彼等にとつて、彼等がそれを交換しうる限りにおいてのみ意義をもつ。從つて、賣却者の主觀的價値評價はなんの役目も演じないが、とはいへ、これまで云つたこととの正當さは、それがために、なんら殆くされはしない。たゞ限界一組の定ま

り方が多少違ふだけである、そして、限界一組においては限界購買者群のみが決定的な意義をもつてくるであらう。限界賣却者群は消失する、なぜなら、總ての賣却者は生産物を一度造り出すや否や、零に等しく評價するから。

B_1	300	A_1	0
B_2	280	A_2	0
B_3	260	A_3	0
B_4	240		
B_5	220		

もとより、このことは瞬間的の市場情況に對してのみ妥當する。永らくに亘つては、賣却者が賣却しうるのは、たゞ、更に生産しうるときのみであらう。そして、それを爲しうるのは、たゞ生産物の賣却に際して、利益を獲るときのみである。だからして、生産の反復、再生産は、生産者の各にとつて一定の價格の高さと結びつけられてゐる。その限りにおいて彼も亦諸の價値評價をもつて生産行程に入つてゆく。そのもつてゆく價値評價は、もとより、現在のではない、が、恐らく次の生産期の市場情況を決定し、その限りにおいて現在にも作用するところのもので

ある。生産者がその生産物に主觀的の價値をなんら結びつけないとはいふもの、どんなふうに生産者にも價格要求の限界が存してゐるか。これは後の敍述に保留せねばならない。

三　價値の數量化の問題

われわれは、いまや、いかにして單に質的な性質を具へてゐる欲望强度が交易經濟において、總ての經濟的行爲の根柢たりうるかの問題に向はうと思ふ、その經濟的行爲たるや實に量に向けられてゐるのである。いかにして價値評價を價格に、すなはち交換財の量に固定することが可能であるか？

これまで云はれたところからして、この矛盾を克伏するには、たゞ一つの思想の環を要するにすぎない。もしわれわれが交易經濟にあるとすれば、それは、とりもなほさず、總ての經濟的行爲が交換行爲として現はれるといふことである。ところで、更に、これらの交換行爲に對しては、一般に、たゞ一つの交換財、貨幣の使用を必

的價値評價を交換財に關係せしめねばならない、さうすれば、個々の者は各その主觀的價値評價を交換財に關係せしめねばならない、それは、彼はその賣るところの生産物を交換財、貨幣の代りに遣るといふやうなふうにである、なぜなら、彼は貨幣を以つてその需める凡ゆる他の財を獲ることができるから。彼の個々の評價行爲はなほも、彼によつて、一定量の交換財が、市場にある生産物よりも或はより高く或はより低く評價されるといふ形式をもつだらう。だが、かういふやうにして、彼の純性質的な、たゞ强度性質のみを具へてゐる評價は、一の量的な表現を獲るであらう、そして、それは同一交換財に關係する他の凡ゆる評價と客觀的に比較することができるであらう。そのことは、してみれば、總ての方面において同一の交換財に關係するところの、交換行程の性質のうちに存する。例へば、B_1が一生産物、いつて見れば、一匹の馬を、それに三〇〇を與へるつもりであるといふやうに、一匹の牝牛を、一五〇を與へるつもりであるといふやうに、一着の衣服を、一〇〇を與へるつもりである、等々といふやうに、評價するとすれば、日常生活においては、略して、彼は一匹の馬を一着の衣服の三倍の高さに評價すると云ふことができる。なん

となれば、彼は一匹の馬が彼にとつて一着の衣服の三倍の意義をもつてゐるかのやうに行動する。もとより諸の評價相互のかゝる量的關係が存するわけのものではない。それは既に次のことからして存しない、すなはち、三〇〇の貨幣單位と結びつけられる評價が一〇〇の所有または交附と結びつけられゐる評價の三倍であるといふことは全然正當でないから。がしかし、日常生活では、宛も欲望の強度が量的に把捉され、購買者が與へるつもりでゐる、從つてまた、與へるところの貨幣額に表現されるかのやうに行動するが、それは正當である。

それによつて、總ての價値評價をば、宛かもそれらが量的の大いさであるかのやうに、相互に比較しうる可能性も開かれる。なぜならば、價値評價はたゞ強度たるにすぎないとはいへ、しかも、それは交易經濟にあつては量として作用しなければならない。そして、このことがなされるから、價値評價それ自身が量であるかのやうに計算される。それで、交易經濟はそれの機構によつて總ての意識內容を、少くともそれの作用が問題となる限り、量に變容する。

從つて、人間の諸の價値評價は、交易經濟にあつては、たゞ貨幣を遣らうとする心

構へに表現される限りにおいてのみ顯現する。 われわれは上で、個々の市場當事者の價値評價が種々異ることを假定し、それを表象するために數字を擧げた。 いまや、われわれはこれらの數字の意味を詳細に決定しうる、 その意味は、一定量の交換財を價格として遣らうとする心構へにある。 それだけが市場に作用する。市場にとつては、B_1が生產物に對して三〇〇を與へるつもりでゐるのは、彼がその生產物を、いつてみれば、六〇だけしか與へないB_{15}の五倍の高さに評價するためであるか、それとも、五倍だけの貨幣を所持してゐるためであるか、それとも、二〇倍だけの貨幣を所持してをり、そして、彼にとつてはその生產物はたゞ全く些々たる欲望を滿足せしめるにすぎないけれど、彼はそれに對して全く夥しい貨幣額を投じうるためであるかは、どうでもよいことである。 市場が興味をもつのは、具體的の價値評價に到るところの、これらの內部の細々しいことではなくて、たゞ數字的の表現のみである。 そして、市場は、いづれにしても、宛も、三〇〇の價格告示に到らしめるところの價値評價は、たゞの六〇にしか到らしめない價値評價の五倍だけ大きいかのやうに振舞ふ。 そして、いづれにしても、宛かも、買手が三〇〇を與へるや

うに心をきめるに到らしめるところの價値評價は總て同一であるかのやうに振舞ふ。が、實際は決してさうではないのである。かくて、交換手段の機構は、たゞに一人の個人の總ての價値評價を數量化せしめ、それと共に、それを一般的に比較しうるに到らしめるのみならず、なほまた、今日並びに將來成立する總ての價値評價を數量化せしめ、比較しうるに到らしめる。同一交換財が一般的交換財として用ゐられ、そして、その性質が變らずにある限り。

一般に承認された交換手段としての、しかもそれ自身に等質な、その個々の單位が代替することができ、ために、この交易手段の任意の分量がいづれも一つの數量によつて表現されうるところの交易手段としての貨幣の制度、かゝる性質を具へた、この貨幣の制度は、だからして、主觀的價値評價の基礎に基くところの經濟にも量的の形式を與へる。個々人の個々の價値評價は、その性質上全く比較できないものであり、强度を示し、その體驗內容からしては人間の感受力の全能力に餘るものであるが、それは、もし主觀的意識の土臺から引離して、具體的の物財との交換關係のうちに入れないならば、經濟の世界において働きあるものとなりえない。こ

の交換關係は貨幣に對して樹てるのが最も屢起るところであり、また最も容易である。が、それによつて主觀的の價値評價が客觀化される。それはもはや單に意識作用たるにすぎないものではない。もとより、なほ、どこまでも意識内容ではある。が、それ以上に、凝結し、或は單純化されて一の數字的表現となる。この變容は交易に對し、また從つて、いづれの經濟主體もが係はるところの人に對して、本質的なものである。そこで、他の人にとつては、主觀的意識内容の全滿溢はもはや少しも顯現しない。それはたゞ、客觀化された、交易に對してひとり本質的な、貨幣に變容された價値評價がそこから明白に現れてくる背景をなすにすぎない。交易經濟となつてしまつた、そして、そこでは大多數の交換行爲が間接的の交換行爲であるところの國民經濟においても、そのために、生產物と人間との間の直接の關係が必ずしも當然になくなるといふわけではない。なんとなれば、ある財を貨幣において評價することは、貨幣が更に、それで他の諸生產物を市場において買ふべき確實な見込みを呈するからこそ意味があり、また可能なのである。萬一、貨幣が普遍的交換手段でなくなつたとしたならば、よしそれが（例へば金や銀のやうに）直接の

使用價値を具へてゐる場合にすら、貨幣は直ちにもはや同じふうに評價されなくなるでもあらう。だからして、價値評價がより多く貨幣のみを目ざして、個々の具體的の客體を目ざさないと假定するなら、それは正しくない。貨幣はたゞ、具體的の客體に到達するために擇られるところの路、手段たるにすぎない。そして、余が、自分はある財A、例へば一匹の馬を一、〇〇〇マルクで賣るつもりであると云ふときには、それは馬をば、余が市場の現在の情況からいつて一、〇〇〇マルクで買ひうるであらう財と換へるつもりであるといふことの極く省略した表現であるにすぎない。だから、財相互の間の直接の關係も亦、丁度、主觀的評價と同じやうに、貨幣交易經濟においては隱くされてをり、そして、たゞ貨幣に對する購買行爲、賣却行爲のみが顯現する。

四　主觀的價値學說における勞働の地位

(a)　單純なる交易經濟における財としての勞働

主觀的價値學説の觀點からすれば、欲望を滿足せしめ、或は欲望滿足を可能にし、そして過剩に存しない(さうでなければ、經濟すること、家計を理めることは無用であらう)ところのものは總て價値をもつであらう。それだからして、勤勞給付は、有形的の物、いつてみれば、食料や衣服と同樣に、財である。そして、人間の勞働も亦財である。

それゆゑに、孤立した經濟者、ロビンソンの生産は、主觀的價値學説の觀點からすれば一の交換と解することができる。それは宛かも自然が勞働給付の交附に對して生産物を渡すが如きものである。この見解から出發してシュムペーターは交換理論を全經濟理論の基礎とした。われわれの思索過程には勞働と他の財との交換を、交易經濟において始めて假定する方がむしろ適應する、この交易經濟においては勞働時間の所有者、すなはち、働くことのできるところの者は、そのときどきに、彼が、彼の勞働力を働かし、その給付を賣らうと心をきめてゐるかどうか、そし

てまた、いかなる等價に對してか、といふ問題を提される。そのときには、それは他のなんらかの商品の賣却におけるのと原理的には同一の過程である。そして、差異は、たゞ、この商品、すなはち勞働給付の購買者は、それを欲望の充足に直接に必要とする場合も多々あるが、しかし大多數の場合においては、これに反して、生産を始めようと思ひ、そして、その製作物を更に交換することを要する、といふ點のみに存する。

しかし、それと共に、われわれは既に、發達せる交易經濟に入つてしまつた。それをこれから分析せねばならないのである。が、それに先立つて、單純なる交易經濟に對する、われわれのこれまでの假定の興味ある結果に論及したい。

(b) 主觀的價値學說における勞働價値思想の變容

われわれはこれまでの叙述において、經濟主體をば、彼等は生産物を所有してをり、そしてそれを、その必要とする他の生産物と交換しようとする、といふやうに考へてきた。この假定は、われわれが國民經濟を通して一つの横斷面を引くとき、い

づれの瞬間に對しても正しい。各の與へられた瞬間において經濟主體は財の量を所有してをり、定つた欲望をもつてゐる。けれども、もしわれわれがやゝ長い期間を見渡すならば、われわれはもはや財の所有を所與事實と見做すことはできない。むしろ、市場に存する財の交換の後には、更に、新たなる生産が市場に新たなる生産物を給しなければならないだらう。國民經濟は一つの持續的な生産行程を示してをり、そこでは、新たな生産を可能にするには、絶えず生産物の賣却を必要とする。けれども、一の生産行程に新たな生産行程が續きうるかどうかは、生産者がその生産物を交換した後に新たに生産しうるか、また、しようと思ふかどうかは、次のことに依存してゐる。生産物の交換が、彼をしてこれをなしうるやうにするときに、彼は一生産期の終了の後再び生産しうるであらう。（彼が單獨生産者であれば、生産物の交換は少くとも原料と、彼が肉體上再び働きうるだけの生活資料とを彼に給さねばならない。彼が企業者であれば交換はなほ、生産のために勞働力を再び獲るための資金をも彼の手に渡さねばならない。）彼は永くに亘つては、その生産を最高の利益を以つて終了するとき、だからして、つまり、他のいかなる生産に

おいてもそれ以上によい成果をとても獲られないやうなときにのみ、その生產を續けるであらうし、從つて、生產しようと欲するであらう。

さて、假りに生產者が總て勞働者であつたとする、各の生產における生產手段が同じ大きさであり、同じ速度で消耗されたと假定する（土地は度外視することができる）。さうすると、生產者はいづれも、永くに亘つては、結果が、すなはち、彼が生產によつて獲ることのできる交換財の量が、また從つて、彼の欲望滿足の狀態が、他の事は總て同じとして、いかなる他の生產においてもより大きくはないといふやうなときにのみ勞働するであらう（他の事は總て同じとして」といふのはこゝでは特に勞働の種類の同じであること、勞働時間の同じ長さであることを意味する）。もしも、彼が同じ骨折りを投じて他の生產においてはより有利な結果を獲ることが、すなはち、より大なる量の交換財を獲得することができたとすれば、彼は生產を續ける誘因をもたないであらう。それは經濟的原則から直接に出てくる。（その際われわれはより肥沃な、もしくは、地位のより有利なる土地の所有が剩餘を、地代を生じることを看過しう

る。)

かくして、次の結果が生じねばならないでもあらう。　生産物が總て勞働生産物であつたとすれば、總ての人がたゞ勞働だけをする者、單獨生産者であつたとすれば、その所持する生産手段が總ての生産において同じで、且、同じ生産時間の經過の間に生産のうちに入つて行くものとすれば、生産物は主觀的價値學説からしても亦窮極結果において、宛かも一般に承認された價値尺度は勞働時間であるかのやうに、交換されるであらう。　なんとなれば、生産者は、各、欲望滿足の最大量を求めるから、總ての生産者は同じ勞働時間を投じたときには同じ對價を得るであらう。すなはち、生産物はそのうちに宿つてゐる勞働時間の尺度に從つて交換されるであらう。　そこで、この簡單な前提のもとにおいては、勞働價値原則との表面的な同一性が生じる、　が、それは、直ちに明になるやうに、一の表面的な同一性にすぎない。なんとなれば、勞働價値學説は主張する、　生産物は同じ勞働時間が生産に投じられるときに、また投じられるから價値において等しいのである、と。　主觀的價値學説は云ふ、　それは正しくない、　さうではなく、生産物は、たゞ、それが(上に展開し

た意味において)同じ強度の欲望を滿足せしめるとき、或は、貨幣といふ媒介を通して見て同じく强くはたらきうるところの欲望を滿足せしめるときにのみ、價値を同じくする。しかしながら、われわれはそのディレンマに橋を架けるために附け加へることができる、もし、經濟されねばならない唯一の、そして標準的の財が人間の勞働であるとすれば、人間の勞働がまさに、欲望滿足の最大量を、各、獲ようと試みるところの勞働する者の競爭戰において投じられるのは、たゞ勞働が同じ欲望を滿足せしめる(これは常に貨幣、經濟內における、われわれの意味においてとられる)ときのみである、そして、それが事實さうあるのは、たゞ勞働が同じ量の交換財を實現しうるときにおいてのみである。かくして、勞働はそのときどきに、結果が、より不利であるやうな用途から引き去られて、結果が、より有利な用途にもつて行かれるからして、勞働の結果は、——それは勞働生產物に對して得られる交換財の量であるが、——常に等しい。もし勞働の續く長さが等しく、困難が等しければ。かくて、勞働が絕えず經濟的利害の機構によつて、そのときどきに最も報償の多い用途に、最も切實でなほ充足されてゐない欲望に向けられる、からして、かくて、總て

の種類の勞働が同一程度の切實さに達するまで投じられるからして、等しい勞働の生產物は交換關係において平衡するであらう、そして、外からは宛かも生產物がそのうちに宿つてゐる勞働時間を尺度として交換されるかのやうに見えるであらう。が、兩者の觀察の差異は手に取るやうに明かである。勞働價値論者は云ふ、等しい勞働時間の生產物が價値において等しいのは、等しい勞働時間がそのうちに宿つてゐるからである、等しい勞働時間の結晶だからである、と。效用論者は云ふ、上に擧げた前提において等しい勞働時間の生產物が價値において等しいのは、勞働が經濟的原則に從つて價値等量の、等しい交換價値の生產に用ゐられるからである。が、もしこの原則が事情を知らないからであれ、または經濟的思惟を缺いてゐるからであれ、破られるならば、そのときには、直ちに投じられた勞働時間と獲られた交換價値との間の偏差が現はれるであらう。だからして、標準的なのは、投じられた勞働時間ではなくして、生產物のうちに存する使用價値、その生產物を以つて滿足せしめうる欲望の切實さである。勞働價値學說と限界效用學說との結果における一致は、上に假定された前提においては次のことから起る、

すなはち、勞働給付――土地給付は除いて――がこゝで唯一の生産要素であること、勞働給付が相互に等質なものと假定されてゐること、そして、勞働給付をなす者の自由競爭が存することからである。そのときには、可能なる勞働の全量と可能なる生産物の全量とがまさに對應する。そして經濟的利害は、勞働時間がいづれも、限界效用原則を顧慮して、用ゐられるやうに配慮するから、各の勞働時間の生産物も亦等しい價値をもつ筈である。(より、より精密に云ひ表せば、それぞれの一勞働時間の生産物は、それぞれの同質の勞働時間の生産物と交換される筈である。われわれはこの表現を選ばねばならない、なぜなら、限界效用學說の考へ方においては、交換に際しての「等しい價値」を云爲することは全然できないから。なんとなれば、誰れでも、彼がより、より高い價値を自らに獲得しうるときにのみ交換するのである。たゞ、實際上の言葉でだけ、交換において互に出會ふ商品を等、價、物、だとするのであるが、それは交換者自身にとつては決してさうでない。)そのときには生産物の交換關係は市場においては、宛かも勞働時間が直接に價値の尺度であるかのやう、に、行はれる、しかも、それは各の勞働時間が勞働の社會的總貯藏において同一の

限界效用をもつからである。この、勞働價値學說と主觀的價値學說とが併行してゐるといふ根本思想を、事象が現實に更に近づいてくるにあたつて、どこまで支持できるかを、なほ明かにせねばならない。

五　限界效用學說における代置原則

われわれは、いまや、限界效用學說の根本思想が、これまでの論究から出てきたよりもなほ遙かに實り豐かにされることを示しうる、しかも、それは本質において該學說の根本思想の一の展開を表すところの代置原則によつてゞある。代置原則は限界效用學說に、徹頭徹尾、特有のものである。それは、ある財の、もしくは、ある生產要素の價値に對しては、その財によつて實際上滿足せしめられるやうな欲望衝動の重要さが決定的ではないといふことに存する。そのことは最初のロビンソンの例から既に出てきた。そこでは一袋の穀物の價値は、それが個別的に役立つべき效用給付には依存せずに、與へられた貯へのうちの最後の袋の穀物の所持

に結びつけられてゐる效用給付に依存してゐた。第一の袋が失はれてしまふやうなことがあれば、ロビンソンは第五の袋の用を棄てゝ、これを第一の袋として用ゐたでもあらう。彼は第一の袋を第五の袋によつて置き換へたでもあらう。ところで、この思索過程は、なほまた、ある生產要素が、例へば革、木材、鐵、石炭などのやうに、若干の生產において若干の用途に役立つ場合には、いつでも適用されるべき筈である。この生產要素の一單位の價値は、常に、その生產手段の現に存する貯へからなほ滿足しうるところの最、後、の、效用給付の重要さと切實さに依存するであらう。(常にわれわれの謂ふ意味に解された「最後の效用給付」である、だから、現に存する貯へからなほ可能なる效用給付である。この際、交易經濟內における「最後の效用給付」は、必ずしも、その貯へからその滿足を見出しうるうちで、最も重要さの少い欲望衝動ではない。さうではなくて、それは個人々々の欲望衝動を標準とし、且、個々の經濟主體の所持してゐる資金を標準として、貨幣に表現される限りにおいての「最後」のものである。)そこで、かゝる生產手段のなんらかの任意の一單位に依存するのは、たゞ最後の、限界用途だけである。このものが、生產手段の一單位が失

はれるときに、問題にされるのである。それゆゑに、ある生産要素の、また從つて、ある生産要素の一單位の價値、他の生産物との交換關係は、この生産要素の最後の單位が入つてゆくところの最後の「限界生産」の重要さ、切實さに依存するであらう。それゆゑに、各〻の生産物の評價は、してみれば、その生産物の生成に際して共働する總ての生産要素の「限界用途」に依存するであらう。

そこで、生産物の價値はほとんど常に「代置價値」である、なぜなら、生産物に特に內在する意義、生産物によつて滿足される個々別々の欲望は、ほとんどなんらその價値の基礎を供しないから。なんとなれば、より切實な欲望の滿足に役立つやうな、生産物の單位も亦、最後の、なほ充たされる欲望衝動に從つてのみ評價される。更に、同じ生産要素の他のなんらかの利用の重要さが、だからして、他の、なんらかの生産物の意義が標準的であることが屢ある、そして、生産要素の處分しうる量が(生産物の最後の單位を生産するに必要な量だけ)減じたとすれば、その生産物を作り出すことが放棄されるのである。純粹の「限界生産物」の價値だけが、それに依存する欲望滿足の意義に從つて定まる。價値のこの直接の決定は非常に稀であつ

て、極めて少數の生産物においてしか問題にならない。代置の思想は、大抵の生産要素が非常に多くの生産に用ゐられ、そして、進んでは、生産要素そのものが勞働、給付と資本投下の結果であるにおいては、一層大なる意義をもつ。さうすれば、例へば鐵の價値がその限界用途に從つて測られるばかりでなく、なほまた、例へば革の價値も、それが、萬一、その限界用途からいつて、より高かつたとすれば、鐵の價値に從つて測られるでもあらう、一單位の革の生産が、鐵のそれと似た勞働並びに資本の投下を以つて可能であるといふ前提のもとにおいては。なんとなれば、もし革の價値が、その限界用途の意義がより大なるために、より高いとすれば、勞働要素並びに資本要素は、價値が平準化してしまふまでは、これを革の生産に向けて效果があらう。だからして、鐵の限界用途は(われわれの前提のもとにおいて)ひとり鐵の價値ばかりでなく、革その他の價値をも代置原則に從つて決定するであらう。のみならず、同一の生産手段群の投下から作られうる生産物がその滿足に役立つところの凡ゆる種類の欲望は各欲望内における最後のなほ滿足される欲望衝動に、近似的に、いつて、同一の限界效用が生じるやうに滿足せしめられる。それによつ

て、生產物を作り出すのに同一の費用を投じねばならない限り、代置原則によつて限界效用の平準化ができる。かういふやうに、總ての價値決定は相互に對應してゐる、が、終局においては、限界效用原則に從つて統制されてゐる。代置原則は次の意義をもつ、それは、出發點からすれば、非常に個別的な、且、多種多樣な諸の價値評價をば、價値決定を明瞭に顯現せしめるところの生產物相互の間の交換關係において、かくて、價格構成において著しく單純化する。

六　限界效用學說における費用概念

最後に、代置思想は、費用概念を限界效用學說のうちに導き來つて、費用概念にこゝでその特殊な意味を與へるための基礎をも呈する。生產費學說は勞働價値學說の一つの異種と觀ることができる。そして、本質においては、次のやうな日常生活の經驗を表白するものである、すなはち、生產は永くに亘つては、たゞ價格において費用に對する等價が戾つてくるときにのみ可能である、なぜなら、たゞかう

して、生産の結果からのみ、同範圍の新たな生産を始めることができるから。もとより、主觀的價値學說に對しては、また從つて、それから出發する考察に對しては、生產物はそれを作るのに必要であつた費用を償はねばならないといふ命題は、なんらの妥當性をも要求することができない。なんとなれば、費用が價値の原因ではなく、生產物の價値が、いかなる費用を投じることができるかを、そのときどきに、決するのである。たゞ、他の用途における價値がより高くないときにのみ、まさに、生產することができる。しかし、それにも拘はらず費用原則は意味がないではない、といふのは、價格における費用の補償といふ命題の意義は何か？　この「費用」とは何か？　それは、生產者が諸の生產要素を手に入れるために支拂はねばならなかつた(例へば石炭、革、勞働力等に對して)價格を總括したものである。しかし、これらの生產要素の價格はそれの限界用途に從つて定まる。そして、いまや、價格は少くとも生產費に等しくなければならないといふ命題の意義は明かである、すなはち、費用は限界效用學說の價値構成原理に從つて導き出された價格であり、そして、それは諸の生產要素が他の、しかも全く一定した「他の」、すなはち「限界用途」において

實現しえたでもあらう價格である。もし、諸の生産要素がわれわれの生産において少くとも同一の價格を實現しえなかつたとすれば、それはこの限界用途に向ふでもあらう。そして、われわれは附加へることができる、反對に、自由競爭においては價格はかゝる語義における「費用價格」以上に騰ることもできない、なぜなら、もしさうだつたならば、生産要素はこの優秀なる用途に流れて行つて、生産物相互の交換關係は價格をば「費用」にまで引き下げるでもあらうから。だからして、生産費も亦これを價格表現だと解すべきならば、限界效用原則から構成することができる。そして、それは、價格が相互に立つてゐるところの聯關の仕方を明かにするものである。

七　歸屬計算問題

かくして、主觀的價値學說に從へば、個々の生産要素は市場において、その生産がそれらの生産要素に依存してゐる終局生産物、限界生産物の價値によつて決定さ

れる價格を獲る。そして實に、生産手段群、例へば勞働給付と生産された生産手段とは、(註一)それらから造り出された限界生産物の價格に適應し、且、それによつて決定されるところの價格を獲る。これらの終局生産物の價値が個々の生産要素にどういふやうに分配されるかの問題は、學説が屢、そして、熱心に取扱つたところである、そして、それは個々の生産要素の價格の決定は、同時に、個々の所得流に對する說明を含むべき筈のものであるにおいて、一層さうであつた。なんとなれば、勞働給付に對する價格は勞賃であり、そして、同樣に資本利子は資本の給付に對する價格として說明されうべき筈である。

(註一) 土地の給付はわれわれの圖式においては出てこない、終局生産物のいかなる部分も、自由競爭においてはわれわれの謂ふ意味における「限界土地」の共働に依存しないから。

こゝは、該論爭をば——それは、「歸屬計算問題」の名を以つて知られてゐるが——その全內容に亘つて開展すべき場所ではない。それの意義を適度に測ることも恐らくは可能であらう。われわれは、自由競爭の經濟においては、「最後の」土地給付はなんらの價格も獲ないと假定する。なぜならば、土地上の生産はいづれも、附加

的の資本並びに附加的の勞働を以つて擴張することができる。穀物の附加的の量の獲得に對しては總ての土地が競爭する、從つて、穀物の附加的の量の價格においては土地給付は特に報償されることがない。それはむしろ代置原則に從つて交換される、だからして、その價格は必要なる勞働並びに資本の投下に從つて測られる。（註一）地代、すなはち、土地給付の報償に對してはなんの餘地も殘らない。（上述一四二頁以下參照）從つて、われわれは土地に對するいづれもの價格、農業的土地のいづれもの價格決定を、この土地の（還元された）差額地代の價値と見なければならない。從つて、土地からの總ての所得は、投資された資本の利子を生むことを別とすれば、差額所得であり、小作料は、投下された資本の生んだ利子でない限り眼に見えるやうになつた差額地代である。從つて、地代は土地給付の價格として說明するを要しない。

（註一）より正確には次のやうに云ふべき筈のものである、最後の、なほ生產される穀物量の價値は、同一の勞働並びに資本の投下で以つて造り出されるところの「限界生產物」の價値に從つて測られる。この限界生產物そのものが穀物であれば、その「限界效用」―― 市場の機構によつて

貨幣額に變へられた——が生産手段群（資本と勞働）の價格を決定する。限界生産物が他の物、例へば鐵であれば、この物がそれを生産するのに用ゐられる生産手段群の價格を決定し、そしてそれで以つて穀物の價格を決定する。（それのみならず、生産手段群の總ての限界用途の限界效用は等しくならうとする傾向をもつてゐるのである。）しかし、いかなる場合においても、限界穀物の價格はその生産者に對して地代を實現することができない、この地代は、穀物が獲られうる總ての土地の競爭によつて除き去られるであらうから。

してみれば、限界效用學說にとつても中心問題として起るのは、なほ、資本要素と勞働給付との價格の問題のみである。この二つの問題は利子の問題を含んでゐる。

第一に論議すべきのは、終局生産物の價値がどういふやうに個々の生産要素に分配されるかといふことである。それは歸屬計算の問題であり、限界效用學說内において最も爭論の多い問題の一つである。われわれは、たゞ終局生産物の價値が、例へばパン、ランプ、衣服の價値が、大體からいつて、與へられてゐることから出發せねばならない。この價値は——限界效用において與へられた——價格に變はる。ところが、終局生産物の價格そのものは、生産手段の價格を支拂ふ役をする、

そして、全生産手段の價格は市場において形成されるが、その供給並びに需要圖象は終局生産物の、獲得されうる價格に依存する。けれども、いかやうに分配が行はれるか、終局生産物の價格が生産手段の價格によつて取り盡されてしまふか、また何時、そして、いかなる程度においてかといふことは、それによつてはまだ決定されてゐない。余はまだ、生産物のどの部分が、勞働、原料、補助材料、機械、建物その他の分前となるかを知らないのである。たとひ余がそれを知つたにしたところが、生産結果に對する物理的の參與をば經濟的の參與と價格とに變へるところの市場機構をまづ記述することなくしては、共働する、個々の生産要素の價値、また從つて、價格については何事も語りえない、であらう。

よくこの問題に對して與へられがちな、第一の答は手近かにあることもあるが、またそれだけに無效果でもある、生産要素の各が終局生産物の生成にとつて不可缺である。全部の終局生産物を手にすることがその共働に懸つてゐる。總ての原料、補助材料は、もしも勞働がそれに働かなかつたなら、無益で、且、その價値において零に等しいでもあらう。が、また反對に、勞働は、もしも自然力の助けで原料の

形を變へ、使用價値に作らなかつたなら、なんらの結果も生み出しえないであらう。(さうでなしに、他の生産手段なしに行ひうる勞働の例外——例へば荷擔ぎ人——は別とする。)かゝる種類の勞働は資本家的生産に對しては全く些々たるものである。)だからして、個々の生産要素のいづれもの價値が終局生産物の價値に等しく、從つて、合計すればその價値は終局生産物のそれよりもより大である、といふのである。しかし、それは、終局生産物が、すなはち、總ての生産要素の價値を含むといふ前提からして不可能であり、從つて、われわれはこの思想過程を棄てねばならない。が、それは、なほその理論的の正當さをもつてをるものであり、具體的の事情において——すなはち、總ての生産要素が既に手にされてゐて、終局生産物が一生産要素の加はることに懸つてゐるときには——實際上にも亦效がある。

われわれは、むしろ、個々の生産要素並びに終局生産物も任意に分割されうるといふことから出發しようと思ふ。そのときには、いつでも、發達せる交易經濟における生産者にとつて、各の生産要素の何單位を用うべきかの問題が起るであらう。彼が具體的の生産を營むとすれば、彼は、例へば勞働者をなほより以上に雇ひ入れ

るべきかどうかの問題をば、より以上の勞働者の雇入れが、生産物のいかなる增加を意味するか、いかなる買上げがこの增加から出てくるか、(註一)そして、いかなる賃銀を支拂ふ必要があるかによつて定めるであらう。他の側から云ひ表せば、もし與へられた賃銀の高さにおいて勞働者團の減少が節約された賃銀額よりも僅かな賣上げの減少を來たすときには、彼は勞働者數を引き下げるであらう。だからして、生産手段が自由に調達できる場合には、そして、嚴格に經濟的な行爲においては、個々の生産手段の單位に對する交換價値が、個々の生産手段の使用量を、增加することも減らすことも、いづれも利益を見ないといふやうに定るときに、始めて休止狀態、平衡が起るであらう。ところで、われわれは次のやうに云ふ　すなはち―ボェーム・バーウェルクが理論において行なはれしめるに至つた表現であるが――各の生産手段の價格はそれの「生産上の貢獻」に對應する、すなはち、限界要素の使用になほ依存してゐるところの生産量の價格にほかならない。われわれは自由競爭と生産者の自由なる處置力とを假定するから、生産要素の各單位はその生産上の貢獻に對應するやうに、交換されねばならないであらう。さうでなけれ

ば、價格と生産上の貢献との間に一致ができるまで、生産の構造を變へようと努めるであらう。歸屬計算理論は、この見解によれば、全然獨立な、新しい思索過程ではなくて、たゞ價格論上の根本思想を生産手段の價格構成に應用したにすぎない、そして、その遂行は更に代置原則の作用によつて行はれるのである。(代替しえない、増加しえない生産手段に關する限りでは、獨占價格の根本思想が決定的である。下の三三六頁を見よ。)

(註一) その際彼は、生産量の増加のために生産物の單位の價格が下落し、それによつて物理的の増收にも拘はらず、利得、剩余はなんら高まらないといふことはないかを顧みねばならないであらう。

しかしながら、歸屬計算論のかゝる解決の試みは利子の問題を全く特に緊切なものとして呈する。なんとなれば、利子の存在が既に、生産要素の實現する價格額がまさに終局生産物の價格よりも少いことを、しかも持續的に少いことを語るものである。個々の生産要素が(どの生産要素においてさうであるかをわれわれはまだ知らない)價格において、それの生産上の貢献よりも、より少くしか實現しない

といふことは、どうして起るか？　或は、終局生産物が價値構成過程から出てくる筈のものよりもより高い價格で賣られるのか？　その價値以上に賣られるのか？　そのことも亦一般的法則としては不可能である。だからして、われわれはいまや利子問題に取掛らねばならない。

八　利子問題

序言　利子の原因並びに性質に關する、以下の論究はこの叙述の埒を幾分越える、そして非常な躊躇を以つてやうやくに玆にそれを印刷に附するに至つたものである。

われわれの學問、とりわけ、主觀的價値並びに價格學說の建造の仕上げが在るところの發展段階は、今日早くもこの問題に關する通說について語ることを僞すことを禁じてゐる。なんとなれば、いかなる領域においても、說の岐れることと利子學說におけるやうに甚しいものはない。從來の諸利子學說に對するボエーム・バーウェルクの犀利な批評も、彼自らの勞作も、また最近の諸の試みも(そのうちで余はシュムペーターとカッセルのそれだけをば擧げたい)いづれも、そのことに變化を齎らさなかつた。從つて、論爭はなほ旺に行はれてをり、その範圍からいつて、今日の形勢を手短かに、報告的に叙述することとすらも不可能であらう。限界效用學說の土臺の上においても全然相反した利子理論の思想が抱られてゐるのである。殘餘の思想、生產力の思想、時間

要素、動態的經濟型に基づかしめること、これら總てが、そして、なほ多くの他の提言が個々の理論の根柢をなしてをり、ために入門的な叙述は、これらの、どれも激しく爭はれてゐるいろいろな出發點の一つをまづ選ばねばならないでもあらう。 利子學說は價値學說並びに價格學說を經て行かねばならないといふボェーム・バーウェルクの要求も諸の說を統一するに至らなかつた、なぜなら、この要求も亦限界效用學說內においていくつかの構造に余地を殘すから。 だからして、ある立脚點を最も目的にかなつたものとして選ぶか、それとも總べてを併列して、なるべく客觀的に叙述するか、どちらかの可能性だけしか殘らない

それに反して、こゝでは、第一に主觀的價値學說の土臺からの問題提起を、特にボェーム・バーウェルクが實に鋭く硏鑽したところに從つて、傳へ、第二に、動態的利子學說の正當な核心を取り入れ、そして、それ以上に出て利子そのものを資本家的經濟の典型的な市場狀勢から結果せしめる、一つの解決の試みを呈供しようと試みられる。 それは、いづれの經濟構造も總經濟的聯關の特殊な圖象を具へてゐるといふ、われわれの最も一般的な設問と一致する。 その際、同時に、われわれの理論を支配しつゝある、双方の價値學說、客觀的並びに主觀的價値學說をば、それに特有な內容を傷けずに可能なる限り、それの結果においても、互に近づかしめようといふ試みがなされる。その際、余はこの短かい叙述がいかなる缺陷を伴つてゐるかを意識してゐる、 それは一つの仕上げのできた利子學說を呈することはできない、 むしろさういうものが造り上げえられるでもあらうための發見的原理を與へるのである。 それは、更に進んで辿らねばならないでもあらう思索過程の端緒を示す。 しかし、こゝで把られた原理が、他の原理よりも、經濟理論がまだ確定

してゐないこと、われわれが通説から遠く距つてゐることを示すに適してゐるからして却つて、余はこの――自らよく意識してゐるやうに――やゝ疑はしい仕方で進むべきだと信じたのである。なほ矛盾が存してゐる場合に、決着したやうに詐つてはならないであらう。設計についてまだ爭論があるのに、われわれの科學の建物が既にできあがつてしまつたかのやうに見せかけてはならないであらう。これら總ての理由からして、余は該思想を更に進んで完成することも、また、手近かにあるところの、こゝでは更に進んで論議することをしない非難に對して、それを防禦することも留保して置かねばならない。

(a) 問題提起

利子は何處に發するか？ これまでの思索過程によれば、總ての生産手段の交換關係、すなはち、それの價格はその生産上の貢献に從つて定まるべき筈のものであつた、そして、それから――恐らく價格のなかに存してゐる差額地代を引き去つた後――生産要素にすつかり分配されるといふことが行はれるべき筈であつた。限界效用原則からいへば、資本の共働のために餘剩は殘りえなかつたであらう。終局生産物は丁度勞働と生産中に消耗された資本部分とだけを支拂ふこと

ができる筈のものであつた。それより少くもないが、また多くもない。さうすると、なほ、一つの特殊な所得流、生產手段の所有者に對する一つの特別の價値部分は、一體何處からきたのであらうか? いづれの生產手段群も、いづれの生產要素の結合(だからして、資本、勞働、土地)も經濟的にはたゞ潛在的の終局生產物としてのみ妥當し、それの價値はたゞ終局生產物の價値からのみ出てくるのだから、いかにして資本の所有者の手に、價値等價以上になほプラスが殘るであらうか? いかにして彼は生產からして、彼が生產手段の獲得に對して對價として出さねばならなかつたところの價格よりもより多く獲ることができるか? だからして、利子問題は、客觀的價値學說と同樣に、主觀的價値學說にも課せられる、いな、それには特に緊急に課せられる。

(b) 生產力思想の排擊

最も手近かな說明の試みは「資本の生產力」をもち出すことである。しかし、資本利子の生產力學說には滿足できない。資本の生產力――そのことは特にボェー

ム・バーウェルクに論證した――の意味するところは物理的の生産力だけである。すなはち、してみれば、資本の使用で以つて比例以上の生産物の量が獲られうるといふことだけである。すなはち、もし、われわれが資本をば、以前に給付された、形を具へるに至つた、そして以後の生産行程に役立つ勞働だと解すれば、われわれは、直接に生産に向ふ勞働と、まづ資本財、中間生産物を作り出して、それで以つて生産するところの勞働と、どちらがより大なる效果をもつかを檢することができる。中間生産が用ゐられるのは、合理的な行爲にあつては、たゞそのことが合目的である場合だけである。そして、生産手段の使用が「生産迂路を經ること」が合目的なのは、たゞ、勞働が、かういふやうにして用ゐられて、より大なる效果をもつときのみであらう。そのときには二樣のことが起るであらう。

(1) 總ての生産はできる限りこの中間生産物を挿入して營まれるであらう、その結果として、終局生産物の價値並びに價格は、いまや、より重要でない欲望もそれで滿足されうるからして、下がるであらう そして、その增加した終局生産物の示す總價値額並びに總價格額は、かゝる限界效用の下落が起らなかつたであらうと

きよりも、より少いであらう。

(2)しかし、生産增加が、一部分、價格額の增加に變つたとしたところで、この增加した價格額は生產手段結合に反射して、その生產手段結合の價値は終局生產物の高さにまで騰る筈であらう。

のみならず、代置價値の原則だけで既に剩餘は除かれるべき筈であらう。だからして、物理的生產力にも、資本の所有者が常に剩餘を實現しうるといふこととの說明はなんら存しない。

資本の生產力學說はボェーム・バーウェルクの批評的の仕事によつてまづ第一に追隨者を失つてしまつた。が、利子學說の數は減じないで、むしろ却つて增加した。そして、主觀的價値學說內においても、これまで文獻において、一般の賛同を博した利子學說は一つもない。實際、該問題は上述の理由からして主觀的價値學說にとつて特に困難である。(註一)

(註一) こゝではボェーム・バーウェルクの詳細な批評を引證すれば足りる、その、ボェーム・バーウェルクは文獻中に把られた利子の原因に關する、諸の見解が犀利な觀察に堪へえないことを

示した。「禁欲」(享樂猶豫に對する報酬)も、生產力說も、また用益說も、いづれも利子に對する滿足な說明理由ではない。勞働價値學說の利子學說が利子を勞賃における控除と解する限りにおいては(搾取學說)、それはなるほど勞働價値學說內においてはなんらの重大なる非難にも接しないが、もし勞働價値學說そのものが拒否されるならば、それは不滿足なものである。利子を現在財に對する一の打步と見るボェーム・バーウェルクの多智なる學說も、——彼の功績は充分認められはしたが——非常に多くの反對に遭つた。しかも余がより詳細にそれを說かうと試みようと思ふとしたなら、この敍述の埒を超へることになるでもあらう。シュムペーターの利子學說についてはなほ述べることがあらう。

この、理論の未完成な狀態に當面しつゝ、以下においては次のやうな路を見出さうと試みる、その路といふのは、限界效用學說の價値論的根柢に立脚しつゝ、ボェーム・バーウェルクの要求に副つて價格論の橋を渡り、そして從來の學說に爲された重要な非難の根柢を覆すべきものである。

(c) 利子——發達せる交易經濟における矛盾の徵候

もし、われわれが利子の問題に近づかうと欲するなら、われわれはいかなる事象に對してこの問題に答へねばならぬかを考量せねばならない。われわれは限界

效用學說をば、それがはたして近代の交易經濟を實際に理解せしめうるかどうかを檢するために、發達した交易經濟に、かくて、資本家的生產に適用してみねばならない。それは、限界效用學說の基礎に立つところの多くの理論家の側からは起らなかつたことである。われわれは、上で展開した意味における資本、資本家的、生產を根柢にしようと思ふ、だからして、生產手段が少數の手に集中されてをり、一方、產業に從事する者の大多數は、彼等が働くべき生產手段をなんら手にしてゐない一の生產形態を根柢にしようと思ふ。その際、なほ多くの小企業並びに單獨企業が存してゐることは大したことではない。本質的なのは、その國の生產、しかも工業的生產並びに農業的生產のいづれもの大多數が、その生產手段がその所有者だけでは動かされえない經營からできてゐるといふこと、だからして、生產の大多數は、生產手段とそれに必要な勞働力とが統括される企業において行はれるといふことである。シュムペーターも亦この事象を彼の利子說明の根柢にしてゐることを注意したい。彼の利子說明は、マルクス以來、理說において始めて、意識して、資本家的交易經濟の全聯關において、またそれからして、行はれてゐる。これに反して、限界

效用論者の大多數は該問題を遙かに抽象的に解する、彼等は、道具、生産手段の意味における資本の使用に當つて常に一の特殊な所得、利子が獲られることを假定する。これからいへば、ロビンソンですらも收穫の一部を利子に計上すべき筈のものであらう。この見解に從へば、利子は一の永久的の範疇であつて、その說明には發達した交易經濟を假定することを要しない。以下の思索過程からして、利子は、生産手段を以つてする生産の特別な收穫として、發達せる交易經濟内においても定まつた前提と結びついてゐるといふことが、暗々の裡にわかるであらう。それからして、生産は利子なくしても可能であるといふこと、そして最後に、利子は、發達せる交易經濟内において假定されねばならないところの原因から必ずしも說明されないといふことがわかるであらう。この立脚地はこれまでは、大抵、勞働價値學說の基礎からのみ把られてゐる。しかし、既に、次のことが(最後にヘラー(註一)によつて)だが、それ以前にシュムペーター(註二)によつて指摘された、すなはち、ボエーム・バーウェルクにあつても、經濟行程がそのうちに存してゐるところの社會形態が生産要素の價格構成に、そして、それと共に、分配過程に對して重大な意義を

もつてゐる。もし、自由競爭を嚴密な語義において解するとすれば、この意義は高まらざるをえない。

（註一）彼の「理論的國民經濟學の諸根本問題」六一頁において。

（註二）「社會經濟學大綱」第一卷における學說史並びに「方法論史の諸時期」、特に一二三頁。

原則的には、發達せる資本家的交易經濟の事象に制限することによつて、經濟的所與事實の決定的聯關、價値原則には、さしあたつて、なんの變化も起らない。發達せる資本家的交易經濟においても、個々の生產物は限界效用原則によつて決定される價格で賣られるであらう。いまもなほ、給付能力ある需要が生產物の販賣に對する基礎を、從つて生產に對する基礎をなすであらう。需要に、しかも貨幣において――そして、それは、とりもなほさず生產物を交換によつて手に入れる能力であるが――少くとも生產の絕えざる反覆が存しうるほどに强くなければならないところの、購買力ある需要に、なんら出會ふことのない物は永くに亙つて生產されえない。この際、購買力ある需要の高さは、われわれの旣に知つてゐるやうに、人間の欲望衝動によつてのみならず、生產の範圍と方向によつても强く影響される

ことはもとよりである。そのことは各の分業的生産に對し、そして、資本家的生産に對して、殊に、妥當する。なんとなれば、諸の生産物の生産はいづれも販賣の希望ばかりでなく、同時に他の生産物に對する欲求をも藏してゐる、なぜなら、上でいくたびも既に說明したやうに、販賣そのもののためにではなくて、經濟的には交換行爲のために生産が行はれるのであるから。資本家的交易經濟の生産は、それが總ての生産物を總ての生産者(これを總體として觀察して)の手に渡すときにのみ、永くに亘つて、續けてゆくことができる。そのことは交換を通じて起るが、その交換はまた、生産者が需要を發揮するときにのみ可能である。彼等が有效需要を發揮しうるかどうかはいかなる欲望を彼等が懷いてゐるか、そして、それが購買力ある需要として現はれるかに懸つてゐる。最後のことは、彼等自身が既にその生産物を賣り捌いてしまつたときに、だからして、彼等は彼等で既に有效需要に出會つたときにのみ可能である。かくして、生産と消費とは必然的に織り合され、且、相互に制約されてゐる。所得は生産によつて定められ、所得は更に生産を定める。われわれが既に勞働價値學說の敍述において出會つたところの、この切り離しえな

い聯關は、限界效用原則を導き入れることによつてなんの變化も受けない。諸の生產物の交換は「全然獨立に」存してゐるものでないといふことは、この原則を導き入れることによつてたゞ一層强く現はれるだけである。諸の生產物の交換は、むしろ、生產物が、具體的な欲望を前提としてゐる有效需要を見出すことに依存してゐる。生產と消費の全機構が、人間の欲望とそれの形態に定着してゐること、生產機構並びに交換機構が、生產物が、それの背後に充分に多くの購買力が控へてゐるところの具體的の欲望に出會ふであらうかどうかに依存してゐること――この全聯關は限界效用學說からして明かになる、一方、勞働價値學說は生產と共に消費は本質において既に定められたものと見る、すなはち、賣捌かれるところの、すなはち、使用されるところの物だけが生產されることをば「自明だ」として假定する。この、生產と消費とが必然的に織り合はされてゐることゝ相互に制約してゐることゝの裡に景氣論の全部が存してゐるのであるが、それを說明することは、たゞ大綱を示すべき筈のこの敍述においては、できないことである。

われわれは生產が、資本家的企業において行はれるといふ事實に立ち返へる。

終局生產物の價格において「費用」が顯現するばかりでなく、それ以上に、原則として、なほ剩餘が獲られるといふことは、いかにして起るか、また、いかにして價値法則の基礎において可能であるか？　しかも、上で明にした歸屬計算の根本法則に從へば、かゝる剩餘は全然成立しえない筈ではないか？　それが、なほそれでも、成立するといふことはいかにして起るか？　終局生產物がそれの價値以上に賣られるのか、それとも、生產要素が企業者によつてその價値以下で獲られるのか？　そのことは限界效用學說の思索過程內にあつて一體どういふことなのであらう、また、一體いかにして可能であらうか？　いかにしてわれわれは、この經濟的事象を解きうるか？　限界效用學說はそれで難破しはしないか？

(d)　利子と生產要素の價格構成

われわれは、いま一度、限界效用學說の根本思想に立ち返つてみると、それには、いかなる經濟的行爲も利益なくしては行はれるものでないといふ原理が內在してゐる。萬一、ある經濟的行爲によつてなんらの利益も獲られないとすれば、その行

爲は起らないに違ひないであらう。客觀的價値學說の假定せねばならない等價、交換は主觀的價値學說の知るところでない。さうではなくて、交換は、交換者の各にとつて、交換で貰つた生產物の價値が、遣つたものゝそれよりも、より高いといふやうに、生產物が價値において不等であるときにのみ起りうる。從つて、各の交換、行爲、各の購買行爲並びに賣却行爲はたゞ利益を以つてのみ起りうるであらう、が、この利益はそれぞれ市場情況と交換者の價値評價とに從つて、その高さを異にしうるであらう。(上の二三一頁を見よ。) 既に單純なる交換において交換者の各が、彼が遣つたよりも、彼にとつてより、高い價値を得る。そして、この見解に從へば、主觀的價値以外の價値は存しないのであるから「等しい價値」が交換されることは決してない。

ところで、われわれが企業における生產をもつとすれば、そして、その際企業といふのは、交易經濟の埒內において生產手段のやゝ大なる備へを以つて、且、他人の勞働力を以つて生產物が作り出される意味だとすれば、この企業も亦(それは經濟的には交換行爲に存する)永くに亘つては、たゞそれが企業者にとつて有利であると

きにのみ營まれるであらう。しかし、利益が彼にとつて存するのは、たゞ、彼が企業において作り出される生産物をば、彼の仕事の報償、生産手段に對する彼の費用、彼の勞働者の賃銀支拂以上に、彼に對して剩餘が實現されるやうに、賣捌きうる場合のみであらう。萬一、彼がたゞその勞働に對する報償だけを得たとすれば、彼はその企業を始めるべき誘因をなんらもたないであらう。だからして、資本家的企業がそもそも存すべきならば、また存するとすれば、それは永くに亘つてはたゞ剩餘を以つてのみ可能である。だから、價値法則が、とりもなほさず、剩餘の獲られることを要求するのである。なぜならば、さうでなければ企業を營むべきなんらの誘因も存しないであらう。他方において、總ての生産手段の價格を終局生産物から決定することは、かゝる剩餘が持續的に成立しうるといふことに對して一つの困難を呈する。こゝに一の內的矛盾が横つてゐる、そして、その內的矛盾は、限界效用の根本法則が用に堪へるものとして承認されるべきであるならば、充分に解決せねばならないものである。

かくして、われわれはまづ、資本家的企業が、そもそものものとして、存在しうる

ためには、資本家的企業において價値餘剩が獲られねばならないことを知る、同時に、かゝる價値餘剩は限界效用並びに遠位の財たる生產手段の價値決定の根本原理からは、いまのところ、說明されえないことを、われわれは知る。われわれは、剩餘が一面においては必要であり、他面においては不可能であること、そして、それは經驗上には存してゐることを知る。從つて、理論はその存在を說明すべき課題をもつ。

われわれがいまや觀察せねばならないところの、資本家的企業を基礎とする生產における第二の事實は勞働市場である。勞働市場を特質づけてゐるのは——それの、他の特殊性はこゝでは度外視するとして——勞働給付の賣却者が、少くとも永くに亘つて觀察すれば、彼等の勞働力の賣却によつてのみ必要なる生活資料を調達しうるのであるから、一つの强制狀態にあるといふことである。この狀態はたゞ資本家的經濟においてのみ、(上に用ゐた意味における、だからして、生產手段の集中された所有における)存してゐる。なんとなれば、この資本家的經濟においては、國民全體と生產手段の備へとの有機的結合がなんら確保されてゐない、い

つてみれば、國民の大多數が、ともかくも、――全く根柢のない分子は別として――農業においてある種の支へをもつてゐたところの封建時代におけるやうには。資本家的生産方法が始めて「正常な」社會的な、單に沈淪し、零落したのではない存在として、プロレタリヤを作り出した、そして、そのプロレタリヤは、經濟的にみれば、いはゞ「空中に立つてをり」そしてたゞ勞働力を絶えず賣却することによつてのみ生命を支へるための所得を手にするのである。プロレタリヤは最も簡單な生活欲望をば、たゞ、繰り返し繰り返し、更新される勞働給付によつて獲るよりほかないからして、彼にあつては、彼の欲望の充足を可能にして吳れるところの交換手段、貨幣の價値評價は極めて高い。彼は事情によつては、且、一時は、その勞働力をば、その賣上げから勞働力の再生産に必要な生活資料をとても調達することができないほどに、廉く賣ることとすらも辭しないであらう。勿論、さういふ場合は一時的にしかありえないであらう、なぜなら、もしさうでなければ勞働力の供給が減じるべき筈であらうから、けれども、この過渡期はかなり長く續きうる。だからして、勞働者がその勞働力を、それの「生産上の貢獻」以下で賣らうと心をきめるとは、主觀的

價値學說の觀點からすれば、可能であり、且、價値法則に矛盾しない。　それは、とりもなほさず、勞働者が、そのときには、各の企業における「最後の勞働者」の意味するところの、收穫に對する增加よりもより少い賃銀を受取らうと心をきめてをり、また、さう餘儀なくされるといふことである。「最後の勞働者」と同一の收穫が個々の勞働者のいづれにも歸屬せしめられねばならないから、そして、賃銀は總ての勞働者に對して等しいからして、勞働者の賃銀がかうした事情のもとでは「生產上の貢獻」に達しないといふことは、總ての勞働者に妥當する。　この市場狀勢は、企業者が利得を以つてでなければ生產せず、(註一)しかも勞働者が――よし生產上の貢獻以下、であれ――その勞働力を賣ることを餘儀なくされる場合には、常に存してゐる。　交換財に對する勞働者の高い評價と、交換財に對する企業者の、比較的により、僅な評價とからして、賃銀と生產上の貢獻との間の差異が生じるであらう。　だからして、企業者によつて支出された「費用」が生產物に對する賣上げよりもより少いといふことは、價値法則の妥當のもとに、全く可能である。　この場合には企業者は、價値法則をなんら破ることなしに、費用以上に剩餘を獲得しうるであらう。

(註一) 多くの著者にあつては、企業者は、資本が「稀少で」あるからして、利得を以つてでなければ生産しなくてもいゝのだといふ思想が大きな役目を務めてゐる。しかしながら、さういふときでも、以下のことから明かになりうるでもあらうやうに、なぜ企業者の競爭が剩餘を排除してしまはないかは、わからないであらう。資本市場をもち出すことは不充分である、それは、とりもなほさず、こゝで説いた勞働市場情況を暗示してゐるのである、それはたゞ、こゝで勞働市場の供給の側から特質づけられた事象の反面たるにすぎないのである。

かくして、難點は何處に在るのか? 明かに、費用と賣上げとの間の差が價格運動によつて平準化されるやうに、費用財の價格がそれの生産上の貢獻以下に下がらうとする傾向が妨げられるやうに、配慮する一つの力が經濟においては存してゐるといふ點にである。この力は、競爭である。もし、賃銀が、例へば、企業者の利益になる差異が生じるほどに低いとすれば、生産の擴張が有利である、それは、たゞ、勞働者に對する並びに資本財に對する、從つて、結局はまた勞働者に對する需要の上騰においてのみ可能である。總ての企業者にとつてこの擴張は有利であらう。そのことは、賃銀並びに他の費用項目を急速に高め、そして、費用と價格との間の差異を喰ひ盡してしまふ筈である。かくして、より高い利得を獲ようとする努力は

利得を排除してしまふであらう。同一の効果は、企業の生産手段の設備を改善することによつて達せられるでもあらう。このことは、同様に、より強い需要を前提とするであらうが、それによつて費用をば生産物の價格と一様にすることが行はれるであらう。剩餘に對する生產者の競爭は、それが生産、擴張、といふ路を通る限り、剩餘を流し去るところの力である。

ところで、競爭のこの力は必ずしも同じ强さで働くものではない、そして、それは制動機を藏してゐる。既にアダム・スミスは、企業者が相互にもつところの「暗默の協定」を知つてゐる。それに從つて企業者は、たゞ餘儀なくされるときにのみ賃銀を高くする。なんとなれば、賃銀を高めることはいづれもまづ企業者の個人的の利得を減じる、そして、いかなる企業者も剩餘なくしては、利得なくしては持續して彼の事業を營まないであらう、なぜなら、それに對する充分な動機を企業者がもつのは、たゞ利得を獲るときのみであるから。從つて、競爭は利得を全部流し去ることはできない。他面において、競爭そのものが、なほ原理的には利得が無くなされるといふことを藏してゐる。だからして、利得が、消滅量にまで押し下ださ

れないで、實際に生産行程の本質的な要素であり、また、いつまでもさうあるためには、いかなる具體的の事情が存せねばならないかゞ問題になるであらう。

(e) 發達せる交易經濟の總聯關における利子問題

もし、われわれが、全然、一般的な思索過程のうちに止どまつてゐるならば、われわれは圓をなして廻つてをり、なんらの結果に達することもできない。從つて、われわれは、經濟的、資本家的生産の總聯關を觀察せねばならない、生産内においていかなる條件のもとに、また、いかなる範圍において、利得を獲ることができるかを說明するためには。そこで、價値並びに價格構成の根本法則はたゞ利子が可能であることを示すだけで、それが必然的であることを示さない。

更に立入つて分析して始めて、いかなる事情のもとに利子が常に成立し、且、持續するかを示しうるのである。もし、われわれが、この分析を企てないならば、われわれはこれまでの論議を基礎として、たゞ次のことを云ひうるにすぎない、すなはち、勞働者は生産手段の所有者のところで働かねばならず、そして、この生産手段の

所有者は、もし生産が剰餘なしで終了するとすれば、働かしめるべきなんの興味をも有しない。　更にわれわれは、經濟においては總てがたゞ「利益」を以つてのみ生産されるといふことを云はうとすれば云ふこともできよう。　この「利益」は勞働者の側については、彼がそもそも働きうるときに、既に存してゐる。　その場合には、彼は、まさに、生存資料を獲得することができるのである。　これに反して、企業者にとつては、利益は、彼が剰餘を以つて終了するときに始めて存してゐるのである。　かくて、主觀的價値評價の性質からして利子の可能性は與へられてゐる、　が、それの存在と持續的な收得は、競爭が働くべき諸の條件に依存してゐる、　そして、その競爭は、また、それで利子を流し去ることを志すものである。　だからして、次の問題が提起さるべきである、　何故に、或はいかなるときに企業者は「無利得」で、生産するに至るまでに、勞働者を目がけて競爭することをしないか？、　何故に賃銀並びに生産手段の價格は、生産物の賣却價格が單に費用を實現するだけだといふやうに、騰らないか？　何故に總ての生産が永くに亘つては無利得でないか、または、いかなるときに、すなはち、いかなる條件のもとにおいて總ての生産は永くに亘つては無利

得ではないか？

もし、われわれが、問題をさういふやうに提起したとすれば、二つの副問題が生じる。

(1) 優先としての利子

(2) 資本からの持續的所得としての利子

(1) 優先としての利子。論議の出發點をなすのは、シュムペーターによつて彼の經濟的發達の理說において、その意義を特に强調されたところの一つの契機であらう。ある生產において「新たなる配合」が、しかも勞働を節約するところの、或は、より一般的にいへば、費用を節約する方法が用ゐられるに至るならば、更に、總ての、生產者がこの方法を自由にできるのではないと假定するならば、その新たなる配合を最初に取り入れるやうな企業者は彼の生產物をば以前とほとんど同じ價格で賣ることができ（すなはち、この商品の總供給が新しい生產によつて大して高められないならば、）從つて、彼の費用以上に著しい剩餘を獲るであらう。例へば水力に代へるに蒸氣動力を以つてするといつたやうな、總ての技術上の大なる變革は、從

來の生產費に對する、かうした費用節約を意味する。しかしながら、これらの大きな、眼に見える變化は唯一のものではないし、總經濟について觀察すれば、必ずしも決定的なものではない。新しい發明の應用は、そのときどきに、生產行程において新たなる配合が遂行されることを意味する。しかし、かうした新たなる配合は極めて多く存してゐる、企業の擴大が既に費用を非常に減じ、擴大された企業に、他のものに對する優先を與へることができる。その企業はそのために差額的の剩餘を獲る、そして、その剩餘の一部は生產の擴大によつて再び流し去られるが、一部は他の企業が同じやうに擴げられることができない間は、存續する。變化の可能性はいづれの事業においても非常に澤山ある、勞働のより合目的な統制、機械における小さくはあるが、重要な改良、勞働行程のより嚴密な監督、より有效な廣告など。優先に對する原因で企業者の創意にその起源を負ふものは措くとして、他の、いはゞ企業者の援けなしでその事業に附いてゐるところのものがある、例へばより有利な場所、古くから慣れた、絕えず敎育されてゐる勞働者團、昔からの關係の利用、古くから手をかけてある市場の收容力の增加、有利な信用源泉など。これ

らの剩餘は、ときとしては、他の企業が同じ利益を確保しえない場合には、非常に長く、いな、常に獲られる、そして、それは――それが一度追ひつかれるならば――新たなる配合を取り込むことによつて、繰返し、成立することができる。そこで、われわれは生産物の統一的の價格にもかゝはらず、總ての產業部門において、種々樣々な、全く平準化されることは決してない「費用」の段階をもつのである。いづれの企業においても、新たなる配合を求める諸の力が絶えず活動してゐる、費用の低下に對する、それと共に、差額利得の獲得に對する絶えざる努力が存してゐる。この絶えざる努力は、あらゆる方面に行はれるからして、これが可能なる限り、繰返し繰返し、競爭によつて打消される、が、大抵の場合、差額が競爭によつて無くされるときには既にまた新しい差額利得に對する先條件が作り出されてゐる。各人がより小なる利益を以つてよりもより大なる利益の方を以つて交換するといふ經濟的原則と競爭の强制とは各の企業をば常により目的にかなつた新たなる配合へと、そして、それと共に、差額利得の獲得へと驅り立てる。かくして、優先といふ契機は、最初に見えるよりもより多くを、シュムペーター自身がそれから說明するより

もより、多くを説明することができる。殊に、大なる利得が國民經濟において、特別に目覺ましい、破天荒な業績を要せずに、繰返し、獲られうることがわかる。シュムペーターにおける、經濟的指揮者の役目、それの英雄的な業績の高唱は、たゞ、事象の一部を見たものにすぎない。そして、われわれは優先といふ契機を大いに高唱はするが、われわれはそれだけを支へとすることはできない。

この絶えざる事業の膨脹、合理性が高まるといふ意味における生産の改良は、變化しない事業は利得を獲ることを止め、いな、損失を以つてすら働き、遂には沒落するといふ結果をもつ。こゝにおいて、投じられた費用は、もし、すなはち、それが非經濟的に、といふのは、一般普通の生産條件との權衡を失して用ゐられた場合には、價格を決定しないといふことが明かになる。例へば、今日誰かゞ手繰紡績經營を無理にも樹てようとしたとすれば、彼は投じられた賃銀、原料、石炭、工業上の場所に對する賃借料等を價格において回收して手に入れることを期待できないであらう。彼は、たゞ競爭價格だけを、だからして、市場において賣捌きを求める撚絲の最後の量に對する價値評價の換價から生じる價格だけを得るであらう。この價格で以

つて、いまや、われわれが限界事業と呼ぶことのできる一群の事業はなほ丁度彼等の費用の償還を獲るであらう。 その費用が、より少い總ての事業は差額餘剩を獲るであらうし、その費用が、より高い總ての他の事業は漸次に市場から押し出されるであらう。 ところで、全國民經濟には、そのときどきに、かゝる差額利得を獲ようとする、または、增大しやうとする努力が存してゐる、 それは生産の改良によつてゞあれ、高い差額利得をもつた生産に資本を向けることによつてゞあれ。 かういふやうにしてシュムペーターが經濟的指揮者における英雄的要素を强く高唱することによつて爲したやうに、全剩餘を差額利得と解することができよう。 しかしながら、この見解は全然充分とはいかない、 なぜなら、優先そのものについてこの概念をいかに廣く解釋したところで、云爲できないやうな工業並びに農業上の事業においても、持續的な所得流としての剩餘が正常的に獲られるのであるから。工業における正常的な狀態は、一群の「限界事業」がなんらの剩餘をも實現しない、といふことではなくて、總ての事業において「正常的な」事業においても剩餘が獲得されることが問題なのである、 そして、それの解決をわれわれが試みねばならない

のである。

なほ一つの注意だけをこの考察に附け加へたい、いかに、工業における段階構造のこの假定が優先といふ思想を、だからして、單に一時的に(自由競爭に際しては)或は持續的に(費用における繼續的な差異に際しては)獲られる差額餘剩としての利子の思想を了解せしめるかは、明瞭に見ることができる。が、それと共に、總ての企業の剩餘並びに剩餘から支拂はれる利子は「限界事業」において獲られる價格の、構成分ではなくて、結果であるだらう。さうすれば、總ての價格は、容易に見うるやうに、宛かも勞働費用によつて決定されるかのやうに解されるでもあらう。(地代も差額餘剩であるから。)なるほど總ての價格は限界效用によつて決定されるであらうが、この限界效用は限界事業における費用に對應するであらう、損のゆく企業は總て排除されるであらうから。總ての生産において、差額剩餘をもつた事業は「限界事業」の上にあるであらう。絶えざる運動は、新たなる配分を取り入れるといふこと、また一般的になつてゐない「新たなる配合」を擴めるといふことによつて、他の事業を「限界事業」とし、それにより價格を下げ、差額的剩餘を消滅せしめるが、

更に新しいものを作り出すことに向けられるであらう。自由競爭においては剩餘は、それと共に、利子は、絶えず消滅しつゝあり、そして、繰返し、新たに成立するでもあらう。

もし、われわれが、この見解にあつては價格は個々の限界事業における費用に從つて「定まる」であらうと云ふときには、このことは限界效用學說の埒內において誤解してはならない。限界效用學說に從へば、價格の決定は、むしろ、國民經濟において存してゐる生產手段、勞働力並びに土地の量は常に限界效用の觀點に從つて個々の生產領域に分配されてゐるといふやうに、理解すべきであらう。生產手段並びに以前の生產から出てきた勞働者の支拂のための、貨幣額の所有者としての企業者、土地の所有者としての地主、勞働力の所有者としての勞働者は、そのときどきに、交換において欲望滿足の最大量を獲ることができるやうな生產に向ふであらう。彼等は、たゞ、生產行程の他の處では、生產によつて、より豐かな欲望滿足(より高い貨幣額を媒介として)を交換において手に入れることができないときにのみ、その選ばれた個々の生產要素の配合に止まつてゐるであらう。ところで、よりよい

土地性質、よりよい設備とよりよい合目的な方法とをもつた生産は——後者は少くとも一時的に——この競爭のはたらきを蒙らないからして、可動的な資本量、勞働量、土地量はたゞ各の生産内で、擴張しうるやうな増加しうるやうな企業の群においてのみ競爭することができる。これらの企業において——その他の點は同一な所與事實において——生産物の、從つて生産要素の價格が定まるであらう、これらの企業が「限界生産」であらう。實際家には宛かもこれらの限界生産の費用が價格を決定するかのやうに見えるでもあらう。が、實際には、費用が價格を決定するのではなく、逆に、各の生産物に對してなほ投ぜられうる費用の高さは、個々の生産要素の種々な生産的用途の間に一の平衡が樹立された後に始めて出てくる、そして、その平衡は、市場で有效に現はれる諸の價値評價を基礎として形成されるのである。この價格、すなはち諸の限界生産の間に交換において樹立された平衡關係は、より有利に働いてゐる企業における總ての價格に對して標準となるであらう、その一方、その費用が限界事業のそれよりもより高い企業は繼續的な損失の結果として排除されるであらう。個々の企業の構造が變るとすれば、例へば改良

されるとすれば、他の企業が限界事業となり、價格はその費用の方へ引きつけられるであらう、——このことは常に限界效用原則の基礎に基き、そして、生產量が變化すれば、他の交換關係を來たすところの主觀的價値評價の構造を標準としてゞある。そこで、この見解は當然の歸結として次の提言となるであらう、すなはち、かうした企業の剩餘、利得は永くに亘つては全く無くなつてしまうべき筈である、もしも、各の經濟部門においてたゞ一種の生產のみが合理的として遂行され、新たなる配合が、機械を取り入れることによつてゞあれ、或は、新たなる方法によつてゞあれ、可能でなかつたとすれば。この見解が、その結果において修正された勞働價値學說にいかに近づくか、わけても、所與事實が同じでゐる場合に、いかに近づくかは既に上に述べたところである。下で更に把られる思想を排斥するものは、こゝで引出された歸結をなか／＼承認するわけにはいかないであらう。

かくて、われわれはなほ(2)を、總ての差額利得が競爭によつて無くなされたときにもなほ剩餘が殘らないかどうかを檢せねばならない。いかなる條件のもとに、かゝる剩餘が獲得されうるかを確立し、そして、それが獲得されるところの根據を

ば、優先をもち出したのではなほまだすつかり盡してはゐない限り、檢しなければならない。

(2) 資本から、の、持續的、所得、として、の、利子。資本家的生産において、優先といふ契機は別として、費用以上の剩餘が實現されうるといふことは、企業者が在るところの特別な市場狀勢に基いてゐる。基礎は、生産手段が社會において不平等に分配されてゐるといふ事實である。動態的生産行程において、企業者は、各、新たなる配合を追ふ。そのために個々の企業は擴大され、他のものは消滅する。かういふやうにして、利得に對する努力の歸結として集中過程が起る、そして、それは生産手段の不平等な分配を平準化さずに、却つて反對に、それを、繰返し、新たに作り出し、高めてゆく。この、生産手段の不平等な分配は、既に上で確立したやうに、勞働市場においても特に作用を發揮する。しかし、われわれは、われわれのいふ意味における「資本家的生産」においてこの市場關係がどんなふうに働くかを、細かに檢しなければならない。

問題をばなるべく見渡しのつくやうにするために、われわれは、社會において次

の階級だけしか存してゐない、と考へる。

1 企業者＝資本家、すなはち、工業並びに農業における生産手段の所有者。生産手段の所有者が生産するのは、たゞ彼等が生産における利益を求めるからだけである。彼等は剰餘を以つて生産しようと欲する。從つて、彼等は勞働と生産手段とをできる限り廉く買はうと試みる、競爭のために、彼等が欲したよりも以上に呈供することを餘儀なくされることは屢あるけれども。われわれの觀察にとつては、生産の組織者、企業者が自ら生産手段を所有してゐるか、或は、これを他の人から、單なる所有者から借りるかは決定的な意義をもたない。が、たゞ第二の場合においてのみ、利子は明瞭に區分された貨幣額として企業の剰餘から分離する。

2 勞働者、それは勞働力を賣らねばならないが、それぞれ市場情況に從つて、單に生活資料だけで滿足するやうに餘儀なくされる。

3 土地所有者、それはたゞ差額地代だけを收めて消費する。彼等は差額地代を手にしてゐるが、その差額地代は、一つの經濟領域内における土地は增加しえないからして、競爭によつて流し去ることのできないものである。

4 不生産者(役人、利子衣食者等)、それは1と3の階級の所得からの租税によつて維持される。(かくて、われわれは、勞働者はその賃銀を全部、控除なしに、生活資料に換へると假定する。)

總ての市場には自由競爭が支配してゐるとする、が、その自由競爭は、勞働者はたゞ生産手段の所有者のところでのみ働くことができるといふこと、生産手段の所有者は更に、剩餘なしで働く場合には、働くことになんの興味ももたないし、或は、もし彼が單なる「資本家」であれば、働かせることになんの興味ももたないといふことと、によつてその特別の刻印をもつてゐるものである。しかし、なぜ企業者相互の間の競爭が剩餘を排除し、企業者が剩餘なしで働くことを强制されるやうな具合に作用をしないのか?

もし、われわれが、いかなる前提のもとに利子は持續的に成立するかを問ひ、且、利子は自由競爭において、そして、他の點は同じ儘でゐる關係において、ある平衡の達せられた後には排除されるべき筈であるといふやうに、問題を提起するとすれば、かくして價格構成はかゝる事情のもとにおいては利子に對してなんらの餘地を

も殘さないとすれば、その排除を或は持續的にか、或は繰返し、一時的に、從つてまた、永くに亘つて妨げるところの特殊な事情が存してゐなければならない。これらの事情が「非經濟的」のもの、だからして、內經濟的な價値並びに價格構成過程と經濟的循環から生じないところのもので、ありうることはありえよう。が、經濟理論にとつては該問題は、たゞ、これらの事情が經濟的のものに、かくて、市場機構に働きかけ、その作用が經濟的の運動の合成として把捉されるときにのみ、解きえられるやうになつたのである。もし、假りに、ある所得流、例へば利子が、ある理論によつて、それは年々物理的の力を振ふことによつて奪ひ取られるのであるといふやうに說明されたとしたならば、それはなんらの經濟的說明でもなからう。かうした事態においては欲望財の生產並びに消費の總體はたゞ經濟的理說によつたのみでは構成されえないであらう。これに反して、われわれはなほ經濟的の領域に止まつてゐるであらう、もし、われわれが「外經濟的の」すなはち、根源的には單に市場機構からのみ出てくるのではない事實をば所與事實として事象の中へ取り入れて、ただ市場機構だけにおける、特に經濟過程の自動制における、この所與事實の作用を

討究するならば。そのときには、論證にとつてたゞ次のことだけが問題になる1この外經濟的の事實に訴へることは止むをえないかどうか、2この外經濟的の事實が充分な蓋然性を以つて存在するものと假定されうるかどうか、3この事實の存在、それによつて與へられた所與事實の變化が實際に利子にまで導き到るかどうか。

第一問題は、いまや、われわれは既に、上でなされた制限(優先の思想)を附して、肯定することができる。第二問題並びに第三問の肯定は次の論究からして始めて生ずべき筈のものである。

極めて簡單になほ注意したいのは、シュムペターの體系における靜態經濟を始めて動態經濟にし、それによつて利子を可能にする企業者は、同樣に、われわれの意味における外經濟的の事實に屬するといふことである。それは、われわれが人間を始めからして動態的なもの、すなはち、欲望滿足に對する、從つて、その貨幣收得の増大に對する傾向を具へたものと解するときにのみ「外經濟的の事實」新しい所與事實たることを止めるであらう。この場合には經濟體系を靜態的のものと解す

ることは全然できないであらう。が、この問題をこゝで更に進んで究めることはできない。

われわれがいまや中心に押し遣らうとする、この意味における外經濟的の事實は人口の増加、しかも勞働者人口の膨張である。これは膨張することもありうれば、靜止することもありうる。人口の減少する場合はこゝでは檢しない。

1 増大しゆく人口。

a 人口並びに、それと共に、勞働を求める者の數も亦増大する。それが現在の生産期において、例へば一〇〇だとすれば、翌期には一〇五、翌々期には一一〇、第三期には一一五等である。しかし、勞働者の數の膨脹することは、生産手段も亦膨張せねばならないことを意味する。それは、新たな工場が建てられねばならないこと以前よりもより多くの原料が加工されねばならぬことを意味する。だからして、それは生産上の裝置の擴張を意味する、實に、住居のための建物の建築を含んだ勞働者のための生活資料を作り出すやうな總ての企業の擴張が行はれなければならないから。しかし、そのことは、勿論、生産の一部分が始めから、附加的の生産手

段を作ることに向けられるときにのみ可能である。ところで、生産の一部分が附、加的、の生産手段を作ることに向けられるならば、そのことは既に剰餘を作ることと同意義である。(註一) 新なる、附加的に作り出された生産手段は、とりもなほさず、その國民經濟において生産されたところの、費用以上の(消費されない)剰餘を表すところの生産物部分の自然的形態たるにすぎない。 しかしながら、經濟的には、市、場、技、術、的、には、附加的の生産手段のこの生産は勞働市場における次のやうな狀勢によつて可能にされる、 それは、勞働者に、總生産物(消耗された生産手段、原料、補助材料の回收並びに企業者と役人によつて消費された所得を控除した)を買戻すことを彼等に許さないやうな賃銀を受取ることを強ひる狀勢である。 なぜならば、もし假りに彼等が買戻しうるとしたならば、附加的の生産手段の生産は可能でなくて、生産は、繰返し繰返し、同一の段階において行はれねばならないであらう。 がさうすれば、前提に從つて起るところの勞働する者の數の増大は直に賃銀に對する壓迫と變るであらう、 そして、それは剰餘―― これは、とりもなほさず、附加的の生産手段である―― を成立せしめるのである。(註二)

（註一）なんとなれば、もし、全然企業的な生產をもつた一つの國民經濟において、現存の生產手段以上に、附加的の生產手段が造り出されるとすれば、それは市場に對して造り出されるのである。しかし、それは、附加的のものとして、たゞ企業において利得が獲られるときにのみ賣捌きうる。なんとなれば、剩餘を以つてのみ、利得を以つてのみ、實に、附加的の生產手段は買ふことができるのである。（その際、企業者賃銀の費消が前提されてゐる。）

（註二）その際、企業者階級によつてはたゞ彼等の勞働給付に對する報償だけが消費され、剩餘は消費されないといふことが假定されてゐる。その假定は現實を離れたものではない。

もしも、假りに、人口が增大するときに、なんらの剩餘も、なんらの利得も、從つて利子がそこから掬み取られうべき、なんらの貯水槽も作り出されないとしたならば、そのことは、どうしても、附加的の生產手段はなんら作り出すことができないといふ歸結になるでもあらう。そこで、そのことは、生活標準が絕えず低下することを假定するのと同意義であらう。かゝる假定は、社會的勞働の生產力がまだ絕對的の極限に到達してをらない限り、支持しえないものであり、のみならず現實から離れたものでもある。

しかしながら、もしも、費用財の總體がその價格において、終局生產物の價格より

もより少くしか實現しないといふやうに生産が行はれるとすれば、この差は勞働給付の價格構成から生じなければならない。

なんとなれば、生産手段が生産物たることは消費財と同様である。後者がそれの限界效用によつて定められる價格で賣られるとすれば、生産手段はそれの生産上の貢献よりもより少い價格で賣捌かれると假定することはできない。もし、さうであつたら、誰が、一體、生産手段を生産しようと欲するであらう。競爭は、生産手段も亦、上に用ゐられた意味における「それの價値で」賣られるやうに配慮するものである。――從つて、われわれは次のやうに假定せねばならない、すなはち、生産手段の價格は「正當なる」、最大量的の生産にあつては一の通過項目であり、それの生産においては終局生産物の生産におけると同様に利得を獲ることができるのである。從つて、生産手段の生産上の貢献と價格との間の差が、買手を利益するやうに市場狀勢から絶えず、獲得されうるところの唯一の場所は勞働市場である。(註二)

(註二) 勞働市場は、なほまた、――注意をしておきたいが――購買者と賣却者とが嚴格に階級に從つて區別されてゐるところの唯一の市場である。この階級による分離は――いくたびか擧

げた理由からして――市場地位に變る。かゝる市場當事者の階級による分離は生産手段市場の知らざるところである。

人口が膨脹してゆくときには、生活資料と勞働地位とに對する勞働者の競爭は利潤を消し去らうとする企業者相互の競爭よりも常に、必然的に、より強い。なんとなれば、もし利得が競爭のために全くなくなるとしたならば(しかも生産物を廉くすることによつて)手にしうる生活資料はなるほど始めは増大するだらうが、後には變らずにをり、實物賃銀は、人口が膨脹してゆくときには低下するべき筈であらう。けれども、賃銀に對する壓迫がはたらく瞬間において、既に、利得が成立し、購買力が企業者の手に落ち、生産手段の生産が始まるでもあらう。だから、資本家的生産において價値における剩餘を作り出すことに作用を及ぼす力は常に(膨脹してゆく人口において)はたらいてゐる。かくして、人口の膨脹してゆく、資本家的國民經濟における總狀勢は次の如きものである、すなはち、企業者が、競爭者よりも高い値をつけるに際しては、終局まで、すなはち、利潤を排除するまで、ゆくものではない。勞働者のより強い競爭が企業者のところに繰返し、利潤を流し寄せるから

――彼が、勞働地位に對する勞働者の競爭を弱めるべきなんらの誘因ももたないといふことは別として。

そこで、生活資料に對する競爭は常に同時に勞働地位に對する競爭であるからして、それは賃銀に對する壓迫であり、人口が膨脹してゆくときには、利得に對する企業者の競爭よりも益より強くなるであらう。なんとなれば、――もう一度、端的にいへば――この企業者の競爭は利益が弱くなるにつれて弱まつてゆく、勞働者の競爭は一人當りの賃銀が少くなるにつれて高まつてゆく。

だからして、剩餘を可能ならしめるが如き賃銀の構成に、どうあつても、導くところの動力が、人口運動の中に存してゐる。この剩餘は――企業者自身による、または不生產者による消費の起らない限り、――生產手段に變るべき筈であらう。それは他の形態を取ることをえない。(註一、二)

(註一) その際、われわれは、觀察に入れらるべき生產期內にあつては個々の生產要素の間の價値關係はなんら本質的の變動を蒙つてゐないと假定する。萬一、さうであるとしたならば、問題は複雜になる、が、根本的に變つてくるといふことはない。しかし、そのことに對しては、こゝで

は深く立入ることができない。貨幣價値の變化の結果に對しても、同樣に、できないが、その貨幣價値の變化たるや資本家的生產に對して極めて重大な意義をもつものである、殊に、貨幣價値は歷史的には、動搖は別として、低落の傾向をもつてゐるのである。

（註二）利子に關することの論議は、思想の全構造からして既に强制的に出てきたところであるが、他の多くの利子學說とは違つた設問から出發する。すなはち、利子の「原因」は問題とするのではない、なんとなれば、原因は、主觀的價値學說の土臺においては擧示できない。利子をばたゞ國民經濟の總聯關からのみ、種々なる相における總行程の必、然、的、な要素として呈示することができる。だから、この說述はむしろ、いかにして資本家的國民經濟は可能であるか？いかなる意味においてか？いつ利子がそれにおいて必然的であるか？の問題への答である。

2 停止してゐる人口においては事態はこれを解明するにより困難である。

われわれは、かかる國民經濟において利得がどこででもなんらの企業においても獲られないで、たゞ、土地における差額地代のみが獲られ、それは土地所有者によつて費消されるといふ場合を想定する。だからして、企業者相互の競爭の壓迫は非常に强くて、賃銀は、生產手段、原料等に對する支出と共に、全部の生產物量の價格を取り盡してしまふほどなのである。そのときは、生產は年々同一の軌道を通り、そして、そのときどきに、各の生產期においては勞働者、「不生產者」に對する消費手段

と地代に對する等價物のほかには、單にその生産期の經過中に消耗されてしまつた生産手段だけが再生産される·でもあらう。原理的には、そのときには、企業の生産技術上の構造における變化も可能でない。しかし、もしそれらの變化が起るならば、――例へば、生産手段のよりよい統制として、だからして、附加的の生産手段を必要とすることなしに、すなはち、工夫として――全事象が變化する。すなはち、いまや生産物量は勞働給付は變らずにゐるにも拘らず、ある生産においては、高められる。これらの變化は總ての經濟的の量に反映する、そして、この變革に際して若干の可能性が存してゐる。これを攻究する前に、もう一度明白にこの思索過程の前提に注意を乞ひたい。この、こゝで考へられた、發達せる交易經濟においては、われわれはまだ信用を知らない。だからして、生産は、生産者が前の、生産からこのための資金をもつてゐる限り、行はれる。生産者はその資金を、例へば、蓄財の形において、自由に處分しうる。が、事例をなほ簡單にするために、われわれは、生産は同一の資金を以つて行はれ、そして、變化は、たゞ、元通りの費用で生産物量を増大せしめうるところの工夫においてのみ存してゐると假定する。この最も簡單な場合

においてもなほ若干の可能性が存してゐる。

a企業者は彼によつて遂行された、その生産において變化の結果として、生産物量を増大することができるでもあらう。けれど、彼はそれをしないで、以前と同じ量の生産物を作り出す。そのときには、生産物の價格は同じ儘であり、彼はより少い費用の結果として差額利得を獲ることができる。この場合には、彼は勞働者を解傭するであらう。賃銀は低下せねばならない、そして、しかも總ての生産において。さうなると複雑な過程が起るであらう。まづ、賃銀が低下してゆく結果として總ての生産における利得の成立、である。勞働者がいまやその勞働に對する報償として受け取ることのできないものが、利得として企業者の手に落ちる。(註二この利得が悉く消費に變へられるならば、より少い賃銀をもつた一つの新しい靜止的な状態が現出する。(その状態は勞働市場における情況がなんらかの理由から變るまでは存續する。)もし利得が全部または一部分蓄積されるならば、一つの新しい生産が準備される、が、それに對しては、最初は、販路が缺けてゐるやうに見える。それと共に、さうすると、該過程は、更に下で攻究される一つの運動のうちに

入り込んでゆく。

(註一) こゝでは利得は一つの動態の遠作用として、勞働市場情況の變化によつて成立したことを注意すべきである。

b 以前よりもより少い費用を以つて生産することのできる當該企業者は、少くとも、以前と同一の生産裝置を以つて更に働き、そこで、市場における總生産物量を增大させる。(註二)　更に、晩かれ早かれ、他の生産者も亦その遣り方を用ゐると假定すれば、市場における生産物の總量は著しく增大する。　いかなることが、いまや、起るか？　それは、とりわけ、主觀的價値評價の構造に依存する。

(註二) 嚴格にいふと、そのことは、純粹に靜態的な經濟においては可能でない、　なんとなれば、これにあつては企業者は增大された生産のために必要な、より大なる量の原料を買ふべき資金を手にしえないであらう、　そして、信用についてはこゝではなほ除外しなければならない。　この契機(それは靜態における發展の經濟的理論に對して重大な困難を呈するものである)についてはこゝではこれ以上に深く立ち入らないことゝする。

α まづ次のやうに假定しよう、　すなはち、主觀的價値評價は、それが、貨幣額に變へられる限り、手にしうる生産物の量と丁度反比例をなすといふやうな構造をも

つとする。すなはち、さうすると、各の消費者は價格が半分に下落すれば生産物の二倍の量を獲得するであらう、等々と。

もし、例へば、實際上觀察に入つてくる限界内において、價格が一〇であるとしたならば消費者はAを五單位手に入れるとする、　五の價格では一〇單位を、二・五の價格では二〇單位を、同樣に一二・五の價格では四單位等々を手に入れるとする。すなはち、反對にいへば、生産の量が二倍に増大すれば、價格は半分に低下する、等々。價値評價のこの構造にあつては、供給された生産物の總量が増大するよりもより急速に費用が低下するやうな變化だけが生産において可能である。（さうでなかつたら、變化に對するいづれもの誘因も缺けてゐる）例へば、費用が從來の費用の二五％に低下し、一方、生産物量が同時に倍になれば、この倍になつた生産物量の價格額は以前と同じ大きさであらう、　そして、價格額の五〇％の額の剩餘が企業者のところへ流れてゆく。　例へば

		費用額	價格額	剩餘
從來の生産	一〇〇	一〇〇	一〇〇	〇

新たなる生産		二〇〇	五〇	一〇〇	五〇
同	同	二〇〇	八〇	一〇〇	二〇
同	同	二〇〇	一〇〇	一〇〇	〇

この前提のもとにおいては、新なる生産方法を取り入れると、仕事をしてゐる勞働者の數は低下するであらう、終局生産においてゞあれ、または先生産においてゞあれ。さうすれば、aの條下における同一の事例である。

β市場はA生産物の膨張量をば、比較上遞減がより少い價格で受取る、すなはち、價値評價の構造は、いってみれば、價格は、一〇〇の供給では、一〇に定まり――價格額一、〇〇〇、これに反して、二〇〇の供給では六――價格額一、二〇〇、といった具合である。だからして、費用節約が生産量増大をなほまだ追越さないところの諸の生産進歩が可能である。しかし、いまや、この改善された生産の獲る價格額が増大したのであるから、他の諸の生産は需要を奪はれる。しかし、その代りにAの生産者が、いまや、總ての他の生産物のより大なる量をば手にしうるといふ限りにおいて、再び需要が、他の諸の生産の手に落ちる。Aの生産者の需要が、丁度、以前の消

費者(それはいまやAをより多く消費する)が欲求したと同一の生產物に向ふならば、擾亂は起らなくてすむ。しかし、大抵の場合、かうではないからして、生產物BC……Mについては以前よりもより少い量が、生產物N……Zについては以前よりもより多くの量が需要されるだらう。もし、BC……Mが享樂財であり、NO……Zが生產手段であるとすれば、この推移は、Aの生產者がその利得をば全部費消しないで、少くとも一部分を蓄積しようとするときに起るであらう。さうすれば、B……Mの領域には、まづ、需要の減退、價格に對する壓迫が起り、N……Zの領域には反對のことが起る。B……Mにおいては價格が、生產の制限されるほどには低下しないときに、利得が成立しうる、そのことは技術上の狀態、欲望の構造、蓄積率に依存する。しかし、また、このB……Mの領域において費用と價格額とが以前の通り一致することがありうる、最後に、損失が成立することもありうる、價格額が費用よりもより急速に低下するときがその場合である。

これに反して、N……Zの領域の生產物は直ちに增大しゆく需要に出會ふであらう。從つて、利得が成立するに相違ない。そこで生產進步は、遠作用として、普通

には、一面にはより、以上の利得、剰餘を、他面には損失を出す――靜態的性質の國民經濟においてすらも――といふことがわかる。

これらの變化が平衡するに至るならば、――投資領域に對する資本の競爭は全然度外視するとして――蓄積は、增大されたる生産に、かくて、また勞働力に對する增大されたる需要に突進するであらう、そして、そのために、社會生産物に對する勞働の取り前が、全部では、再び增大し、利得は低減する、いな、原理的には、無くなることもありうる。そして、賃銀に對する一時的の壓迫において、生産をば、その釣合上の分配において變化させ、利得を作り出す――單に一領域においてゞなくて、いくつかの領域において――ためには、且、生産力を增大させて全人口の消費を高めるためには、それから更に生産における擾亂、生産進歩が起らねばならない。（この點に、上でaの條下で分析し始められた場合が存してゐる。）

從つて、その人口の膨脹しないところの、封鎖的な資本家的國民經濟においては、營利努力、生産方法の改善における一時的の利得が、生産力の發達の唯一の槓杆である。しかし、これにあつても總ての經濟的所與事實の全面的の聯關は、各の「進步」

が動態的經濟の一の全時期を開くやうに配慮する。けれど、こゝでは、發達せる交易經濟において利得をば、上で示したやうに、自動的に常に成立せしめるところの人口增加が缺けてゐる。(註一)

(註一) 支拂手段の增加(だからして、歴史的に、例へば、貴金屬量の增大)がどのくらゐまで人口の增加と同じ作用をもつかは、この敍述の埒内においてはより以上論議できない。しかし、この現象の分析は一方にはこゝで述べられた企業者の役目を、他方には利子の原因と性質とを强めるに至るものである。

そこで、停止せる人口(註二)をもつた資本家的生産は一つの矛盾に充ちた圖象を示す。それは剩餘を實現しうるためには絶えず擴張されねばならない、そして、各の擴張は更に勞働市場に對する增大する需要によつて賃銀を增大し、ために、剩餘は再び流し去られる。そこに一つの矛盾が存してゐる、その矛盾たるやわれわれが既に上で論理的矛盾として確立したものであり、そして、人口膨脹のない資本家的の、すなはち、動態的の生産においては、利得と無利得との間の動搖として實現されるものであらうものである。企業者が生産を急速に擴張すれば、勞働者の實物賃銀は急速に增大する。が、生産の擴張そのものは、人口が同じ儘であるとき

には、いま描いたやうな困難にぶつかる。 企業が同一の狀態に固定してゐれば、賃銀は同じ儘にとゞまる。 いづれにしても、こゝでは人口運動からして、資本の蓄積に對する强制的な理由が、なほまた、持續的な利得流の成立に導く市場情況も、絶えず再生產されてはゐない。 この極めて簡單な圖象は、勿論、國際的の結合、移民の出入、商品と資本との輸出入によつて、繰返し、擾される。(註二)

(註一) この際、人口が、歷史的の發展において、上の六八頁及び八一頁において確立した表徵を具へてゐる「資本家的の」すなはち、われわれの意味における「經濟人」によつて把持された、發達せる交易經濟においては、決して停止したことはないことを强調しておきたい。 その國においては人口が同じ儘にとゞまつてゐる筈のときですら、他の人口の增大する國々との經濟的結合は、宛かも自國が人口において膨脹するのと丁度同じ働きをする。

(註二) 動態的の經濟を、それと共に、差額としての利子の成立を可能ならしめる諸の事情のうちに欲望の動態的性質をも擧げることができよう。 こゝでは、たゞ、なぜこの事情になんら特殊の意義が賦與されないかを簡單に基礎づけておくことゝする。 假りに、人口は同じ儘でをり、これに反して、欲望構成は動態的だとしよう。 さうすれば、そのことは次のことを意味する。(a)勞働者においては、より强い欲望滿足に對する單なる希望だけ、 そして、それは諸の所與事實殊に供給される勞働の量になんらの變化もない限り、效果なしで止まつてゐる。 (b)土地所有、

者、並びに不生産者の所得は依存的の所得である。そして、たとひ彼等の欲望が主觀的にはより強くならうとも、それは市場闘象の變化をなんら惹き起しえないであらう。欲望の傾向における變化は意義がないではなからう。が、たゞ所與事實を變て、他の(根元的な生産要素の代置性において)容易に樹立しうる平衡狀態を基礎づけるだけのことであらう。(c)企業者にあつては、欲望の増大は、増大せる剰餘に對する努力に變るであらう。そして、それはたゞ新たなる配合を取り入れることによつてのみ獲られうるであらう。從つて、増大する欲望といふこの契機は、客觀的事象の、既に前に顧慮されてゐないやうな變化をなんら伴はない。

かくて、資本家的經濟の圖象はいかに多種多様であらうとも、人口の増加しゆく經濟にあつては、そして、今日、資本家的國民經濟の成立以來は、國際的交互作用のために、人口の停止してゐる經濟にあつても、企業者に對する剰餘の獲られるやうな市場狀勢が常に作り出される。その際、價値法則並びに價格法則におけるそれの作用は傷けられはしない。膨脹しゆく人口においては、ときどきは、繰返し目覺ましい、そして、全然缺けることの決してない勞働市場の溢剰こそ、費用と賣上げとの間の隔りを齎すものである、——ときにはより大なる隔りであることもあれば、ときにはより小なる隔りであることもある、が、大部分の企業においては全然排除

し去ることは決してできないものである。それに際して、利潤の排除に對する傾向は常に存してゐる、が、それは、上に擧げた諸の理由からして、膨脹しゆく人口においては、たかだか、一時的にしかおいては決して遂行されないし、停止せる人口においては、たかだか、一時的にしか遂行されえない。勿論、實際上は、價格運動から生じる、社會生産物の分配における推移はそう直截に明白ではない。なんとなれば、所得の總ての變化は反對運動を起す。それは平衡狀態が打ち樹てられるまで、しばらくの間續く、けれど、その平衡狀態たるや決して眞の平衡狀態ではない、なぜなら、その間に更に總ての所與事實が變つてしまつたのだから。しかし、反對運動を更に喚び起すところの推轉過程よりもより重要なのは、表面的な觀察にも好景氣と不景氣との交錯として表はれるところの、資本家的國民經濟に特有な、價格運動の線である。この「經濟生活の波動運動」——その過程をシュムペーターは巧にもさう名づけた——を説明することは景氣論の對象である。こゝで資本家的交易經濟のうちにおけるこの過程に論及するのは、たゞ、該過程が、ときとして、こゝに説明した價格構成過程の最も一般的な聯關の働きを弱め、ときとしては、またそれを全く特殊な程度において高め

るからである。しかし、景氣論にとつても亦、利子は資本家的交易經濟において常に必然的に反覆する市場狀勢から出てくるといふ、われわれの假定から、極めて重要なる歸結が生じる。

利潤は、この見解に從へば、市場、殊に勞働市場とその機構から說明さるべきである。しかし、利潤は勞賃の控除ではない――なぜならば、勞賃として見らるべきは現實に、支拂はれるところのものである。それから外れた、勞働の價値或は價格は存しない。たゞ、勞働の價値をば、利得が成立するやうに決定する事情があり、また、利得が排除されるやうにそれを決定する他の事情が存するだけである。

ところで、剩餘そのものは、日常生活の實際にあたつては、投下された資本に對して計算されて、賃銀支拂の高さや取引量に對して計算されない。ある生產を創め、或は繼續する企業者は彼の利益をば剩餘の價値と資本の價値との割合で測る。その結果として、(この觀點からいつて)高い剩餘をもつた生產は特別に探し求められ、(この觀點からいつて)低い剩餘をもつた他の生產は棄てられ、または制限されるであらう。かういふやうに、利潤率の平準化の意味における競爭の原則は働らく

のである、が、その利潤率の平準化たるや、同一産業内における利潤の水準化の達せられないと同様に、達せられるものでない。この平準過程は理論的にはなんらの難點をもなさない。いづれにしても、勞働價値學說におけるよりも遙かに僅少な難點である、なんとなれば限界效用學說に從へば(個々の、或は總生產物としての)生產物に、いはゞ「內在價値」として固着するといふやうな價値はなんら存しない。窮極においては生產物の量と需要する人の價値評價の等級(それらの人が與へようと思つてゐる交換手段額に表現された)に從つて定まるところの、生產物相互の間の交換比例だけが存してゐる。いかにこゝにおいて該思索過程が勞働價値學說のそれと、――全然同一であるといふことはないが、――類似した行き方をするかは、明瞭に見ることができる。特に、こゝには餘剩價値量(註二)といふ概念が缺けてゐる、その結果として、「價値」が一の生產から他の生產へ移されるといふ、そして、競爭は利得の額を減じるのでは決してなく、たゞ別な仕方で分配しうるのみであるといふ思想もまた缺けてゐる。そのことは限界效用學說からすれば明かに正當でない、そして、その點においても限界效用學說は勞働價値學說よりも現實に

より近く立つてゐる。

（註一）こゝにおいて剩餘は、ときとしては——原則としてはそのことは不可能である——生産手段の交換價値とそれの「生産上の貢獻」の交換價値との間の隔りから發しうる。そのことは、殊に、新たなる配合のお蔭であるやうな、利得の部分においてさうである。

それを以つて、限界效用學説の根本思想による説明の圏は閉ぢられた。價格は限界效用の原理に從つて説明され、且、價格が「生産要素」へ分配されることも亦同一の原則に從つて行はれる。しかし、更には、それと共に、所得並びに同樣に生産と消費との絶えざる交錯が同一の根本思想に歸せしめられた。

九　限界效用學説による生産と分配

だからして、限界效用學説によつても生産は分配の原則を藏してゐる。限界效用學説も亦、資本家的交易經濟において一つの自動制を呈示する、そして、その自動制の機構が、いかにしてこの資本家的交易經濟が絶えず反覆するものとして可

能であるかを説明する。もとより、經濟生活の全體性がそこから概觀さるべき視點はこゝでは多少違つたものである、勞働價値學説は生産者から出發するのである。分業的交易經濟の生産者は、原理的にいへば、ある商品の賣却者である、それが企業家であらうと、または勞働者であらうと。總ての者がある商品を賣却する。（彼等が、役人のやうに、派生的な所得を受け取らないかぎり。）しかし、彼等は賣却してしまふや否や、また更に購買する、それが消費品であらうと、または生産手段であらうと。貨幣はそれ自體のために獲得され、貯藏されるのではなくて、たゞ商品の場所轉換の媒介をするだけだからして、生産はたゞ賣却のための、すなはち、だからして、交換のための、商品の準備地位にすぎないからして、賣却はたゞ他の經濟主體が生産してしまつて同樣に購買者であるといつたようなときにのみ、可能であるからして、全部の生産物量、總ての商品の價格の總額は、購入のために自由に處分しうるやうになつてゐる貨幣額と一致する。從つて、その國民經濟においては從來の生産物以上に作り出された物は總て、購買者を見出さねばならないし、また、見出すことができる、從つて、消費は、生産と同じ範圍において存してゐる。消

費されるといふことばかりでなく、なほまた、誰が消費するかといふことも生産の構造から結果する、なんとなれば、諸の生産者がその商品の代りに獲るところの賣上げ貨幣額は、更に生産物を購買すべき彼等の能力を決定するであらう。彼等が生産物を買ふ限りにおいて、彼等は、かくして、從來の生産の反覆を可能にするのである。生産と消費とは同じ建物の二つの正面である。生産は、所得を作り出すからして消費を可能にする。所得は生産者に、新しい生産行程を創めるための購買力(原料、勞働者等の支拂)を供するからして、生産を更に可能にする。かういふやうにして、個々の生産要素の價格構成が既に、蓄積を、すなはち、生産が後に至つて擴張されうる速度を決定する。

商品生産的の國民經濟の聯關は、それを限界效用學説の視點からして觀察するとき、同一の性質のものであることが明かになる。もとより、出發點はそこでは違つてゐる。限界效用論者は訊ねる、いかなる交換行爲が、その量の限られた財の部分單位に種々なる價値評價が結びつくといふ事情を考慮して、可能であるか？いかなる法則がこの事情を考慮しての財相互の交換を支配するであらうか？價

値並びに、價値によつて決定される價格構成の根本原則からして、個々の要素、生産手段や勞働給付を生産に組み入れることが出てくる。生産は、有用物を持續的に作り出すこととして、この出發點からすると、たゞ次のやうな場合にのみ可能であらう、すなはち、その生産に協力する要素の參加分に對して欲望滿足手段の最大量を實現し、その高さは別樣の使用によつてより以上に高めることのできないとき、そして、交換が生産者に少くとも生産の更新に必要なる生産手段をば再び所有せしめるときである。しかし、この見方にあつては、費用の投下といふ事實は、勞働價値學說において假定されてゐるやうに、交換關係に對する原因ではなくて、反對に、ある生産において費用が再び生産者の手に戻されうるといふ事實が、この生産をはじめて可能にするのである。けれど、これが果してさうであるか、また、いつさうであるかは、價格法則から出てくる。總ての、技術的には可能な生産のうちで、たゞ、價格が少くとも費用を償ふやうな生産だけが經濟的には、存續するのだからして、價格構成過程によつて存在力のない生産は、繰返し除外される。從つて生産物の消費が生産を決定するのである。必ずしも總ての生産が可能ではない、なぜ

なら、生産を以つては、その結果が對應する價値評價に出會ふことの保證はまだ與へられてはゐないから。なほまた、滿足されない欲望衝動をもつた、なんらかの人の欲求が、作り出された商品に向けられてゐるといふのでは充分でないので、この人が充分に澤山の交換手段を所有してをりその上、これをばその生産物と交換に手離さうと思つてゐるのでなければならない。さういふ場合は、この人自身が生産してしまつて、賣ることができるときのみである。從つて、全生産行程は、それが、交換行程であり、そして、その交換行程たるや相關的な(お互に寄り合つてゐる)所得流と價値評價との體系を含むものであるときにのみ可能である。

そこで、發達せる交易經濟においては、われわれの觀察にとつて、購買力を手にしてゐるやうな人々だけが、從つて、またかゝる人々の價値評價だけが問題になる。他の人々の欲望は存在しないのである。購買力を手にしてゐる者は、これまで討究したところからいへは、たゞ、それを生産物(商品)の賣却から得る者だけである。發達せる交易經濟は一つの、商品の交換宇宙である。せいぜい、その購買力をば生産者の手から獲得した(例へば役人)購買者が、なほ、問題になるくらゐのものである。

購買力ある需要、諸の價値評價も亦、たゞ、それらが、具體量の交換財を投じようとする心構へに表はれる限りにおいてのみ、ある役目を務める。それらは、それと共に、現在の市場狀勢における生産物の交換關係を、そして生産が更に營まれるかどうかの問題を決する。だからして、限界效用學說の意味においても、購買者として現はれるの、はいまも亦、たゞ、生産者（並びに、生産から流れ出る「派生的の所得」の收受者）だけであり、そして、生産者は、彼等は彼等で、生産物を賣捌くことができ、だから、購買力ある需要に出合ふ限りにおいて、購買力の把持者なのである。客觀的價値學說においては、勞働價値學說においても、「費用を投じる者」であり、それゆゑに需要し、消費する者としての總ての生産者がさうであるやうに、限界效用學說においては總ての消費者、總ての需要者は必然的に生産者であつて、生産により、また生産において、結合されて一つの社會的聯關をなしてゐる。なんとなれば、たゞこの聯關に組み入れられてゐる限りにおいてのみ、彼等は需要者として問題になるのである。從つて、需要の各に生産が對應し、そして、各の需要は、生産がそれに先行する場合にのみ、發揮することができるのである。需要は一般的には、たゞ、生産を基礎としてのみ

可能である、需要が生産を更に可能にすると同じく。

それで以つて暗示された、交易經濟の聯關はこのものだけに特有である。が、發達せる資本家的交易經濟はそれ以上に、なほ若干の、より進んだ、たゞそれにおいてのみ現はれる特殊性を示してゐる、たゞそれにおいてのみわれわれは「企業者」と「勞働者」との分離をもち、たゞそれにおいてのみ勞働給付と勞働力とは一個の商品であるのである。この特殊性は價格構成において、價格が凝集して所得流となることにおいて作用をもつてゐる。發達せる資本家的經濟においてのみ、われわれは、利子といふ所得流をば、上で論議した場合において、同時に生産の擴張に對する調整機として見出すのである。これに反して、欲望充足經濟における生産の擴張は他の仕方で統制されるであらう、いづれにしても、自働的にではなく統制されるであらう。そこで、發達せる交易經濟の圖象における社會相は、限界效用學説の觀點からして畫く場合にあつても、缺けてはゐない、もとより、それは、それほど顯著には現はれない、そして、多くの限界效用論者は、それは全然無くとも濟むものだと信じてゐた。そのことは、こゝで討究されたところに從へば、事實さうではな

い。そして新しい方の理說は悉く旣にこの方向をとつた。國民經濟における分配過程は主觀的價値學說からしても、その可能性の條件として、たゞ商品生產の運動過程においてのみ把捉することができる。從つて、限界效用學說の土臺からする觀察においても亦生產と消費とは互に交錯する、たとひ、窮極においては、商品生產並びに消費の全體性と、それが相互に織り合はされてゐることゝは主觀的價値評價の構造から說明され、費用投下の事實からではなしに、主觀的價値評價の構造からして明かにされるとはいへ。

一〇　限界效用學說と獨占價格

われわれは上で勞働價値學說並びにそれの結果の說明の際に、勞働價値論者は獨占價格の高さを決定しえないことを見た。彼は、たゞ、獨占價格は自由競爭における價格よりもより高いといふことだけは云へる、が、どれだけ高いかは云ひえない。この困難は限界效用學說にとつては全然存しない。ある生產においてそ

の生産物の製造が獨占されてゐるとすれば、(註二)その剩餘が最大であるやうな價格が獨占者によつて求められるであらうことは明かである。この價格をば、彼は、彼に知られてゐる、市場當事者の價値評價に基き、費用額と結びつけて、極めて容易に發見することができよう。費用財の價値は獨占者にとつては常に「別様の用途」(二五八頁以下)の價値である。彼は費用財の市場價格だけを計算に入れさへすればいゝ。これと生産物の賣却價格との間に、剩餘を表すところのある額が生じるであらう。この剩餘は生産物の單位當りで計算され、作り出された生産物の量が大なれば大なるほど小さく、この量が小なれば小なるほど大きいであらう。假りに從來自由競爭が支配してゐて、その後に獨占が形成されたとするならば、最初は、價格の騰貴と共に、生産物單位當りの剩餘のみならず、全體において、總剩餘が增大することはまづ確であらう。生産の制限が更に進めば進むほど、剩餘は單位當りとしても、また、全生産について觀察しても大きくなるであらう、が、この剩餘の膨脹は、大抵の場合、遞減的であらう、つまり、緩漫になり、遂には剩餘の最大量に達し、そして、それからは更に總剩餘の低下が始まる、剩餘を生産物單位當りに計算す

ればなほ増大するに違ないにも拘らず。獨占價格は、總剩餘が最大量に達すると
ころで定められるであらう。この點が具體的にどこに存するかは、生産の增大ま
たは減少に際して起るところの、消費者の價値評價と費用の變化とに依存する。
しかし、この各の價格は限界效用學說からは容易にわかるし、且、獨占價格が定まる
であらう、ところの位置も、同樣に、總ての所與事實、殊に、總ての價値評價を知つてゐ
れば、「最大量問題」として決定しうるものである。勞働價値學說はこゝで一つの
解きえない問題に當面するが、限界效用學說にとつては、だからして、獨占價格にお
いて問題なるものが全然存してゐない。それは價格一般が呈すると同一の問題
である。

（註一）われわれが獨占といふのは、ある生產を一手に集中すること、或は——經濟的にいへば同じ
ことだが——ある商品の總ての生產者の供給を一手に集中すること、或は競爭價格よりもより、高い價格を強制するための總ての生產者の有效なる協定の意味である。

もとより、それで以つて獨占の經濟理論はまだ盡されてはゐない。わけても自
由競爭をもつた他の領域に對する、獨占の反作用を論議すべきであらう。しかし

そのことは、自由競爭の國民經濟の基礎線だけを畫くべき筈であつたところのこゝでは起りえない。

理論經濟學終

大正十五年三月二十八日印刷
大正十五年三月三十一日發行
昭和二十二年五月　五　日四版發行

理論經濟學
定價四十圓

版權
所有

有澤

譯者　有澤廣巳
譯者　大森義太郎
東京都文京區元町一ノ一五
發行者　中園恰
東京都新宿區神樂町一ノ二
印刷所　研究社印刷所
東京都新宿區神樂町一ノ二
印刷者　小酒井益藏

發行所　東京都文京區元町一ノ一五　明善社
電話小石川一四二〇番

正誤表

頁數	行數	誤	正
序 五	八	英國	イギリス
序 六	四	方法史	方法論史
序 七	十一	呈	呈供
目次 十	十	欲望充足	欲望飽和
目次 十四	十二	決定	規定
本文 十九	二	前者を以て	前者は
十九	五	を指す	である
二二	九	僞制	擬制
二二	十二	僞制	擬制
二三	一	しかし	そして
二三	五	經濟的に支へて	經濟的に自分を支へて
二三	十二	パン	パン屋
二五	二	屑	展
二八	五	合目性	合目的性
二八	八	達せらなる	達せられる
二八	十三	社會經濟學	社會經濟學
三一	四	合計にのいて	合計について
三七	十	經濟行爲	經濟的行爲 以下之に準ず
三八	三	間題	問題
四七	十三	欲望充足	欲望飽和
四八	七	欲望充足	欲望飽和 以下之に準ず
九八	六	基本事實	基本的事實

頁數	行數	誤	正
一二〇	十一	みれと	みれば
一二四	十四	節約するかど	節約するかどうか
一二五	五	機械	機械
一三九	六	みところ	みるところ
一四四	三	價値	價格
一五八	十二	勞動	勞働
一五九	十四	働勞	勞働
一六八	十五	實物	實質
一七三	一	合法性	合法則性 以下之に準ず
一七九	十二	そのが大いきが	その大いさが
二〇〇	八	收容	收容
二二二	九	交換關係	交換比例 以下之に準ず
二二七	一	賣却者	賣手 全部之に準ず
二二七	二	購買者	買手 全部之に準ず
二三一	一	B、	B_{10}、
二三一	六	購買	買ふ 全部之に準ず
二三一	七	賣却	賣る 全部之に準ず
二三五	九	決定	規定
二七六	一	バーウェルクに	バーウェルクが
三〇二	八	なかつた	ない
三〇六	九	明されたとした	明されるとする 以下之に準ず
三一六	二	生産において	生産における
三二二	十五	實物賃銀	實質賃銀